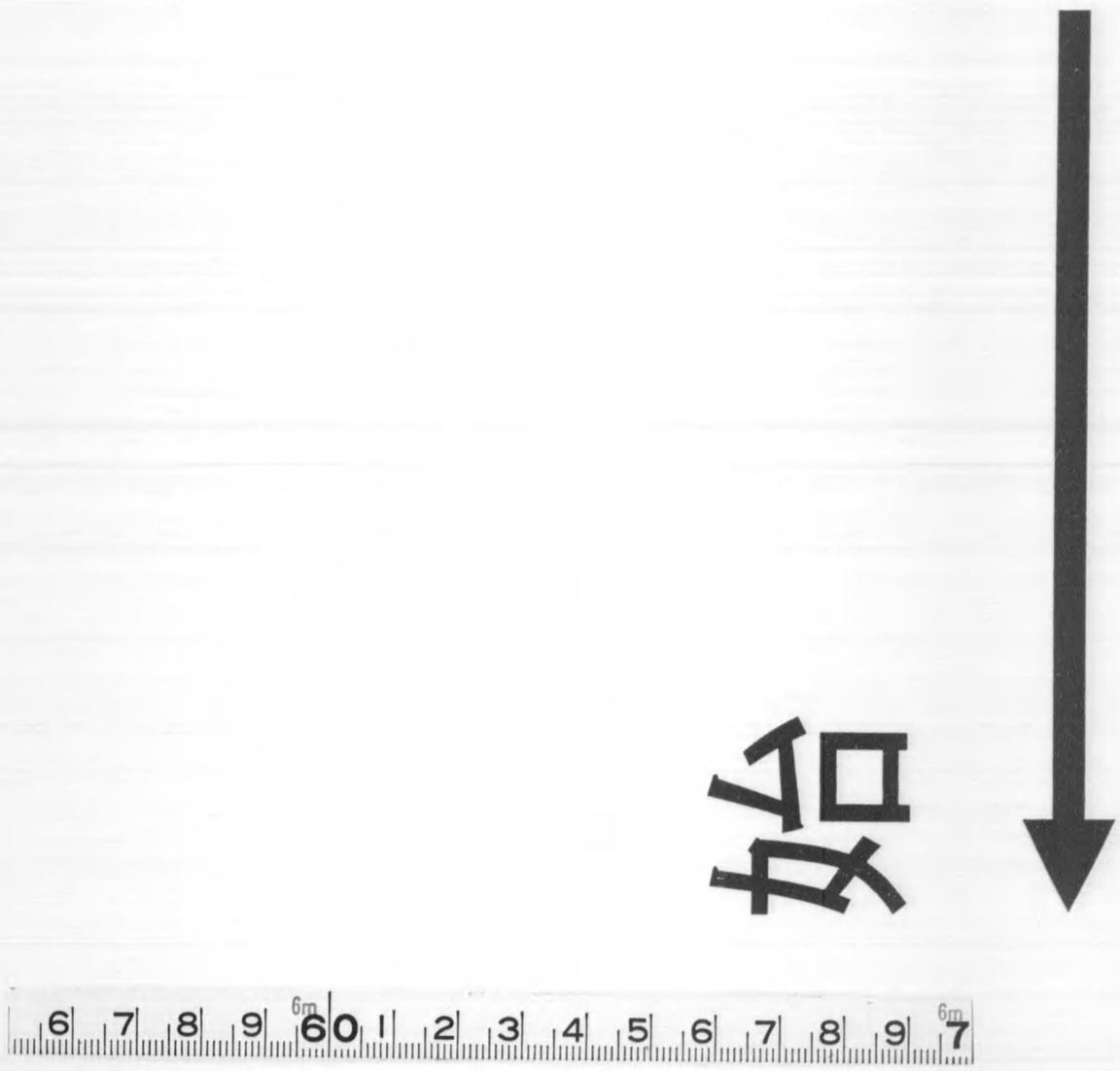
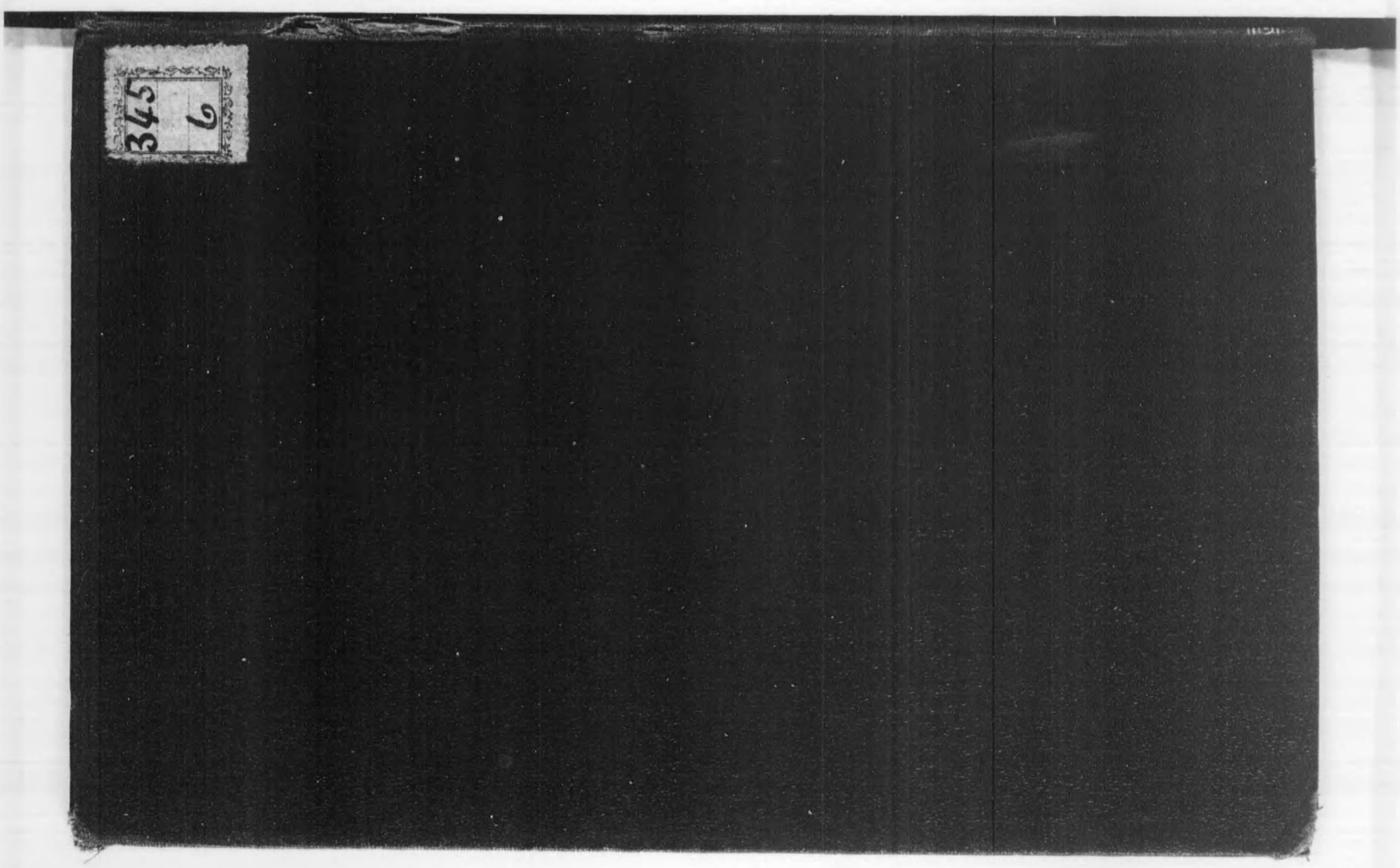

表紙

6m 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6m 7


345
6

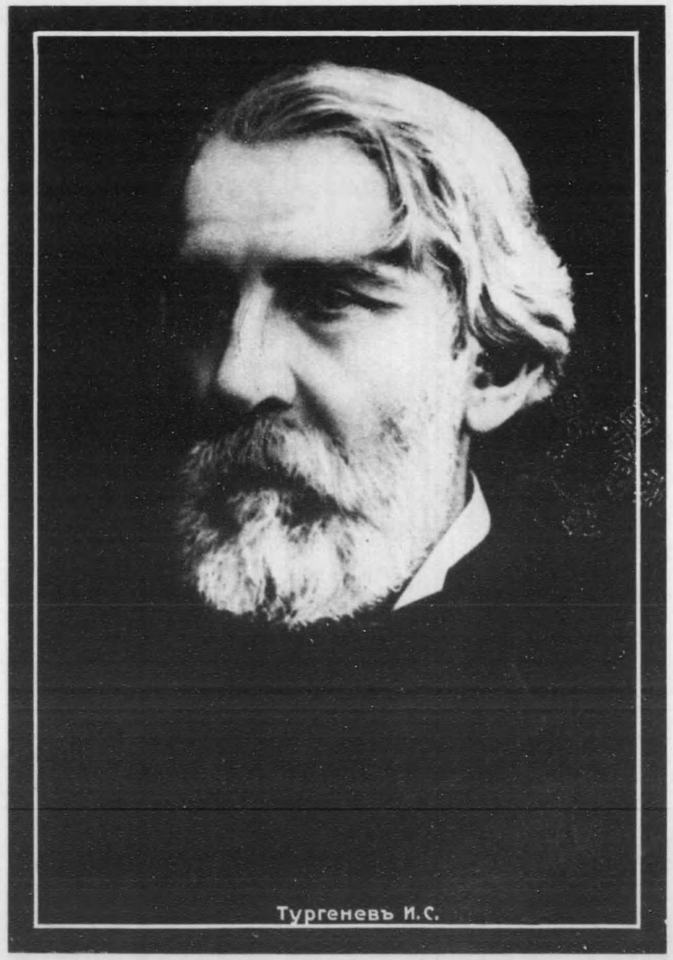
345-6

ツルゲーネフ著
相馬御風譯

處女地

東京 博文館藏版

3. 4. 15



Тургеневъ И.С.

はしがき

一　『處女地』の作者

『處女地』の作者イワン・セルゲーキチ・ツルゲーネフは、レウ・トルストイ及びダスタエフスキーと並んで、十九世紀に於けるロシヤ小説の世界的三大作家である。彼は一八一八年十月二十八日ロシヤの舊都モスクワを西南に距る事凡そ四百ヴョルスト程のオリョールと云ふ市に生れた。父はセルゲイ・ニコライエキチ・ツルゲーネフと云つて、その土地の騎兵聯隊の將校で、母のワルワーラ・ペトローウナ・リユトキノーワも其の土地の生れで豐かな家の娘であつた。而も此の父も母も共に冷酷な貴族主義の人達で、壓制と云ふ事に何の遠慮も覺えない人達であつた。わけてもツルゲーネフの母が自分の家に使つて居る農奴等に對する態度は苛酷極まるものであつた。幼きイワンの優しい心は、常に家庭内のむごたらしい有樣に苦しめられた。冷やかな家庭の壓迫は、おのづから幼きイワンを戸外の自然の懷ろへ追うた。彼の心を育てたものは廣漠たるロシヤの自然であつた。奴隷制度に對する彼の激しい憎惡と自然に

對する熱烈なる愛とは、既にもう幼い頃からツルゲーネフの心に燃えて居た。

一八二八年ツルゲーネフの一家はモスクワへ引き移り、一八三五年に父は此の世を去つた。その年イワンはモスクワ大學へ入學したが、父の死後家庭内に於ける母の專横が一層甚だしくなつたので、イワンは間もなくモスクワ大學を去つてペテルブルグ大學に轉じた。彼の修めて居た學科は博言學であつたが、彼はもうその頃からちよい〳〵詩を作り初めて、敎授プレトネフを初め友人間にも未來の詩人として囑目されて居た。一八三八年ペテルブルグ大學を卒業するとすぐに、ツルゲーネフはベルリンへ遊學した。幼い頃から日一日と募つて來たロシヤの地主生活や農奴制度に對する彼の憎惡は、今は更に西歐の自由思想に對する憧憬となつた。そして一八四一年新らしい光に輝いた眼を見開きながら、若きツルゲーネフはロシヤの故郷へ歸つて來た。併し新らしい思想を抱いた彼は、つひに再び彼自身の母と相容れる事が出來なかつた。歸來間もなく彼は母の家を追はれて、漂泊の人となつた。此の貧しい漂泊生活の間に、彼は始めて世に問うべき作物を書いた。それは『バラーシャ』と題する叙事詩で、バイロンやプーシキンの作物から暗示を得たロマンチックな物語を、彼獨特な寫實の筆致で描えたものであつた。此の詩は初めT.L.と云ふ匿名を以て公にされたのであるが、思ひがけ

なくそれが時の批評家ビエリンスキーの認めるところとなつて、いつしなくイワン・ツルゲーネフの名が、ロシヤ新進の詩人として廣く喧傳されるやうになつた。これがツルゲネーフが藝術家としての生涯の端緒であつた。

けれどもツルゲーネフをして眞にロシヤ文壇の權威たらしめたものは、一八五一年に『獵人日記』の名を以て公にされた農民生活に關する二十四篇のスケッチである。當時の讀書社會に對する此の作の効果は實に驚くべきものであつた。蓋しロシヤの讀書社會が此の書の如き農民や農奴に同情のある物語を讀んだのが、初めてであつたからである。當時皇太子であつたアレキサンドル二世が、後年ツルゲーネフに向つて「自分は『獵人日記』を讀んで初めてロシヤが多年希望して居た自由を與へやうと決心したのである」と語つたと云ふ事は名高い話であるが、それだけで見ても如何に其の作品の効果の大なるものであつたかを察せられる。一八六一年に於けるロシヤの農奴制廢止には、此の『獵人日記』が與つて力あるものと云つてよい。ロシヤに於けるツルゲーネフの墓標に「斷たれた鎖」が飾となつて居るのは、此の事實を永く後世に傳へんが爲めだと云ふ事である。

併し後年から見て如何に讃美すべきツルゲーネフの功績も、その當時の實世間にあつては

決してさう公には認められて居なかつた。否寧ろ當時のロシヤ政府は、ツルゲーネフの小說の傾向に對して、極めて惡意のある眼を向けて居た。そして一八五二年二月ゴーゴリの死に際してツルゲーネフが偶々それについての哀悼文を公にしたのを機會として、つひに檢閲令違反の廉で彼を拘引して、一ヶ月の監禁と二個年の閉門とを宣告した。

此の殘酷な壓制の下にツルゲーネフの思想はます〳〵反露西亞的となつて行つた。そして再び自由の身となるや否や彼は永久にロシヤを去る事となつた。その後の彼の全生涯は數度の一寸した歸省と、折々の外國旅行を除く外、すべてフランスのバリーで暮された。ゾラ、フロオベル、ドーデー、ゴンクウル兄弟、モウパッサン等と共に、その後のツルゲーネフは、まるでフランスの小說家と云ふ觀がある。かくの如くして一八八三年九月三日六十五歲を以てパリーに於けるヴィアルドー夫人の家で、彼は孤獨な漂泊者の如き死を遂げた。

二　ツルゲーネフ著作年表

永いさびしい漂泊生活の間に書いたツルゲーネフの作品は、一々數へ上げると非常な數になるのであるが、その多くのうちから特に重要なものだけを擧げて年代順に並べて見ると先づざつと次の如くである。

一八四七―一八五一年　『獵人日記』(Zapiski okhotnika)
一八五〇年　『餘計者日記』(Dnevnik lishnjago cheloviieka)
一八五一年　『田舍女』(Provintsialka)
一八五二年　『ムムー』(Mumu)
一八五三年　『二人の友達』(Dva priiatelia)
一八五五年　『ルーヂン』(Rudin)
一八五七年　『ファウスト』(Faust)
一八五八年　『ヤコフ・パシンコフ』(Iakov Pasynkov)
一八五九年　『森の旅』(Poiezdka v poiesie)
一八六〇年　『アーシヤ』(Asia)
『貴族の巢』(Dvorianskoe gniezdo)
『その前夜』(Nakanunie)
『初戀』(Peryv)

一八六一年	『ハムレットとドンキホーテ』
一八六二年	『父と子』 (Ottsy i dieti)
一八六六年	『幻影』 (Prizraki)
一八六七年	『犬』 (Sobaka)
一八六八年	『煙』 (Dym)
一八六九年	『薄命な少女』 (Neschastnaia)
一八七〇年	『妙な話』 (Strannaia istoriia)
一八七一年	『曠原のリア王』 (Stepnoi Korol' Lir)
一八七四年	『春潮』 (Veshniia vody)
一八七六年	『プーニンとバブリン』 (Punin i Baburin)
一八八一年	『處女地』 (Nov')
	『夢』 (Son)
	『勝ち誇れる愛の歌』 (Piesn torzhestvuiushchei liubov)
	『知る人及び知らぬ人の断片的追懐記』 (Otryvki iz vospominanii svoikh i cbuzhikh)
一八八二年	『散文詩』 (Stikhotvoreniia v prozie)
	『クララ・ミリチ』 (Klara Milich)

三　ツルゲーネフの作品の特色と『處女地』

前にも述べた如くツルゲーネフが、トルストイ及びダスタエフスキーと共に近代ロシヤ文學の三大代表作家の一人に加へらるべき事は、殆んど動かし難い定評である。現代ロシヤの代表的批評家と目されて居るメレジコウスキーもその事を明らかに述べて居る。

『ツルゲーネフ、トルストイとダスタエフスキーとはロシヤ小説の三典型的代表者である。ガンチャロフは決して彼等に劣るものではないが、幾分隔りがあつて、彼等一人で一つの階級に置かるべき作家である。』

と。更にメレジコウスキーは以上の三典型的代表者としてのツルゲーネフの特色を次の如くに説明して居る。

『ツルゲーネフは藝術的要素を代表する。そこに彼の强味があり、同時に又一方に偏した點で

がある。彼は美を喜ぶことあまりに安易で、それが彼をして人生に和睦せしめる。ツルゲーネフの眼は人間の精神を測つたよりも更に深く、更に鋭く、自然の精神を探つた。彼はレウ・トルストイやダスタエフスキー程の心理學者ではない。而も彼は常人が殆んど取るに足らない微々たる役目を務めて居る全宇宙の生命に就て、何と云ふ理解を示して居ることだらう、何と云ふ純潔が彼の詩を光彩あらしめて居ることだらう、何と云ふ樂音が彼の一語一語に鳴り響いて居ることだらう！　一度彼の詩の諧調に身を浸す時は、感情は次第に一に歸して人生は唯その爲めにのみ存在し、人は其の美を悅樂すべきものゝやうに思はれる。』

ノルウエーの批評家ゲオルヒ・ブランデスも亦これと同じやうな事を云つて居る。

『すべてのロシヤの散文作家のうちで、ツルゲーネフは最も偉大なる藝術家である。』

ドイツの批評家ブリユックネルも矢張同じやうな事を云つて居る。

『ツルゲーネフは散文に於けるプーシキンである。』

要するにその文章の藝術味の豐かな點に於て、ツルゲーネフに匹敵すべき作家は、近代のロシヤに於ては勿論、その他のヨーロッパ諸國に於ても、さう多くはないと云ふのが定評である。

「彼は形式の完成者である」と云つたブリユックネルの評語は蓋し過褒ではなからう。

更に內容の上からツルゲーネフの作品の特色を觀ると、そこには最も著しい二つの面がある。一つは自然そのものに對する彼獨特の一種の詩的情調で、一つはロシヤの實社會そのものに對する一種の文明批評家的特色である。而して前者に對する解說としては、ブランデスの評語が最もよく肯綮に値する。

『廣い深い幽欝の波がツルゲーネフの思想を一貫して流れて居る。隨て又彼の著書を一貫してそれが流れて居る。彼の文體が眞面目で非人情的であるにも拘らず、又彼は彼の小說や物語中に未だ曾て詩を挿入するやうな事は殆んどしなかつたにも拘らず、しかもなほ彼の全體の叙述は一種の抒情的印象を與へる。それほど多分の感情が作品中にコンデンスされて居る。そしてその感情は無論悲哀の感情である——それは咏嘆的でないある特殊の驚くべき悲哀である。‥‥近代のロシヤの詩人は凡て幽欝である。けれどもツルゲーネフの幽欝は人間のあらゆる理想——正義も、理性も、最上善も、幸福も——凡ては大自然にとつて何でもないもので、彼等みづからの精神力によつて彼等みづからを主張することの決してないものであると云ふ事を理解した思想家の幽欝である。‥‥ゴーゴリの幽欝であるのは彼が怒りつぽいからである。ダスタエフスキーの幽欝であるのは、無智なもの、見すぼらし

いもの、聖人の如き高尚な純潔な心を持てるもの、又は男女の別なく罪ある者に對してまでも彼が同情に溺れて居ると云ふ事實に由來する。而してトルストイの幽鬱であるのは、彼の宗教的運命觀に根柢を置いて居る。ツルゲーネフひとり哲學者である。……彼の幽鬱は、隨つて、宗教的であるよりも寧ろ哲學的である。』

ツルゲーネフの作品の內容的特色の一面はたしかに以上の說明によつて悉されて居ると云つても好い。彼の作品を讀む者は、誰しもその全體を一貫して一つの大きな人間性そのものゝ悲しみとも云ふべき悲哀感に撲たれるに違ひない。あらゆる人間の理想を以てしても、なほ且大自然の前に人間の如何に無力であるかについての底知れぬ悲哀感が、それである。

ブランデスは更に語をついで云ふ。『けれどもツルゲーネフをして厭世主義者たらしめた所以のものは、彼が愛國主義者であつた事にある、彼は外見に於て世界主義者であつたにも拘らず、內心に於ては彼は愛國者であつた、併しそれは自己の祖國に對して悲しみ且絕望した愛國主義者である』と。而して吾々はこゝに更にツルゲーネフの藝術の他の一面の存する事を觀取するのである。『ルーヂン』に於て『父と子』に於て、更に『煙』に於て、更に此處に紹介する『處女地』に於て、吾々が最も鮮やかに讀み得るところの彼の特色は、彼が如何に彼の時代の

ロシヤ社會について、又その社會特有の思想狀態について、更にそれらの辿り行くべき運命について、熱心な且冷やかな觀察者であり批評家であつたかと云ふ事實である。就中作者最後の長篇である此の『處女地』一卷はツルゲーネフが五十八歲の時の作であるが、如何に當時のロシヤ社會に向つての痛切な批評であつたかを思ふとき、吾々は今日のわが日本の社會が如何に此の種の忠實なる批評家に於て貧しきかの嘆きを併せ感じないわけには行かぬのである。而も吾々は此の他國の社會史の一篇から、如何に吾々自身の生活にとりての痛切なる批判の言葉を聞くものぞ。

たゞ願くば此の作を單に一八六〇年代のロシヤ社會の批判とのみ觀ないで、更に作全體を一貫して深く〳〵藏された作者自身の人間生活そのものに對する永遠的な批判を充分に味ひたいものである。ネヅダーノフの生活、ソローミンの生活、バークリンの生活、マリアンナの生活――その他凡ての人々の生活の意味は、又同時に吾々自身の生活の意味であるからである。而してそれらさま〴〵の生活を通じて、更にその底に一貫した作者自身の生活の意味も、亦同じく吾々自身の生活の意味でなければならぬ。吾々はその生活の意味のうちに、更にさらに吾々自身の僞らざる生活の道を切り拓いて行かなくてはならない。

大正三年三月十一日夜

相馬御風

（本書の譯譯は主としてコンスタンス・ガアネットの英譯により、アスター版の英譯を參照しつゝ、重譯したものである事を附記して置く。）

はしがき終

處女地

處女地を耕すのは表面を掠る耙ではいけない。土に深く喰ひ入る犁を使はなくてはだめだ。――或る農夫の手帳から――

一

一八六八年の春の或る日の午後一時頃、ペテルブルグで、無造作な汚ない服裝をした二十七の男が、役人町のとある五階造りの家の裏階子を昇つて行つた。踵の減つた上靴を重く踏み付けながら、動く度に大きな見苦しい圖體をぐたり〳〵と搖ぶりながら、其の男は結局階子段を昇り切り、蝶鉸が外れて半ば開けッ放しになつて居る扉の前に立ち留つた。そして呼鈴を鳴らさずに、がさつな咳拂ひを一つしたゞけで、彼は狹い控の間へと這入り込んだ。

『ネヅダーノフは在宅かね。』と彼は深い高い聲で呼んだ。

『居ません――私が居ますからお這入んなさい』と云ふ他の人の聲が次の部屋から聞えた。女の聲だ。而も何方かと云へば荒々しい女の聲だ。

『マシューリナかね。』と新來の客が訊いた。

『然う、私ですよ。貴方は――オストロデューモフ？』

『ピメン・オストロデューモフ』と彼は答へた。そして先づ第一に念を入れてゴムの上靴を脱ぎ取り、次に擦り切れて絲目の見えるまでになつた小さい古い外套を釘に掛けて、彼は女の聲のした部屋へと這入つた。

それは天井の低いむさ苦しい部屋で、壁は汚れた綠色をして居り、二つの埃だらけな窓硝子を透して薄暗い光線が射して居る。部屋の中にある家具と云つては隅の方に小さい鐵製の寢臺が一つ、眞中に卓子が一つ、椅子が二三脚、それと書物の詰込まれた本箱が一つあるばかりであつた。卓子の傍に帽子を冠らない、黑い毛織の寬衣を着た三十格好の一人の婦人が卷煙草を吹かして居た。オストロデューモフの這入つて來たのを見て、彼女は無言のまゝ彼女の廣い、赤い手を其の方へ差出した。彼も亦無言のまゝ握手の禮をし、直に椅子に身を埋めて、側衣囊から吸ひ餘しの葉卷煙草を取り出した。マシューリナが火を遣ると彼はそれを吸ひ始

めた。そして一言も口を利かず眼さへ見合はさずに二人は、さなくとも煙草の香の泌み込んで居る流通の惡い部屋の空氣の中へ、無暗と青い煙の環を吹き出した。

此の二人は顏容が似て居ないに拘らず、何處か共通した所があつた。むさ苦しい身裝、荒れた唇、齒、聲、それ等の何所やらに正直と堅忍と勤勉の風が見られた。オストロデューモフの方は又痘瘡の痕が著しかつた。

『ネヅダーノフに會つたんですか』とオストロデューモフはとう〳〵口を開いた。

『えゝ。直に歸るでせうよ。圖書館へ書物を持つて行つたんですから。』

オストロデューモフは側を向いて唾を吐いた。

『先生近頃は始終うろつき廻つて居るやうだが、一體何うしたもんでせう。一寸も姿を見せないんですからね。』

マシューリナは又しても卷煙草を取上げて、それに火を付けながら、

『當惑して居るのです。』と言つた。

『當惑！』とオストロデューモフは責めるやうな調子で鸚鵡返しをして、『何て我儘なことだ人はあの男のする仕事が吾々の方面にないのだと思ふかも知れないが、兎に角吾々は現に凡

ての仕事に對して適宜にやり遂げて行くやうに祈つて居るぢやないか。それだのに、あの男は當惑してる！』

『モスクワから、何か通信がありまして？』と暫く默つて居た後でマシューリナが訊ねた。

『左樣……一昨日。』

『貴方はそれをお讀みになつたのですか。』

オストロデューモフはたゞ僅かに肯いたゞけであつた。

『で……何んな事でしたの？』

『さあね――何れ誰か行かなくちやなりますまいて。』

マシューリナは卷煙草を口から離した。

『何うしてゞせう。彼地では何もかも好く行つてるやうな話でしたのにねえ。』

『然う、何もかも好く行つて居る。たゞ或る一人の男が賴りにならぬ事を露顯したのだ。そこで……吾々は其奴を去らすか、さもなければ根本的に其奴を除けて了はにやならんのだ。あゝ、それから未だ他にいろんな事がある。貴方にも賴む筈です』

『手紙でゝすか。』

『然うです。』

マシューリナは重たい髪の毛を背後へ拂ひ退けた。背後で無造作に小さく結ばれた髪の毛は、前の方へ蔽ひ懸つて、額や眉までも隱すばかりになつて居た。

『宜しいですとも。』と彼女は叫んだ。『命令が與へられる以上はかれこれ議論する必要はありませんわ。』

『無論です。たゞ併し金が無くちややれないが、其の金を何處から得て來たものでせう。』

マシューリナは當惑して、『ネヅダーノフが拵はなくちやならないでせう。』と獨言のやうに低い聲で言つた。

『其の事でゝすよ、僕の來たのは。』とオストロデューモフが言つた。

『其の手紙をお持になりまして？』とマシューリナは突然訊ねた。

『えゝ、讀んで見たいんですか。』

『えゝ、頂戴な……いえ、それには及びませんわ。一緒に讀むことにしませう……後でね。』

『僕は本當の事を言つてるんですからね。』とオストロデューモフは呟いた。『疑ぐるにや及びませんよ。』

『然うですとも、私、疑ぐりなんかしませんわ。』

そこで二人は又沈默に陷つた。そして前と同じく煙の環だけが二人の默つた唇から漂ひ出て、ゆら〳〵と渦きながら髪の亂れた二人の頭の上へ舞ひ上つた。

上靴の音が控の間から聞えた。

『來ましたわ。』とマシューリナが囁いた。

扉が輕く開いた、其の開いた所から頭が一つはみ出た——併しそれはネヅダーノフの頭ではなかつた。

それは粗い眞黑な髪の毛、廣い皺のよつた額、もぢや〳〵の眉毛の蔭の酷く鋭い、小さな鳶色の眼、家鴨の鼻のやうに突出た鼻、至つて小さな、薔薇色をした、可笑味のある口を有つた小さな圓い頭であつた。其の頭はぐるりと四邊を見廻して、肯いて、笑つて——小さい白い齒並を見せて——さて部屋へと這入つて來た。小ぽけな胴と、短い腕と、そして幾分跛を引いた足とが後から續いた。マシューリナとオストロデューモフとは直に其の頭を見付けて、二人とも內心『何だ此奴か』と云つて居るやうな、輕蔑の表情を顏に現した。而も彼等は一言も口を利かず、身動ぎもしなかつた。併し其の與へられた應接は唯に客をまごつかす事に失敗したばかりでなく、却て彼に積極的な滿足を與へた事が明かであつた。

『こりや一體、何う云ふ事ぢやな。』と彼はきい〳〵云ふ聲で言つた。『二部合唱で御座るかな？　何うして又三部合唱と御座らなんだね。して一番のテノルは何處に御座るかな。』

『ネヅダーノフの行方を訊ねる意なんですね、バークリンさん。』とオストロデューモフは眞面目な顏で訊ねた。

『如何にも左樣です、オストロデューモフ君。あの人の事を言つた意なんですよ。』

『それなら、多分直に來るでせうよ。』

『それは大層喜ばしいことで。』

小さな跛の男はマシューリナの方へ向いた。彼女は眉を顰めながら坐つて居た。そして何か考へ込むやうにして卷煙草を吸ひ續けた。

『御機嫌は如何ですね、我が親愛なる……我が親愛なる　その、えゝ、困つた！　僕は毎も貴方のお名前と、父御のお名（ロシヤでは人の名を丁寧に呼ぶ場合には常に父の名を添へる）を忘れるのでしてな。』

マシューリナは肩を搖つた。

『そんな事を御存じになる必要がないでせう。貴方は私の苗字を御存じで被居しやる。それ以上何が要りませう。それにまあ、何と云ふお訊ねでせう、御機嫌は如何なんて。私が斯うやつて丈夫で生きて居るのが貴方には分らないのですか。』

『御尤も、如何にも御尤もです。』とバークリンは鼻をふくらませ、眉をよせて叫んだ。『貴方が生きて被居らぬとすると、貴方の下僕たる吾輩は、此處に斯うやつて拜謁してお言葉に接するの歡びを得られなかつたでせうからねえ。なあに、僕のお訊ねする事なんかは昔からの惡習として退けて下すつた方が宜しいのです。だが、貴方のお名前と父御のお名前は……何しろ御存じの通り、マシューリナと大膽にお呼びするのは何方かと云ふと甚だ失禮な譯ですからな。眞實のところ、貴方がお手紙にまで然うお書きになるのはよく承知して居ります。ボナルト……と云ふのは覓りマシューリナと云ふのと同じでしてね。それはそれとしたところで、會話の上では――』

『ですけれど、誰が貴方に私とお話なさるやうに頼みまして？』

バークリンは恰で息づまりさうに、神經質な笑ひ方をして笑つた。

『いやそれで、最う充分――さあ、握手して下さい。拗ねちや可けません。貴方が世界中で一

番善い心の女だと云ふ事は、ちやんと心得て居る私ぢやありませんか。それに私とても同じく心の善い事にかけちやね……えゝ？』

バークリンは手を差出した……マシューリナは曇つた顔付で彼を見た。それでも握手はした。

『實際、私の名を何うしても御存じにならなければならないのでしたら、』と彼女は同じ陰欝な顔で言つた。『それならば申しますわ。私の名はフェクラです。』

『それから僕はビメン。』とオストロデューモフは固有の低音で言ひ添へた。

『いや、如何にも……如何にもよく解りました。だが、それは然うとして、ね、フェクラさん、それから貴方、ビメンさん、何故貴方々は僕に對して然うよそ〳〵しくなさるのですね。恐しくよそ〳〵しい貴方々の樣子は、一體何うしたものです。僕の方では此の通り……』

『マシューリナの考へでは、』とオストロデューモフはそれを遮つて言つた。『いや、それはマシューリナばかりではないが、一體貴方は何事をも茶化してかゝつて居られるので、貴方に對しては信用が置けない、然う云ふ風に思つて居るのです。』

バークリンはきつく踵を廻して、向を變へた。

『あの女が――いや、最も名譽あるビメン閣下、一體世間の人達の常に私を批評して居る考へは、凡て間違つて居るのですよ。第一、僕は何時も笑つてなんか居ません。隨つて其の事が僕に對する貴方々の信用を損ふと云ふやうな事はない筈です。實際、其の事は僕が幾度となく貴方々のお仲間からちやほやされた事でも解る筈です。僕は元々正直な人間なんですよ。最も尊敬すべきビメン閣下！』

オストロデユーモフは齒の間で何かぶつ〳〵言つた。と、バークリンは首を振つて又しても同じ事を言つた。併し最う一寸した笑顔の跡すらも見られなかつた。

『何うして、僕は何時も笑つてなんか居る人間ぢやない！　氣輕な男と云ふだけの事ですよ御覽を願ひさへすれば、それで何も文句はないんですあ。』

オストロデユーモフは彼の方を見なかつた。が、實際バークリンが笑ひもせず、何も言はないで居るのを見ると、彼の顏は殆ど憂鬱に近く、恐怖に近い表情を帶びて居た。それが少しでも口を開くと直に滑稽な、ともすると意地惡さうにさへ見えるのであつた。オストロデユーモフは何とも言はなかつた。

バークリンは再びマシューリナの方を向いた。

『それは然うと、貴方の御研究は何んな風に御進行ですね。貴方の所謂眞の博愛的技術は好く行つて居ますかな。いや、お察しします。何の經驗もない者を日の光を見せるまでにしてやると云ふ事は、なか〳〵容易ならぬ事でせうよねえ。』

『いゝえ、些も難しい事ぢやありませんよ。生れる子が貴方以上に大きくさへなければ。』と産婆の免狀を取つたばかしのマシューリナは答へて、如何にも滿足さうな笑顏を見せた。一年半ほど前に彼女は、自分の身うちの或る南ロシヤの貧乏貴族の家を捨て僅か六ルーブルの金を懷にしてペテルブルグへとやつて來た。そして或る產婆の會へ入つて奮鬪の結果、望みに望んで居た免狀を得たのであつた。彼女は獨身者であつた……而も非常に身持の好い獨身者であつた。疑り深い人は外面だけからそんな事を言つたつて、何の不思議もない事だと言ふかも知れぬ。併し兎に角驚嘆に値する稀な所のある女だと云ふ事は此處で言はして置いて貰ひたい。

バークリンは彼女の答へを聞くと又しても笑つた。

『貴方はなか〳〵隅に置けない人だ！』と彼は叫んだ。『好く僕を引出して下すつた。僕はそれが相當なのです。だが、何故僕は此のやうな侏儒のまゝで居なくてはならなかつたんだ

らう。いや、それはそれとして、此家の大將は一體何うしたんでせうね。』

バークリンは故と話題を變へた。彼は並外れて小さい自身の身體を自ら認めるに堪えなかつたのだ。彼は熱心なる女性崇拜家であるが故に、一層深く其の事の苦しさを感じた。女の心を引付ける爲めには何一つ彼の惜む物があらう。生れの卑しい事や、社會上の地位の低い事よりは自分の憐れむべき容貌の意識が彼に取つては何れ程苦しい傷であつたか知れない。

バークリンの父は唯の商人で、色々のごまかし事をやつて兎に角名義だけの議員まで身を起した人であつた。訴訟事にかけての腕利きの代言人で、投機師の仲間にも入り、家屋地所等の仲買もやつて居た。可成りの財産を拵へるには拵へたが、死ぬまで飲み通したので、死んだ後には何一つ殘つた物はなかつた。息子のバークリン（名前はシラ・サムソニッチ、即ち意味から云へば力の權化サムソンの子と云ふのであつたが、自分では矢張りそれを一種の嘲笑だと思つて居た）は商業學校で敎育を受けた。語學はずつとドイッ語を習つて居た。さま〳〵な、何方かと云へば餘り好ましからぬさま〳〵な經驗を閲した後で、彼は最後に或る商館へ約百五十ポンドの年給で入つた。そしてそれだけの金で彼は自分の身と、病人の伯母と、僕背の妹の生活を支へて來た。彼の年は今二十八である。彼は多數の學生に知合があつた。

それは何れも彼の皮肉の才や、氣輕な開放しの毒舌や、偏頗ではあるが純な衒氣のない學識を愛する若い人達であつた。たゞ時々彼は其の人達の爲めに苦しめられる事があつた。或る日のこと彼は或る政治上の集りに定刻よりは幾らか遲れて來た事があつた……で、會場へ這入るや否や、彼は慌てゝ言譯を始めた……

『憐れなるバークリンは怖れてありき！』と誰やらが隅の方で唄ひ出した。皆は一勢に笑ひ囃した。とう〳〵バークリン自身も、心中大に苦しかつたにも拘らず笑ひ出してしまつた。

『眞實のところをぬかしやがつた。畜生』と、彼は自ら思つた。彼がネヅダーノフと知合になつたのは或るギリシャ料理屋で、彼が毎も飲みに行つて、毎も開放しな傍若無人の氣焰を揚げて居る家であつた。彼は毎も自分の平民的精神の主な原因は肝臟を苦しめる厭なギリシャ式料理法にあるのだと公言して居た。

『然うだ……眞實……此家の大將は一體何うしたんだらう？』とバークリンは前と同じ事を言つた。

『何うも此の頃の樣子では、先生少し何うかして居る、戀に陷つたと云ふ譯かな——呪ふべきかなだ！』

マシューリナは眉を顰めた。

『書物の事で圖書館へ行つたんです。あの方には戀をする暇なんかありませんし、又戀の對手になる人もありません。』

『何ですッて、』斯う殆ど唇から出さうになつたが、『是非、會ひたいんだがな。』とバークリンは大きな聲で言つた。『何しろ或る重大事件に就て話したい事があるんですからね。』

『何んな風の事です？』とオストロデューモフは言葉を挾んだ。『吾々の仕事ですか。』

『多分、貴方々の事にもなるでせう……竟り吾々に共通した事なんですからね』

オストロデューモフは『ふうむ、成る程。』と呟いた。心中頗る疑はしいものがあつたが、やがて彼は思ひ返した。『誰が？　こんな鰻のやうなぐ〳〵野郎に！』

『漸と來ましたわ。』と突然マシューリナは言つた。そして控の間の扉を見つめた彼女の小さい可愛げのよい眼の中に、何か知ら溫かな優しい思ひが閃めいた。心の底の輝きを見せるやうな何物かの影が閃めいた。

扉が開いた。そして今度は一寸した帽子を冠り、腋に一束の書物を抱へた二十三の青年――ネヴダーノフ其の人が這入つて來た。

二

自分の部屋に居る客を見て彼は戸口に一寸立ち留り、一目に皆を見渡して、帽子を脱ぎ捨て書物を床へ投げ出した。そして一言も口を利かずに寢臺の傍へ行つて、其の端へ腰を降した波打つた栗色の髪の毛の濃い赤味との對照から一段と白く見える彼の美しい白い顔は、不滿と困惑の表情を現して居た。

マシューリナは唇を嚙みながら、心持顔を反けた。オストロデューモフは唸るやうな聲を出して、『とう〳〵！』と言つた。

バークリンは先づ第一にネヴダーノフに近づいた。

『何かまづい事でもあるのかね、アレキセイ・ドミトリエヰチ！　ロシヤのハムレット！　誰か怒らすやうな事でもしたのかね。それとも會體の知れないメランコリーかね。』

『何うぞ、止してくれ、ロシヤのメフイストフエレス！』とネヴダーノフは苛立しく答へた。

『僕はそんな鈍間な氣の利き具合で、君の喧嘩對手になるやうな人間ぢやないよ。

『君は甚だ物の言ひやうの判然しない人だね。氣が利いて居るとすれば、鈍間ではない。鈍

間だとすれば氣が利いて居ない譯だ。』

『御尤も、御尤も……君は頓智の好い男だよ。皆よく知つて居るさ。』

『それは然うと、君は酷く神經が昂つて居るね。』とバークリンは懶さうに言つた。『それとも、實は何事か起つたのかい？』

『別に是れと云ふ事もなかつたのだがね。併し何かあるとすれば、まあ、斯う云ふ事だ。竟り此のペテルブルグのやうな汚れた都會の街中へ足を踏み入れる以上は、何か知ら卑しい事や馬鹿げた事や、怖しい不正な事や、腐敗した事に出遇さないで居ると云ふ事が、何うしても出來ないと云ふことさ。こんな處の生活は最う〳〵到底も我慢がしきれない。』

『其の事だね。君が家庭教師の口を求める廣告を新聞に出して逃げ出す用意をしたと云ふ理由は？』とオストロヂューモフは再び唸るやうな聲を出して言つた。

『僕は然う思ふんだ。竟りあらゆる生の歡びを以て、僕は此處を去らうよ。何處かの馬鹿者が、僕に何等かの位地を與へてさへくれゝばね！』

『貴方は何よりも先づ此處で、貴方の務めをお果しにならなければなりませんわ。』と矢張り顏を反けたまゝで、マシューリナが意味ありげに言つた。

『と云ふと？』と鋭く彼女の方へ向き直つてネヅダーノフは問返した。

マシューリナは唇を固く結んだ。

『それはオストロデューモフさんがお話なさるでせう。』

ネヅダーノフはオストロデューモフの方へ向いた。併しオストロデューモフは僅かに咳拂ひをして、『一寸待つて下さい。』と不平らしく言つたゞけであつた。

『いや、冗談は最う止さうよ、全くね。』とバークリンが口を挾んで、『君は何かよくない事を聞きはしなかつたかね。』

ネヅダーノフは恰で或る力が彼を突き上げでもしたやうに寢臺の上へ彈ね上つた。

『是れ以上、何んな惡い事があると言ふんだい。』と彼は叫んだ。彼の聲は突如として昂まつて來た。『ロシヤの半ばは餓死しやうとして居る。モスクワ新聞は勝ち誇つてる。彼等はクラシ、ズムを引入れやうとしてるんだ。學生の慈善倶樂部は禁じられた。到る所探偵や、迫害、や裏切りや、嘘吐きや奸策が行はれて居る――僕等は最う何方へ向いても一歩たりと踏出す事が出來ないんだ……それでも未だ此の男（バークリンを云ふ）は、充分でないと云ふのだ――未だ何か新しい惡い事を待ち設けて居る。僕の言ふ事を冗談だと思つて居るのだ……バザ

ノフは拘引されたぞ。』と彼は稍々聲を低めて言ひ足した。『圖書館での噂を聞いたんだ。』

オストロデューモフとマシューリナは二人共同時に首を上げた。

『ねえ、君、アレキセイ・ドミトリエキチ。』とバークリンは口を開いた。『君は亢奮して居る——それは不思議はない……併し君は吾々の生きて居る時代は何んな時代で、國は何んな國だと云ふ事を忘れたのかね。好いかい、吾々の間では溺れた人間が、自分で自分の攫る藁を拵はにやならないんだよ。然う云ふ場合に臨んでセンチメンタルになつて見たところで、それが何の役に立つものか。宜しく眼を開いて、暗黑面のどん底まで見究めなけりやならない。併し赤兒のやうに激昂の中へ飛込んでしまふやうな事があつてはならないんだ。』

『まあ、何うぞ止してくれ給へ。』とネヴダーノフは苛立しくそれを遮つた。顏は如何にも苦しさうな表情を現した。『解つてるよ。君は精力の人だ。何物をも怖れず、何人をも怖れない人だ——』

『僕が何人をも怖れないつて——！』とバークリンは何か言ひかけた。

『何奴か知らんが、バザノフを賣るなんて事がよく出來たもんだ。』とネヴダーノフは言葉を續けた。『僕には解らん。』

『なあに、そりや最う確かに、友達さ。彼奴等は其の事にかけちや素晴しい腕を持つて居るんだ——友達と云ふ奴等はね。君も精々氣を付けないと可けないよ。現に僕に友達があつた。樣子では素敵に善い人間に見える男で、僕乃至僕の評判を酷く重んじて居たと云ふ譯さ。ところが、或の日其の男が僕の所へやつて來て——「まあ、ねえ、貴方！」と叫んで置いて、「貴方に就て馬鹿々々しい噂が擴まつて居るんですよ。何でも貴方は御自分の伯父さんを毒殺なすつたと云ふんです。それから又貴方は或る家へ案内されて置いて、其所へ這入るや否や其の夫人に尻をくれて腰かけたまゝ一晩中其の儘で行儀を改めずに居なすつた。ところで、其の夫人は嚴然として自分の侮辱された事を憤慨した、と然ふ云ふんです！　何て馬鹿々々しい話でせう！　何てそら〳〵しい話でせう！　何處の馬鹿者がそんな話を信じるものですか」と、まあ、そんな事を言つたんだ。それから何うなつたと思ふ？　なあに、君、それから一年後には僕は其の友達と喧嘩したと云ふ譯さ……おまけに其の男が僕の所へ寄越した絶交狀が振つて居る。「貴樣は自分の伯父を殺した人間ぢやないか。尊敬すべき婦人に尻をくれて坐ると云ふやうな侮辱を加へ、而も恥として恥ぢない人間ぢやないか……」とまあ、こんな調子だ。然う云ふのが友達と云ふものゝ眞相なんだよ！』

オストロデューモフはマシューリナと眼を見合はした。『アレキセイ・ドミトリエキチー』と彼は行成り例の沈んだ低音で呼びかけた。そして『モスクワのワシリー・ニコラエキチから手紙が來たよ。』と云ふ事を冒頭にした無用な發言を中途で止めやうと思つたらしい樣子が明かに讀まれた。

ネヅダーノフは一寸身體をびくつかせて、伏目になつた。

『何んな事が言つて來たんだい？』と彼はとう〳〵訊ねた。

『まあね……僕と此の女に、』とオストロデューモフはマシューリナを指して、『來るやうにと言ふんだ。』

『何？此の女にも來いつて？』

『然うだ。』

『で、何か困る事があるかね？』

『なあに、無論困るのは——金さ。』

ネヅダーノフは腰かけて居た寢臺から立ち上つて、窓際へ歩み寄つた。

『たんと要るのかい？』

『五十ルーブル……それより少くては何にもならないんだ。』

ネヅダーノフは暫く口を噤んで居たが、

『今は駄目だ。』と指の尖端で窓硝子を叩きながら、漸と呟いた。『尤も……以前ならば出來たんだが。いや、何とかして見やう。向うから來た手紙を持つてるかい。』

『手紙かい？　そりや……其の……無論。』

『何故、貴方は毎もそんな風に、僕を除者になさるんですね。』とバークリンは叫んだ。『僕は貴方の信用に値しないのですか。よし、僕が充分に同情を現す事が出來なかつたにしたところで……竟り貴方々の着手して居られる事に對してゞすね、まあ、それにしたところで、僕と云ふ人間が裏切りや、喋舌をする事の出來る人間だなどゝ、貴方から思はれる譯が何處にあるでせう？』

『別に腹があつて言つた譯ぢやないんです……まさかね！』とオストロデューモフは例の深い調子で言つた。

『腹が有る無いは別として、現にマシューリナさんが僕を見て笑つて居なさるぢやありませんか……ですがね——』

『笑つてなんか居ません。』とマシューリナはぷり〳〵した調子で言つた。

『ですがね、』とバークリンは追求して、『諸君には直覺と云ふものがない。何の人間が諸君の眞の友であるかを判別する事を辨へて居られん。笑ふ人があると、諸君は其の人を眞面目でないと思つて居る・・・』

『勿論ですわ。』とマシューリナは又してもぷり〳〵言つた。

『此處に、例へば、』とバークリンは更に新な力を籠めて慌しく言葉を續けた。今度は最うマシューリナを當の對手として居ないやうな態度さへ見せた。『諸君は今金に困つて居られる・・・而もネヅダーノフが今のところ持合せて居ないと云ふ・・・宜しい、私が一つ何とかしませう。』

ネヅダーノフは突嗟に窓元から振返つた。

『いや・・・いや・・・關まん。僕が拵ふ・・・手當の一部を前借すれば好いんだ・・・確か未だ僕の方へ來るのがある筈だ。だが、ね、オストロデューモフ、手紙を見せてくれた給へ。』

オストロデューモフは初めの間は暫く凝と身動ぎもしないで居たが、やがて周圍を見廻はしてから更に立ち上つて、右の方へ身體を曲げ、ヅボンを捲り上げて、深い中から大事さうに青い紙を圓めた物を引出した。其の紙の玉を引出してから、彼は何う云ふ譯か解らないが、それに息を吹きかけてネヅダーノフに渡した。

ネヅダーノフは其の紙を受取つて、ほぐして細かに讀んで、それをマシューリナに渡した・・・・・彼女は先づ椅子から立ち上り、さて同じくそれを讀んでから、バークリンが手を出したのも關はずに再びネヅダーノフの手へ返した。ネヅダーノフは肩を搖つて其の不思議な手紙をバークリンへ廻した。バークリンはざつとそれに眼を通して、非常に意味ありげに唇をつぼめながら莊重な思ひ入れと共にそれを卓子の上に置いた。と、オストロデューモフはそれを取上げて、烈しい硫黄の臭のする大きなマッチを擦つた。そして先づ列座の一同に對して是れ見よと云つた風に其の手紙を頭の上へ高く振り翳して、やがて指の燒けるのをも關はない程に、それをマッチの火で燃やし、燃殼をストーブの中へ投げ込んだ。其の事の行はれる間、誰一人一語だに發するものがなく、誰一人びくくとの身動きをする者がなかつた。皆の眼は伏視になつた。オストロデューモフは熱心な規律的な態度を取つた。ネヅダーノフの顏は憤懣の色を帶びた。バークリンの樣子には穩かならぬ趣きが見えた。マシューリナは莊重な儀式に臨むの風があつた。

かくて二分間過ぎた……と、やがて輕い一種の不快感が一同を襲うた。バークリンは誰よりも先に其の沈默を破る事の必要を感じた。

『では、先づ、』と彼は口を切つた。『祖國の祭壇に於ける僕の犧牲が、認容される事になるのだらうか、何うだらう。五十ルーブルは駄目としても、せめて二十五ルーブルか三十ルーブル位は黨の爲めに寄附しても差支へないだらう？』

ネヴダーノフはそれを聞くや否や滿身憤怒に燃え上つた。彼の腹立しさは刻一刻と烈しく募りつゝあつたのだ……手紙を燃す莊重な儀式もそれを鎭めるに何の力もなかつたのだ。そしてそれは唯爆發の緒を待つて居たのだ。

『僕は既に、そんなものゝ要らない事を君に言つて置いたのだ……要らない……要らないよ。僕はそれを許さない。僕はそれを認容しない。金は僕が作る、直に作る。誰からの助けも要しないんだ。』

『宜しい。』とバークリンは言つた。『解つた、君は革命家だが、平民主義者ぢやないんだね！』

『其の場で、僕を貴族主義者だと言つて見ろ！』

『成る程、君は貴族主義者だよ、眞實……或る程度まではね。』

ネヴダーノフは故とらしい笑ひ方で笑つた。

『君は、竟り僕の庶子たる事を諷する意なんだね。御心配にや及びませんよ。御親切樣だがね……何、僕は君の力を借りなくとも、萬々それを忘れるやうな事はありますまいよ。』

バークリンは自棄的になつて、手を振り翳した。

『アリョーシャ、おい、そりや一體何う何ふ事なんだ。何故、君には僕の言葉がそんな風に取れるんだらう。今日は僕には君と云ふ人間が解らないよ。』

ネヴダーノフは頭と肩とに最う堪へられないと云ふやうな身振を見せた。

『バザノフの拘引が君の心を攪亂したんだね。だが、君、一體あの男は平常から擧動に慎みがなさ過ぎたからね――』

『あの方は毎も御自分の信念を隱さないやうにして被居つたのです。』とマシューリナは凄味を帶びた調子で言葉を挾んだ。『あの方の過を索すのは私達のする事ではありません！』

『無論ですとも。併しせめてあの男は自分一個の爲めに危くされる他の者共の事を考へなくてはならなかつた筈です。』

『何うして貴方はそんな事をあの男に對してお考へになるのです？』と……オストロデュー

モフは怒鳴つた。「バザノフは強固な意志の人です。決して人を賣るやうな事はしません。但し愼重と云ふやうな事に至つては……僕をして言はしむれば、吾々は皆一樣に、愼重であると云ふやうな事は出來ない事ですよ。バークリン君！」

バークリンは怒つて何か言ひ返さうとしたが、ネヅダーノフはそれを留めた。

『諸君、』と彼は叫んだ。『何うぞ暫く、政治上の事を放つて置いて貰いたいもんだね。』

沈默が續いた。

『僕は今日スコロービヒンに會つた。』とバークリンはとう〳〵口を切つた。『我が國民的大批評家、大美學者、大情熱家のスコロービヒンさ。何て厭な奴だらう。あの男は恰で惡い強いクワス（ライ麥から製した酒）のやうに、到る所で沸騰し泡立つて居る……それが奔騰すると給仕人はコルクの代りに指で口を抑へ、頸の所へ太い葡萄蔓の乾かしたのを差し込む――ます〳〵泡立つてしゆう〳〵云ふ――ところが、一旦出るだけの泡が出てしまふと、底には二三滴の惡性な、强烈な奴が殘るだけで、而もそれは人の渦を醫するなどゝ云ふ役に立つものでなくて、寧ろたゞ胃痛を惹起すだけのものだ……何しろ、關係する若い人達に取つて最も有害な人間だよ。』

バークリンの試みた其の比較は如何にも眞を穿ち當を得たものであつたにも拘らず、誰の顏にも微笑の影だに見えなかつた。唯オストロデューモフだけは、美學的批評に興味を有つことの出來る青年にして、よし其のスコロービヒンの說に迷はされるにしたところで、少しも彼等には氣の毒がられる譯がないと云ふ事を駁說した。

『だが、實際、』とバークリンは情味を含めて叫んだ――同感を得られなければ得られない程、彼はます〳〵熱した――『問題があるんだ。政治上の事は許されないとしても、それはあらゆる點から重大な問題なのだ。スコロービヒンに從ふと、あらゆる昔の藝術品は古いと云ふ理由で可けないと云ふのだ……若し然うだとすると、藝術は單に一つの流行にしか過ぎないことで、眞面目に論ずる價値のないものになるのだ！　恒久的な、永遠的な何物も其の中に無いとしたら、藝術なんか放つてしまふが好い！　例へば科學に於て、數學に於て、まさか君等はユーレーや、ラプレースや、ハウスを黴の生えた馬鹿者とは考へないだらうぢやないか。ラフアエルやモツアルトが阿呆者であるとしながらも、それ等の人々のみをオーソリテーだと考へやうと云ふのか。諸君の自負は彼等の權威に對して反抗しないのか。藝術上の標準は科學上の法則よりは到達するに困難である……それは解つて居る。併しそれは存在して居

るのだ。それを見ないものは盲なのだ。故意であるかないかは問題にはならないんだぜ。』

バークリンは止めた……が、誰一人口を開くものがなかつた。恰で皆口の中に水を含んで居るやうでもあり、彼に對して聊か氣恥かしく思つて居るやうでもあつた。唯オストロデューモフだけが唸るやうな聲で言つた。『が、兎に角、僕はスコロービヒンに迷はされた青年達を少しも氣の毒とは思ひません。』

『何だ、馬鹿野郎！　俺は最う行つてしまふぞ！』とバークリンは心の中で思つた。

彼がネヅダーノフに會ひに來たのは、「北極星」（「警鐘」は既に廢刊になつて居たので）を外國から取寄せる事に就ての彼の意見を通ずる爲めであつたのだが、終には其の問題を言ひ出さない事が好いとさへ思ふまでに話が側へ外れてしまつたのであつた。バークリンが帽子を取りに懸つて居ると、何の豫告もなくノッキングもなしに、突然控の間で素敵に愉快な、男らしい、優しい上低音が聞えた。其の音聲は何れにしても飛び離れて育ちの好い、敎育の善い、更に薫の佳いとまでも云ひたい程のものであつた。

『ネヅダーノフ君はお居でゝすか。』

一同は驚いて顏を見合した。

『ネヅダーノフ君はお居で？』と其の上低音が繰返された。

『えゝ、』とネヅダーノフは漸く答へた。

扉はしとやかに、滑かに開けられた。と見ると、上品に短かく刈つた頭から光澤の好い高帽をゆる〳〵と脱ぎ取りながら、四十格好の丈の高い、立派な威嚴のある一人の男が部屋へと這入つて來た。彼は四月も末に近づいて居ると云ふのに、海狸皮の襟を附けた、非常に立派な織物の外套を着て居た。彼は一同を驚かした。ネヅダーノフも、バークリンも、マシューリナまでも……更にオストロデューモフまでも、其の態度の立派さと、其の辭禮のしとやかさとに驚かされた。一同は思はず立つて入口まで出迎へた。

三

其の派手に着飾つた人はネヅダーノフの傍へ進んで、優しさうな笑顏をしながら口を切つた。

『私は一昨日、既に貴方にお目に懸つてお話まで致した筈ですよ。ネヅダーノフさん。御記憶か何うか解りませんが、あの劇場で。』

客は何事かを待ち設けて居るやうに口を閉ぢた。ネヅダーノフは一寸頭を下げて顔を赤くした。

『左樣……そこで今日上りましたのは、實は貴方が新聞へお出しになりました廣告の件に就きまして、ほんの最う二言三言お話が出來ますれば誠に仕合せな事と存じまして。此度にお居での皆樣方のお邪魔になるやうな事さへ御座いませんでしたら。』――（客はマシューリナに向つて頭を下げ、バークリンとオストロデューモフの方へは鼠色のスキッツル製の手套を嵌めた手を振つた）――『此のお方々のお邪魔にさへなりませんでしたらば……』

『いえ……何う致しまして……』とネヅダーノフは幾分か言ひ難さうに答へた。『差支へは御座いません……何うぞ、まあおかけ下さい。』

客はしとやかに身體を屈め、丁寧に椅子の背を攫んでそれを自分の方へ引き寄せた。併し坐らなかつた――室内に居る人達が皆立つて居るのを見たので。で、たゞ彼は澄んでは居るが半ば閉ぢたやうな眼で、自分の左右を見廻した。

『左樣なら、アレキセイ・ドミートリッチ。』とマシューリナは突然言ひ出した。『後程參ります。』

『僕も、』とオストロデューモフも續いて言つた。『僕も後で又來る。』

故と輕んずるやうな樣子で客の傍を通つて言つて、マシューリナはネヅダーノフの手を取り、元氣より握手をして、誰にも會釋をせずに出て行つた。オストロデューモフは出させなくても好い深靴の音を無暗にさせながら其の後から續いた。そして『お前のその海狸の襟は大層似合ふよ。』とでも言ひたさうに幾度も噴き出した。

客は慇懃な、併し何方かと云へば穿鑿するやうな眼付で二人を見送り、やがて其の眼付で此の男も二人の例に倣ふのだらうと豫期して居るやうに、バークリンの方を見降した。併し此の見知らぬ人の這入つて來た瞬間から、妙な故とらしい笑顔をして居たバークリンはそろ〳〵と隅の方へ引込んだ。と、やがて客は椅子へ身を埋めた。ネヅダーノフも腰を降した。

『私の苗字はシブャーギンと云ふのです――多分お聞きになりましたでせうが。』と客は誇らしげな謙遜を以て口を開いた。

それは兎に角として先づネヅダーノフが劇場で此の男に會つた次第を言へば斯うである。

サドフスキーがモスクワからやつて來たのを機として、オストロフスキーの戯曲「他人の橇に乘る勿れ」が舞臺に上された。ルサコフの役は其の名優の十八番として有名なものだ

つた。朝のうちネヅダーノフは劇場の場方へと行つた。そして其處で彼は可成り多くの人々を見た。彼は土間の切符を買ふ意であつたが、賣臺の所へ進み寄つた瞬間、背後に立つて居た一人の士官がネヅダーノフに先んじて三ルーブルの手形を出して賣番に叫んだ。

『其の人――（即ちネヅダーノフ）は屹度釣錢が要るんだ。俺は要らない。だから、何うか俺に先くれ給へ。正面の所を一枚、直に……急いでるんだから。』

『失禮ですが、』とネヅダーノフは鋭く答へた。『僕も矢張り正面が欲しいんです。』

然う言つて彼は、狹い窓から財布にありつたけの三ルーブルを投げ入れた。賣番は彼に切符を與へた。かくて其の晩ネヅダーノフはアレキサンドリンスキー座の貴族席に姿を現はしたのであつた。

彼はみすぼらしい服裝をして居た。泥だらけの深靴を穿いて居る上に、手套を嵌めて居なかつた。彼は何となく氣が安まらなかつた。又かく感ずる事によつて自分で自分を憤慨した。彼の右隣の席には勳章を幾つも飾り立てた將官が居り、左の隣には同じく行々しく着飾つた人が居た。それは二日後にネヅダーノフを訪ねて、マシューリナやオストロデューモフの邪魔をした樞密顧問官シブヤーギン其の人であつた。將官の方は何か不當な、意外な、そし

て忌はしいとまでも思はれるやうな物にでも對するやうに、絶えずネヅダーノフを流し目で見やつた。が、是れに反してシブヤーギンは彼を偸視で見たが、それは少しも敵意を含んだ眼付ではなかつた。ネヅダーノフを取卷いた人達は何れも、云はゞ普通の人としてよりは或る特種の人物として人目を驚かして居た。彼等は又お互に皆親しく知り合て居て、それ〴〵簡單な言葉を交したり、さては歡迎の感嘆詞まで遣り取りした。中にはネヅダーノフを間に置いて話を取交す人達もあつた。ところが、ネヅダーノフは然う云ふ間に挾まつて、廣い、氣持の好い肱掛椅子に腰かけたまゝ、恰で人交りの出來ない穢多か非人でゝもあるやうに、疑と身動きもせず氣拙さうにして居た。彼の心の中には苦痛と羞恥と嫌惡とがあつた。彼はオストローフスキーの喜劇からも、サドフスキーの藝からも大した愉快を得る事は出來なかつた。

と突然、不思議にも entr'acte（間狂言）の最中、勳章をひらめかした將官ではない左の席に居た、何等の紀章もつけて居ない人が、人好きのしさうな穏かさで優しくしとやかに彼に話しかけた。その人は先づオストローフスキーの戲曲に就て話し初めて、「新時代の代表者」としてのネヅダーノフの說を求めたのであつた。驚いたと云ふよりは、寧ろ殆ど膽を潰したと云ふ形で、ネヅダーノフは先づ狽へて單綴音の返事だけしかし得なかつた……彼の胸は明か

に浪打つて居た。が、やがて彼は自分で自分を腹立しく思つた。何をそんなに騒ぎ立てる事があるか。此の男だつて同じ人間ぢやないか。斯う思つて彼は自由に隔てなく自分の說を述べ出した。そして終ひには隣の席の勳章の人をうるさがらせた程の高い聲と、感情の亢奮を以て語つた。ネヴダーノフは由來オストロフスキーの熱心の讃美者であつたが、此の「他人の橇に乘る勿れ」と題する喜劇に於ては、作者の技倆の認むべきものがあるにも拘らず、ヴイホレフの滑稽な性格に於て文明と云ふものを馬鹿にしやうとした顯著なる企劃は、何うしても彼の同意する事の出來ぬものであつた。擧動のしとやかな彼の隣人は非常な注意と同感とを以て彼の說を傾聽した。そして次の entr'acte に於て又しても彼に話しかけた。併し今度はオストロフスキーの戲曲の事ではなくて、さま〴〵の一般的話題、例へば人生に就て、科學に就て、更に政治に就てまでも話した。彼は明かに此の雄辯な青年に對して興味を感じて居たらしく見えた。ネヴダーノフは話が進むに連れて、遠慮などはすつかりなくなつて、「宜しい、お望みとあらば幾らでも話さう——好くお來なすつたね。」とでも言ひさうな勢で盛に氣焰を吐いた。其の爲めに左隣の將官に對しては單たる不愉快以上に——積極的な侮蔑と狐疑の念を起させた。演技が終ると、シブヤーギンはネヴダーノフに向つてひどく丁寧

な挨拶をして別れた。併し對手の苗字を知らうともしなかつたし、又自分の苗字も明さなかつた。と、やがて彼は階段に立つて馬車を待つて居た間に、彼の友人で皇帝の補翼官となつて居るG—公爵と顏を合せた。

『土間から君の居る所を見て居たよ。』と公爵は香水の薫の馥郁たる髭を動かして笑ひながら言つた。『あの話對手になつて居た男を知つて居るのかね？』

『いや、君は？』

『あの奴さん、馬鹿ぢやないだらう。えゝ？』

『其處所ぢやない。何と云ふ人かね？』

と、公爵は彼の耳近く身を屈めてフランス語で囁いた。『僕の弟——然うさ。僕の弟だよ。親爺が外で拵へた子でね…名はネヴダーノフと云ふんだ。其のうち其の事に就て話すことにしやう…親爺は少しも期待して居なかつたので、それでネヴダーノフと云ふ名にしたんだ——竟り意外な代物と云ふ譯さ。それでも、まあ兎に角親爺は彼の爲めには相當の事はしてやつたんだ… il lui a fait un sort（彼に彼に分け與へた財産）…僕等は又幾分づゝの手當をやつて居る。なか〳〵頭の好い奴でね…矢張り親爺のお蔭で善い敎育もしてあるんだ。だ

が、すつかり最うくだらない仲間へ這入つてしまつて、共和黨か何かになつちまつたんだ……で、今では寄せつけないやうにして居る……Il est impossible!（とても出來ないことだからね）……兎に角、失敬する。僕の馬車を呼んでるやうだから。』

公爵は去つた。其の翌日シブヤーギンは新聞でネヴダーノフの出した廣告を讀んだ。そして會ひに出かけた……

『私の名はシブヤーギンと云ふのです。』と彼はネヴダーノフと相對して籠椅子に腰かけた時に言つた。そして例の人好きのしさうな眼付で彼を見た。『新聞で貴方が家庭教師の口をお求めの由を承知しまして、それで御相談に上つた譯なのです。私も家庭を有つて居りまして、男の子が一人御座います——年は九つでして——打明けて申すと——至極出來の好い子ですよ。それから私共は夏と秋の大部分は田舍で暮して居ります。國はS——州でして、私共の所と申すのは首市から四哩ほど離れた所です。如何でせう、御休業のお意で私共と御一緒に田舍へお行下すつて、小供に國語と歴史をお教へ願ふ譯には參りますまいか。尤も教へて戴く題目をそれとお願ひしますのは、新聞にお出しの廣告によつた譯ですが、兎に角私の考へますところでは、私と申す人間も、私の家族も、それから私の田舍の處柄も、屹度貴方のお氣に入

る意です。此の上なく佳い庭もありますし、河の流も幾つとなくありますし、空氣は素晴しく宜しいですし、家も可成りに廣いですし……御承諾下さるでせうな。若し然うお願ひ出來ますとなると、たゞ一つ期限の事だけ伺つて置きたいのです。まさかそんな氣遣ひも御座いますまいが。』斯うシブヤーギンは一寸眉を顰めながら言ひ添へて、『兎角私共の間に厄介な事の起りますのは、其の邊の事からですからな。』

シブヤーギンの話して居る間中、ネヴダーノフは凝と彼を見つめた。稍々背後へ突き出た頭、低く且つ狹いが、併し賢さうな額、ほつそりしたローマ人式の鼻、愉快げな眼、愛嬌のある言葉が水の流れるやうに溢れ出る形の好い唇、イギリス風に垂らした長い頰髭——それ等を見つめながら彼は思ひ迷つた。『一體是れは何う云ふ譯なんだ？』と彼は思つた。『何故此の男は俺に近付きにならうとするやうに見えるのか。此の男は貴族だ——然に俺は！　何うして俺達はこんなに結び付いたのか。それに、何が一體此の男を俺の所へ誘ふやうにしたのか。』

彼は省察に耽るの餘り、シブヤーギンが答を待ちながら話を止めて居た間にすらも口を開かなかつた。シブヤーギンはバークリンの身を寄せて居る部屋の隅を偸視で眺め遣つた。彼の眼はネヴダーノフの眼と同じく、バークリンを凝と見据ゑた——チヴダーノフの發言を妨げ

たのは此の第三者の居る事ではないかと。シブヤーギンは更に自分の置かれて居る周圍の異常な有樣に、自分自身で擧動を從はせでもするものゝ如くに眉を上げ、聲を高くして彼の質問を繰返した。

ネヴダーノフは立ち上つた。

『無論、』と彼は慌しく言つて、『私はお受けします……喜んで……尤も白狀しますと……私には何だか不思議でならないのです……何人の推薦もない私である上に……而も一昨日劇場で申し上げた言說が、寧ろ貴方の然う云ふお考へを打消すやうに思はれるものであつたと思ひますのに……』

『それは全然間違つて居ますよ　アレキセイ……アレキセイ・ドミートリッチ！　然うぢやありませんか。』とシブヤーギンはにこ〳〵して叫んだ。『憚らず申しますと――私は自由な進歩的な頭の人間としてよく知られて居る人間です。是れに反して、貴方のお說は、若い人達に特殊な點を除いても、猶ほ且つ常に幾らかの誇張に偏して居るやうに思はれます――お氣を惡くなすつては可けませんよ――兎に角貴方のお說は、何の方面から見ても私の說に反すると云ふ所はないのです。それに眞實私は、其の若々しい情熱が喜ばしくてならないのです

よ。』

シブヤーギンは聊かも躊躇する事なしに話した。彼の平らなゆつたりとした話は『油の上に蜜を垂らすやうに滑かに』滴り落ちた。

『妻も矢張り私と考へ方を同じくして居るのです。』と彼は言葉を續けた。彼女の見解はひどく貴方の御意見に似通つて居ます。それは全くさもあるべき事です。彼女も若い方ですからな。それは兎に角、一昨日お目に懸つた後で、新聞にお名前の出て居るのを見ました時は――竟り普通のやり方と反對に、貴方が御自分から御住所を添へてお名前を出してお居でになるのを見ました時は、既に最う劇場でお名前は承知して居ましたに拘らず――まあ、何しろひどく驚いたと云ふ譯なのです。其の事――即ち其の符合と云ふ事に――私は――迷信的な言ひ方ではありますが、竟り因緣と云ふやうな事を感じたのですよ。貴方は推薦と云ふやうな事を被仰いますけれども、私はそんな推薦なんてものは要りません。貴方の御樣子、貴方の人格が私の心を引付けたのです。そして私はそれで最う充分なのです。私は自分の眼を信ずる事に慣れて居ますから。それでは――其の意にして置いて宜しう御座いますでせうか。御承諾下さるのでせうね？』

『えゝ……無論……』とネヅダーノフは答へた。『貴方の御信用に添ふだけの事をやつて見ませう。が、たゞ一言申し上げて置きたい事があります。私は御令息をお教へする覺悟ではありますが、御監督致すと云ふやうな覺悟はないのです。私は然う云ふ事には適しません――又實際、私は自分を束縛したくはないのです。自分の自由を傷けたくはないのですから。』

シブヤーギンは蠅でも追ひ這るやうに輕く手を振つた。

『御心配なさいますな……貴方はそんなやくざな類のお方ではありませんし、又私は他人から自分の小供を監督して貰ひたくもありません――私はたゞ一人の教師を得やうとして居るのです。そしていよ〳〵それを得たのです。では、今度は期限の問題ですが、如何です。それから金の方の問題も？　厭な事ではありますが……』

ネヅダーノフは何と言つて好いか分らなかつた……。

『なあに、』シブヤーギンは全身を前へ乗り出し、如何にも親しげに指の先をネヅダーノフの膝に觸れながら言つた。『紳士の間ではこんな問題は一言か二言で定つてしまふ事なのです。私の方の考へでは、一箇月百ルーブルを差上げる意で、無論往來の旅費も私の方で負擔致す意なのですが、それで宜しいでせうか。』

『ネヅダーノフは再び顏を赤らめた。

『それぢや、私の望んで居たよりは遙かに多いやうです……私は――』

『いや、至極結構……』とシブヤーギンは對手の言葉を遮つて、では、其の方の事は定つたものと致します……それから、貴方に對しては全く家族の一人と考へさせて戴きます。』

彼は椅子から立ち上つて、何か贈物でも貰つたやうに急に晴々しくなつた。凡ての彼の身振は或る一種の打解けた親しみが現れた。ふざけるやうな樣子さへ見えた。

『一兩日の間に出發つことにしませう。』と彼は無造作な調子で言つた。『私は田舍の春に遇ふのが好きです。職業の性質上散文的な人間で、而も都會に束縛されて居る境遇ではありますけれどね。いや、そんな事は別として、では、今日から貴方をお賴みした事にさせて戴きませう。妻と悴は最うモスクワへ行つて居ります。先に出發たせたんですから。其所で私達は彼等と田舍で、竟り自然の胸で會ふ事になるのです。私達は一緒に旅をしませうよ……獨身者と云ふ格でね……へ、へ、へ！』とシブヤーギンは稍々故とらしい鼻先笑ひをして、『其所でと……』斯う言ひかけて彼は、外套の衣囊から黑と銀の表裝をした手帳を引き出して、其の中から一枚の名刺を取り出した。

『是れが私の住所です。お來下さい・・・明日。左樣、十二時に。もつと何かお話致しませう。私の教育上の考へも、もつとお話致しませう。あつ――それから、出發の日をちやんと定めませうよね。』斯う言つてシブャーギンはネヴダーノフの手を執つた。『それに御承知でもありませうが、』と彼は聲を低くし、首を傾げて言ひ足した。『萬一前に御必要でもありましたら・・・何うぞ御遠慮なく！　一月分だけ差上げて置きませうよ。』

ネヴダーノフは答ふるところを知らなかつた。そして彼は前と同じく困つた顏をして、如何にも晴やかな愉快さうな、それと同時に彼には似もよらない對手の顏を見つめた。其の顏は彼の方へ近く寄せ付けられて、而も如何にも親切さうな微笑を浮べて居るのであつた。『御必要は御座いませんか。えゝ？』とシブャーギンは小聲で言つた。

『若し出來まするなら、明日お願ひ致しませう。』とネヴダーノフはとう〳〵口に出した。

『宜しいですとも！　では――何れ又！　明日！』

シブャーギンはネヴダーノフの手を放して行きかけた・・・

『妙な事をお訊ねするやうですが、』とネヴダーノフは突然言つた。『先刻のお話に依りますと貴方は芝居で私の名を卽存じになつたと云ふやうに承りましたが？　それは誰からお聞きになつたのですか。』

『誰からですつて？　なあに、それは貴方の御友人の方からですよ。いや、多分御親戚の間柄だと思ひますが――竟り、あの公爵・・・G公爵です。』

『あの皇帝の補翼官をして居ります？』

『然うです。』

ネヴダーノフは前よりは一層顏を赤くして口を開いた・・・が、何も言はなかつた。シブャーギンは再び握手をしたが、今度は何も言はなかつた。そして先づネヴダーノフに、次にバークリンに、挨拶をして彼は戸口の所で帽子を冠つて出て行つた。顏には相變らず滿足さうな微笑を帶びて居た。其の微笑には此の訪問で受けたに違ひないと思はれる深い感銘の意識が明かに認められた。

四

シブャーギンが闕を跨ぐか跨がぬうちに、バークリンは椅子から飛び上つた。そしてネヴダーノフの所へ突き進んで祝ひの辭を述べ出した。

『おい、君は好い摑り所を見付けたよ！』とくす〳〵笑ひをし、足をばた〳〵叩きながら言つた。『まあ、君、今來た人は一體誰だと思ふ？　シブヤーギン――誰でも知らんものはない。侍從で、或る種の社會の柱で、未來の大臣で！』

『僕はあの人の事は全く何も知らん。』とネヴダーノフは沈んだ調子で言ひ切つた。

バークリンは兩手を自棄的に差上げて、

『それが正しく吾々の不幸なんだよ。アレキセイ・ドミートリッチ！　覓り吾々が世間の人を誰一人知つて居ないと云ふ事がね！　成程吾々は或る効果を生み出さうと思つて居る。併し吾々は世界の外に住んで居る。吾々の關係して居るのは僅に自分達の仲間の二三にしか過ぎない。而も其の狹い範圍内をぐる〳〵廻つてばかり居るのだ……』

『話の途中で濟まんがね、』とネヴダーノフは言葉を挾んで、『そりや間違つて居るよ。僕はただ敵と結ばうと思つては居ないのだが、其の代り僕等の同じ型の人達とは、覓り民衆とは、僕等は絶えず關係を結ばう〳〵と努めて居るのだ。』

『止し給へ、止し給へ、止し給へつてことさ！』とバークリンは今度は此方から言葉を挾んで

『先づ第一に、敵に關してはゲーテの

『詩人を理解せんと欲するものは、
　詩人の領土に赴かざるべからず……』

と云ふ句を考にさせてくれ。併し僕は言ふよ。

『敵を理解せんと欲するものは、
　敵の領土に赴かざるべからず……』

一體其の行狀や習慣を知らないで敵を避けると云ふ事は笑ふべき事だ！　わ……ら……ふ……べき……事だ！　然う！　然う！　僕が今森の中で狼を射たうとするなら、僕は先づ其の狼の穴を殘らず知らなくてはならん……第二に、君はつひ今民衆と交ると云ふ事を言つたが……ね、君！　一八六二年にはポーランド人が『森の中』へ行つたが、今では僕等が其の同じ森の中へ這入りかけて居るんだ。森の中と云ふのは、覓り民衆の事さ。森と同じやうに暗くて物の姿の不分明な民衆の事さ！』

『ちや、君の言ふ通りにすれば、何うしなければならんと言ふんだね？』

『印度人は自らジャッガーノウトの車の下へ身を投ずる。』とバークリンは沈んで言つた。『車は彼等を轢き潰す。そして彼等は死ぬ――覓り祝福されたんだ。吾々にも矢張り吾々のジャ

ツガーノウトがある……それは實際吾々を轢き潰すのだ。併し何等の祝福をも與へない。』

『それでは何うすれば好いと言ふのだ？』とネヅダーノフは殆ど叫ばんばかりに前と同じやうな言葉を繰返した『「傾向」小説でも書くか、それとも何か？』

バークリンは兩腕を廣くひろけ、左の肩の方へ首を曲げた。

『兎に角小説は、君に才能さへあれば何時でも書けるだらうよ……まあ、怒つちや可けない。君がそんな人間でない事は僕だつて知つてるのみならず、僕は君に贊成する。「埋草」的の文句や、新造語を使つて――例へば「あゝ、私貴方にラブしてよ」と彼女は跳ね返つた……「そんな事は僕には何でもない事だ」と彼は怒つた――と云ふやうな具合に編み上げた作物は、何うも生命の籠つた仕事ではないよ　僕の繰返し言ふのは其所さ。上下を問はず、凡ての階級に形式と云ふものが付き纏つて居るのだ。吾々はオストロデューモフのやうな連中に望みをかけて居ては可けないよ。あの連中は正直ではあり、善い人間ではあるが、何うも餘り鈍すぎるのだ。あの吾々の良友とやらを見て見給へ。まあ、あのやうな裏の付いた長靴は、何うしたつて悧巧な人間の穿く類のものぢやないね。一體、何故あの男は先刻此の場を去つたのか。竟り貴族と共に此の同じ部屋に居り、此の同じ空氣を呼吸する事を好まなかつたからなんさ。』

『僕の前で、オストロデューモフの事を然う輕々しく話して貰ひたくないもんだね。』とネヅダーノフは大袈裟に對手の言葉を遮つた。『あの男の厚ぼつたい靴を穿いて居るのは、廉いからだよ。』

『僕はそんな意ぢやなかつた――』とバークリンは言ひかけたが、

『若し假にあの男が貴族と同席するのが厭なのであつたら、』とネヅダーノフは聲を高めて言葉を續けた。『僕は寧ろ大に稱讃するね。そんな事は別としてあの男に於て重んずべきは、あの男は自分を犧牲にすると云ふ事を知つて居る點だ。場合によつてはあの男は死をも辭せないだらう。其の事は君や僕には到底も出來ない事なんだよ。』

バークリンは一寸哀れげに顏をしかめて、自分の小さい不具の足を指した。

『僕の分際でも戰ひがあるかね。アレキセイ・ドミートリッチ君！　情ない事だ！　だが、そんな事は少しも氣に懸けてくれ給ふなよ……僕は繰返して言ふよ。君とシブャーギンさんとの結合は心から喜ばしい事だと云ふ事をね。其の結合から、吾々の將來の爲めに非常な利益の得られる事までも僕は豫想するね。君は一歩高い世界へ這入るんだ。謂ふ所の牝獅子共―

―「スペインからの手紙」にあるやうな、「鋼鐵の螺旋で動かされて居る天鵞絨肌の婦人達」にも會へるんだ。まあ、君彼等を研究して見るさ。それも君が快樂主義者でゝもあると云ふのなら、僕は實際それを恐れるだらう…誓つて恐れるだらうよ。だか、勿論然う云ふ仕事を選んだ目的は他にあるんだらうからね。』

『僕の仕事を求めて居るのは、』とネヅダーノフは對手の言葉を引取つて言つた。『パンとバターの爲めだ…それと一つは君等の仲間から暫く逃れる爲めだ！』と彼は自分に向つて言ひ足した。

『無論さ、無論さ。だから僕は彼等を研究し給へと言ふんだ。あの先生、何と云ふ好い香を殘して行つたんだらう！』斯う言つてバークリンは頬に香を嗅いだ。『是れが市長夫人の「レヴザー」誌上で憧れて居た本物の琥珀なんだな！』

『あの人は僕の事をG公爵に訊ねたんださうだ。』とネヅダーノフは再び窓際の居所へ戻つて口の中で呟いた。『多分、最うすつかり僕の事は知つてるんだらう。』

『多分ぢやなくて、確かにだよ。それが何うしたと云ふんだい。君を家庭教師に備ひ入れやうと云ふ考へをあの人に起させたのは、それがあつたからさ。僕は然う信じるよ。君は何と

言つても、君自身は生れは貴族なんだからね。そこで竟り君も彼等貴族の一人であると云ふ事になる譯さ。だが、そんな事は兎に角、僕は餘り長く居すぎた。最う夙に店へ行つて居なければならん時刻だ。例の起業家のね。では、左樣なら。』

バークリンは戸口の方へ行きかけたが、立ち留つて振り返つた。

『ねえ、アリョーシャ、』と彼は愛相の好い調子で言つた。『君はつひ今し方僕に斷つたし、それに最う君にも金が入る事になつて居るのではあるが、それでも何うぞ僕にも幾らかの犧牲をさせてくれ給へな。何んなに少しでも好いから、其の共同事業の爲めにね。僕にはそれより外にして見やうがないんだから、少くとも僕の財布だけでも役に立たせてくれ給へ。好いかね、兎に角十ルーブルだけの手形を卓子の上に置いとくよ。承知してくれるだらうね。』

ネヅダーノフは返事もせず、身動きもしなかつた。

『默つて居るのは承知してくれたんだね。有難う！』とバークリンは嬉しさうに叫んだ。そして姿を消した。

ネヅダーノフはたゞ一人取り殘された…彼は窓硝子を透して暗い、狹い中庭を眺め續けた。それは夏でさへ日光の射さない庭であつた。そしてそれを眺めて居る彼の顔も亦暗かつ

た。

ネヅダーノフは前にも言つた如くG公爵と云ふ富裕な高級副官の息子であつた。母は其の家の娘の家庭教師で僧職の辭令を有つて居た美しい處女であつたが、彼の生れた其の日に死んだ。ネヅダーノフは初等教育を或る寄宿學校で、才幹のある嚴格なスキッツル人の教師から受けた。そして其の後で大學へ入つた。自分では法律を修めたかつたのだが、ニヒリストを忌み嫌つて居た彼の父たる將軍は、彼を歴史及び哲學科――ネヅダーノフ自身が常に苦笑ひを浮べて言つて居た言葉を借りて言へば、「美學科」へ入れたのであつた。ネヅダーノフの父は一年に僅か三四回彼に會ふのを慣ひとして居たが、彼の安否に就いては少からず心を痛めて居て、死ぬ時に遺言して六千ルーブルの巨額を「ナステンカ」(ネヅダーノフの母の)記念として彼に與へ、其の利息を兄のG公爵の手から年金のやうにして、彼に拂ひ渡すやうにして置いた。彼を貴族としたバークリンの叙述は誤つては居なかつた。彼の中のあらゆるものが素性の好い事を現はして居た。小さな耳と手と足、きやしやではあるが何方かと云へば小作りな顔、柔かな皮膚、軟かな髪、さては小刻みではあるが音樂的な聲までが然うであつた。彼は恐しく神經質で、恐しく自知的で、感傷的で、其の上氣の變り易い所さへあつた。小供の頃から

置かれて居た虚偽な境遇が、彼をして激し易く反抗し勝ちにした。併し性來の寛大性が猜疑的になる事から彼を救つて居た。此のネヅダーノフの虚偽な境遇は、又彼の性格内に於て見出される矛盾を説明して居た。潔癖で、氣難し者であつた彼は、強ひて自分の言葉を皮肉にし粗豪にした。生れながらの理想家で、情熱的で而も身持の正しい大膽で、同時に臆病であつた彼は忌はしい、惡德かなどのやうに自分の臆病と純潔とを恥ぢて、理想と云ふものを嘲笑しやうと云ふ傾きにまでなつて居た。彼の心は優しかつたが、彼は自分の仲間を避けた。彼は怒り易かつたが、惡感情を心に藏して置くと云ふ事が決してなかつた。彼は自分に「美學」を學ばせたと云ふ理由から父を侮蔑し、誰にでも解るほど露に政治上乃至社會上の問題にのみ興味を有つて、極端な意見を述べ立てた。(彼に取つてはそれは實に言葉の形式以上なものであつたのだ!)それでありながら彼は秘かに美術や詩や、其の他あらゆる表現に於ける美に恥つて居た……彼は自ら詩を作る事までした。彼は然う云ふものを書き散らした手帳を用意深く隱して居た。が、ペテルブルグに居る友人の中で、たつた一人バークリンだけが――それとて全く彼特有の直覺力を以て――其の存在を疑つて居た。何んなに厭な事でも、自分の詩作の事を一寸でも諷される事が激させる以上にはネヅダーノフを動かさなかつた。其の事を

彼は自ら許すべからざる弱點だと思つて居た。かのスキッツル人の敎師のお蔭で、彼は可成り多くの事を知つて居り、且つ苦しい仕事を怖れなかつた。彼は積極的な作業熱で働きさへした。尤もそれと云ふのも、何方かと云へば、むらの多い不規則なやり方ではあつた。彼の仲間は彼を愛した……彼等は彼の生一本の性格と、善良純潔な點とに引き付けられたのであつた。併しネヅダーノフは幸運な星の下に生れては居なかつた。生活は容易に彼の前には開けなかつた。彼は自ら深く此の事を意識し、友達からの歸依を受けながらも彼は孤獨を感知して居た。

彼は自分の前に開かれた旅に就いて、自分の生活に於ける此の新しい意外な變化に就いて考へながら、悲しく寂しく考へながら、依然として窓際に立つて居た。彼はペテルブルグを去るのを嘆かなかつた——都の中に殘し去る物は何一つとして、彼に取つて特別に貴いものではなかつたのみならず、彼は秋には又歸ると云ふ事を知つて居た。而も猶は物怖しいやうな物の會體の知れないやうな氣分が彼を襲つた。彼は如何ともし難い憂鬱を感じた。

『結構な敎師が出來るだらうよ！』と彼の心はまぜつかへした。『上等の先生樣だ！』

彼は敎育の仕事に從事した事に就いて自分を批難するに躊躇しなかつた。併し其のやうな批難は決して正しいものではなかつた。ネヅダーノフは可成りに豐富な知識を有つて居た。そして彼の苛々した氣分にも拘らず、小供等は彼と打ち解けたし、彼も亦直に彼等を好くやうになつた。ネヅダーノフを襲つた壓迫は凡て居場所の變化に先立つて來る感情で、あらゆる憂悶、沈思に伴ふところの感情であつた。それは大膽熱血な性格の人々には知られないものであつた。然う云ふ風な人達は寧ろ生活の常態が破壞されたり、居慣れた境遇が變つたりすれば喜ぶ傾きがあるからである。ネヅダーノフは終ひには知らず〳〵言葉に飜譯しやうとやりかけたほど深く冥想に耽つた。彼の胸に去來する情緒は自から最う韻律的に狂奔して居た。

『あゝ、惡魔と！』彼は叫んだ。『俺は確かに最う詩の道へ高踏して居るんだ！』

彼は身體を搖つて窓際から背き去つた。そして卓子の上にバークリンの置いて行つた十ルーブルの手形を見付けるや否や、彼はそれをポケットの中へ捻ぢ込んで部屋の中を行きつ戻りつし出した。

『前拂ひをして貰はなくてはならん。』と彼は獨り思案にくれた。『好くあの紳士の方から言ひ出してくれて可かつた。百ルーブル……それに兄共から——然うだ、あの先生達から——百

ルーブル……それで五十借金の方へ廻し、五十乃至七十を旅費にする……それから殘りをオストロデューモフへ遣る。だが、バークリンのくれた方は――なに、あの男だつて是れ位の事をして好いんだ。俺達はまだソルキューノフからも幾らか取つて遣らなけりやならん。』

彼が頭の中で斯う云ふ風な勘定をして居る間ですらも、前と同じ詩的な聲調が彼の胸の中に動いて居た。彼は立ち留つて空想に沈んだ……彼の眼は遠くの一點に据ゑ付けられ、彼の足は一所に根を据ゑた。と、彼の手は何物かを索すやうに卓子の抽斗に觸れて、直にそれを開けた。そして其の奥の方から一冊の稿本を取り出した。

彼は椅子に身を埋めたが、彼の眼は相變らず外方を見て居た。彼はペンを取り上げ、口の中でぶつ〳〵言ひながら、時々髪の毛を掻き上げたり、吸取紙を當てたり、消し散らしたりしながら一行一行と辿つて行つた。

控の室へ通ずる扉が半ば開いて、マシューリナの首が現れた。ネヅダーノフはそれに氣付かずに仕事を續けた。マシューリナは稍〻暫く熱心に彼の樣子に眼を据ゑて居たが、首を左右へ振つて後退りした……併し其の瞬間ネヅダーノフは身を起して周圍を見廻した。そして『あゝ、貴方か！』と迷惑さうに叫びざま、卓子の抽斗の中へ本を投げ込んだ。

と、マシューリナは斷乎とした歩み振りで部屋の内へ進み入つた。

『オストロデューモフから言ひ付かつて參りましたの、』と彼女は急き込んで言つた。『金が出來ますか何うか侘かめて來るやうにつてね。若し今日中に戴く事が出來れば、私達は今晩發たうかと思ひますの。』

『今日は出來ん。』とネヅダーノフは答へて、眉を顰めた。『明日被來い。』

『何時頃？』

『二時に。』

『畏まりました。』

マシューリナは暫くの間默つて居たが、突如として手をネヅダーノフの前へ差し出した。

『お邪魔でしたのね……御免遊ばせ。それに……私、是れで最うお邊しますわ。何處で又お目に懸れるでせう？　お邊乞ひがしたう御座んすわ。』

ネヅダーノフは彼女のかじかんだ赤い手先を握つた。

『先刻、此處に居たあの紳士を見たでせう？』と彼女は口を切つた。『僕達は最う別れる時になつたんです。僕はあの人の所へ家庭教師に傭はれて行く事になつたんだ。あの人の領地と云

ふのはS—州で、S—市に近い所でね。』

快さゝうな微笑がマシューリナの顏に閃めいた。

『S—に近いんですつて！　では大方又お目に懸れるでせうよ。私達は多分其方へ遣られるんでせうから。』とマシューリナは太息を吐いた。『あゝ、アレキセイ・ドミートリッチ……』

『何です？』とネヴダーノフは訊ねた。

マシューリナは熟視をつゞけて、

『何でもありませんの。左樣なら。何でもありませんの。』

再び彼女はネヴダーノフの手を握つて退いた。

『だが、ペテルブルグ中であんなに俺の事を思つてくれる人間が他に一人だつてありやしないんだ……妙な奴さ。』斯うネヴダーノフは思つた。『それにしても、何故彼女は俺に向つて差出口する必要があつたんだらう？……まあ、併し結局それだけの事さ！』

翌朝ネヴダーノフはシブヤーギンの都會の住居へ出かけて行つた。自由主義の政治家として、又近代的紳士としての威嚴と充分調和した固苦しい樣式の家具を以て充された大きな書齋で、彼は素晴しく大きな書檀の前に座を占めた。其の書檀の上には日常の用に充てる意で、

誰にも役に立たぬやうな紙と、何も切れないやうな大きな象牙の紙切刀とが置いてあつた。

まる一時間と云ふもの彼は、自由な進歩的な心を有つた其の家の主人の話を傾聽し、其の氣の利いた、愛相の好い、謙遜な、流暢な言葉の潮の中に浸つて居た。最後に彼は前借の百ルーブルを受取つた。そして二日後には其の同じいネヴダーノフ、其の同じい氣の利いた、自由主義の政治家で、近代的紳士である人と並んで、買切りの一等室の天鵞絨張のソファに半ば身を靠せながらニコラウスキー鐵道の動搖の烈しい線路の上をモスクワへと運ばれて居た。

五

○農業に熱心なのと、無暗と拳固を振り廻すのとで名高い地主であつたシブヤーギンの父によつて、現世紀(十九世紀)の十二年に建てられた、圓柱やギリシヤ式のファセードを持つた大きな石造の家の客間で、シブヤーギンの妻で、非常に好い綺量を有つたワレンチーナ・ミハーロウナは電報で前ぶれのあつた夫の到著を今か今かと待つて居た。客間の裝飾は近代的の高尚な趣味を現はして居た。其の中にある物は——印花綿布の室内裝飾や敷物、掛布などのさま〴〵な色合から、卓子や棚に散在する陶器、青銅、玻璃などの細々した物のさま〴〵な線の

具合に至るまでも――何一つとして好ましい、人目を惹くものばかりであつた。そしてそれ等凡ての物が和かな調和をなして、高い、廣い窓から自由に流れ込む晴かな五月の日光のうちに溶け合つて居た。谷間の姫百合（其の美しい春の花束が彼處此處に白い斑點の如く見えて居た）の薫りで重くなつた室内の空氣は、庭に茂つた若葉の上を穏かに渡つて來る軟風の訪ひに連れて時々ゆらめいた。

凡ては繪だ！　而も其の繪は此の家の主婦たるワレンチーナ・ミハーロウナによつて完成された――彼女はそれに生命と意味とを與へたのであつた。彼女は今年三十になつた丈の高い、濃い鳶色の髪の毛の、色は一體に淺黒いが併し生々した、システイン、マドンナを思はせるやうな顔立の、非常に深味のある、和かな光を帶びた眼の女であつた。唇は何方かと云へば廣くて色艶がなく、肩は割合に高く、手は割合に大きかつたが……併しそれにも拘らず、自由にしとやかに客間の中を動き廻る彼女の樣子を見たものは、自分にだけ言ふか、聲高く云ふかの別はあるとしても、兎に角一樣に是れほど美しい人に會つた事がないと叫ぶに違ひない。彼女は時に其の細い、心持緊つた身體を花の上へ屈めながら、それを嗅いでにつこり笑顔を見せたり、時には支那製の花瓶の位置を變へて見たり、時には又ふさ〳〵した髪の毛を手速く搔き

上げながら、鏡に向つて其の神々しい眼を半ば閉ぢたりするのであつた。

髪の毛の捲いた、美しい、九歳になる、スコットランド風の短袴を穿いて、脛を出して居る、香油を付けたり髪を縮れさしたりした男の兒が、あら〳〵しく客間へ驅け込んで來て、ワレンチーナ・ミハーロウナを見て偶と立ち留つた。

『何うしたの、コーリヤ？』と彼女は訊ねた。其の聲は其の眼のやうに穏かで優しかつた。

『ねえ、母樣、』と男の兒はとぎまぎして口を切つた。『叔母ちやんが然う被仰つたの……谷間の姫百合を少しばかり持つてお來つて……自分のお部屋へ飾るのに……叔母ちやんの所には何にも無いんですもの。』

ワレンチーナ・ミハーロウナは小供の願へ手を遣つて、其の小さい香油の香のする頭を上げた。

『叔母さんに、百合が欲しいのなら、植木屋へ然う言つてお遣りになるやうに言つて頂戴。此處にあるのは、私ので……觸られては困るのです。』『私は自分でちやんとして置いたものを崩すのが嫌ひなんですから、叔母さんに然うお言ひよ。私の言つた事が言へますか。』

『えゝ、言へますとも……』小供は呟いた。

『では・・・言つて御覽。』

『言ひます・・・言ひますよ・・・母樣が叔母ちやんに上げるのが厭ですつて。』

ワレンチーナ・ミハーロウナは笑つた。其の笑ひも矢張り優しかつた。

『貴方のお使では何にもならないのね。では、好いことよ。貴方の思つた通りを被仰い。』

小供は慌てゝ、指環で一杯になつてゐる母の手に接吻して、轉びさうにして出て行つた。

ワレンチーナ・ミハーロウナは彼の行方を見送つて太息を吐いた。そして金の針金で編んだ鳥籠の傍へ歩み寄つた。籠の中には、青い色の鸚鵡が四方へ飛び付いては嘴と爪とでおづおづ突付いて居た。彼女は指の先でそれをからかつて見たが、やがてぐたりと長椅子に靠れかゝつて、今度は彫刻を施した圓卓子から新刊の Rebue des Deux Mondes（兩世界評論）を取つて、それを飛び讀みし始めた。

うや〳〵しい咳拂ひがしたので彼女は振り返つた。扉口に制服を着て、白い衿飾を付けた男振の好い馬丁が立つて居た。

『何です、アガフオン？』とワレンチーナ・ミハーロウナは相變らず優しい聲で訊ねた。

『セムヨン・ペトローキチ・カルロミエーチエフ樣がお來で御座います。お通し申しませうか。』

『無論、お通し申しなさい。それからマリアンナ・ウイケンチエウナに、客間へ降りて居て貰ふやうに言つて頂戴。』

ワレンチーナ・ミハーロウナは Rebue des Deux Mondes を小さい卓子の上へ投げ遣り、長椅子に靠れながら眼を上の方へ向けて、思ひに沈んで居るやうな眼付をした。それが非常に彼女には似合つた。

其の後からセムヨン・ペトローキチ・カルロミエーチエフと呼ばれた二十三歳の青年が、氣輕に、無造作に、且つぐつたりとした樣子で部屋へ這入つて來た。彼は突然しとやかに姿を現はし、片側へ身を寄せて一寸頭を下げてから、跳ね廻るやうに身體を起した。彼は半ば謙遜して居るやうに、半ば諛ふやうに口を利き、ワレンチーナ・ミハーロウナの手をうや〳〵しく取り上げて、溢れ出るやうに接吻をした。然う云つた風な樣子から判斷すると、此の訪問者は此の州に住んで居る人でもなければ、單に一時住居の田舍人でもなく、更に財產家ですらもなくて、ペテルブルグの上流社會での本當の豪物としか思はれなかつた。彼は又最上のイギリス仕立の服裝をして居た。白い麻のハンケチの色を着けた緣が、小さい三角形をなしてスウエ

ーデン風のジャケットの平な横衣嚢から覗いて居り、一つ眼鏡が割合に幅の廣い黑リボンで吊されて居り、スエード手套の白ちやけた色合は、細いヅボンの白ちやけた鼠色と相應じて居た。短く刈つた髪は、平に梳られて居た。小さな眼と眼の間の狹い女性的な顏、壓し付けたやうな細い鼻、眞赤な唇、何れも素性の好い、貴族の氣持の好い安らかさを示して居た。凡てが柔和であつた……が、其の柔和はやがて復讐的な表情に變つて、粗大なところさへも加はつた。そして何人か、又は何物かゞ彼の保守的な、愛國的な、宗教的な主義と衝突しないでは居られぬ樣になつた。――然うなつて來ると、彼は更に無情になつた。凡ての儀容は見る間に消え失え、優しい眼には獰惡の光が燃え上り、小さな美しい口からは醜惡な言葉が迸る――そして訴へる。哀つぽい涙聲を振り絞つて、政府の權力に向つて訴へるのだ！

セムヨン・ペトローキチの一族の祖先は唯の植木屋にしか過ぎなかつた。彼の大祖父は其の鄕里に於てはエロメンツオーフとして知られて居た……併し後にカルロメーツオフと改名し、彼の父の代になつて更にカルロメーチエフと書き變へ、最後に彼セムヨン・ペトローキチがそれにYの一字を加へて、心から眞面目に自分を生粹の貴族と考へるやうになつたのである。それどころではなく彼は更に自分の一族は、三十年戰爭にオーストリヤ軍の元帥であつ

たガルレンマイエル男爵から出て來たのであるとさへ思つて居た。セムヨン・ペトローキチは宮內省の役人で、侍從官の肩書を有つて居た。彼は敎養と云ひ、世間的の知識と云ひ、婦人社會に於ける人氣と云ひ、それから風采と云ひ、何から何まで外交官になる資格を備へて居たのではあるが、唯彼の愛國主義がそれを妨げて居た…… Mais quitter la Russie ! Jamais ! (たゞロシヤを捨てる事が！どうしても！)

カルロミエーチエフは可成りの財產もあり、手蔓もあり、且つペテルブルグ官吏社會の明星と仰がれた名高いB――公爵が un peu trop féodal dans ses opinions (言ふ事が少し封建的になり過ぎる) と云つたほどに、彼は信用の出來る人間だと云ふ評判をも取つて居た。彼は今自分の財產管理上の要務で――即ち「いぢめたり、搾り取つたりする」爲めに二箇月の暇を貰つてS――州へ來たのであつた。無論そんな事より外には何もする事がなかつたのだ。

『最うボリス・アンドレーイチにお目に懸れる事と思つて參つたのですが。』と彼は足を片々づゝ行儀よく動かしながら、大人物と云はれる人のやるやうな思ひもかけぬ横視を使つて、口を切つた。

ワレンチーナ・ミハーロウナは微かに眉を顰めた。

『でなければ、貴方は被來らないお意で御座いまして？』

カルロミエーチエフはワレンチーナ・ミハーロウナの問の意味に合はない不調和な樣子で背後へ倒れるばかりになつて、

『ワレンチーナ・ミハーロウナ！』と叫んだ。

『あゝ、貴方はそんな風にお思ひになる事が……』

『まあ、まあ、おかけ遊ばせ。ボリス・アンドレーチチは直に參るでせうよ。停車場まで迎ひの馬車を遣りましたから。暫くお待ち下さい……やがて參りませう。幾時で御座います？』

『二時半です。』ヅボンの衣嚢からエナメルで裝飾を施した大きな金側時計を出して見てカルロミエーチエフは答へた。そしてわざ〳〵時計をシブヤーギン夫人に見せた。『私の時計を御覽に入れましたかな。ミハイルからの贈物です。御存じでせう。あのセルビヤの公爵の……オブレノーキチですよ。此處にあの人の紋章があります。御覽なさい。私とは非常に親しい友達でして、よく一緒に獵に行きましたつけ。そりや最う好い人ですよ。それに人の主たるべきものゝ有つやうな確固した腕を有つて居ます。くだらない事なんかは少しもしない人間ですよ。なか……なか……何う……して！』

カルロミエーチエフは安樂椅子へ身體を埋め、足を組合せて、ゆつたりした樣子で左手の手袋を脱ぎかけた。

『私達の地方にもミハイルのやうな人さへありますればね！』

『何故で御座いますの？　何かお氣に召さぬやうな事が御座いまして

カルロミエーチエフは鼻に皺を寄せて、

『えゝ、毎も此處の州會と來ては！　眞實此處の州會と來ては！　何の役にも立たないぢやありませんか。たゝ徒らに政務を害し、迷信的觀念を……高め……』（カルロミエーチエフは手袋の壓迫から逃れた左手を振つた。）『……出來もしない期待を高めるだけです。」（彼は今度は手を吹いた。）『私はペテルブルグでも此の事を話して居たのです……Mais bah！（だが、何うなるもんですか）一體の風潮が然うでないんですからね。此家の御主人までが……まあね！　いや、無論有名な進歩主義のお方ではありますが！』

シブヤーギン夫人は小さい長椅子の上で威儀を正した。

『え？　貴方は、カルロミエーチエフさん、貴方は政府に反對で被居いますの？』

『私が？　反對ですつて？　何う致しまして！　少しもそんな事は！　Mais j'ai mon franc

parler（だが正直に申しますと）私は時には批評は致しますが、併し常に服從して居るのです。』

『ところが、私はそれと丁度反對で御座いますの。私は批評も致しませんが、服從も致しません。』

『あゝ、Mais c'est un mot !（でもそりやほんの言葉だけですよ）お差支へなければ、其の貴方のお言葉を私の友達に言つて聞かせて遣りませう。ラディスラス bous sabez（御存じの）——其の男は今社會小說を書いて居ます。私は最う其の何章かを讀んで聞かされましたが、それは大したものですよ。Nous aurons enfin le grand monde russe peint par lui-meme.（はじめて私達はあの男の筆で偉大なるロシヤを描いて貰へるんでせ）』

『何處へ出る筈になつて居るので御座いますの？』

『無論、「ロシヤの先驅者」へですよ。あれは私達の Rebue des Deux Mondes（フランス雜誌の名）なんです。貴方も多分御覽でしたな。』

『えゝ、ですけれど、何だかだん〳〵つまらなくなるやうぢや御座いませんか。』

『多分……多分……あの雜誌は多分、先頃は少し其の——流行の言葉で申しますと——ちつとばかり千鳥足になつて居たのでせう。』

カルロミエーチエフは心底から笑つた。彼は「千鳥足」と言つたのをひどく愉快に思つた。

「ちつとばかり」と言つたのまでも然う思つたのである。

『Mais c'est un journal qui se respecte.（ですがあれは兎に角尊敬すべき雜誌ですよ）』彼は斯う言葉を繼いで、『それが第一です。私は正直に申しますと、ロシヤの文學には殆ど興味を有つて居ません。今日では、ほんのつまらない平凡の人間しか描かれて居ないんですからな。實際最う小說の女主人公は料理人、それも唯の料理人にまで下落して居るんです。Parole d'honneur !（たしかに）！ですがラディスラスの小說は。私は確かに讀みます。Il y aura la petit mot pour rire（それには可笑しい言葉なんか殆んどありません）……それに其の傾向が素敵です。虛無主義者が遺憾なく曝露されるのです。それに其の問題に關するラディスラスの考へ方に就いては、私は責任を以て qui est très correct（甚だ正確である）とお答へする事が出來ますよ。』

『あの方の是れ迄の物から推して見ましても、無論然うでせうよ。』とシブヤーギン夫人が言葉を添へた。

『あゝ、jetons un voile sur les erreurs de sa jeunesse.（あの男の若い時代の失敗の上へヴェールを投げしめよ）』とカルロミエーチエフは叫んだ。そして右手の手袋を脫いだ。

ワレンチーナ ミハーロウナは再び微かに瞼をしばたゝいた。彼女は人並ならぬ眼を、何方かと云へば自由に使ひすぎる習慣があつた。

『セムヨン・ペトローキチ、』と彼女は呼びかけて、『失禮な事を申すやうですが、貴方がロシヤ語でお話をなすつて被居りながら何故然うフランス語を澤山お交ぜになるでせう。それは最う……失禮ですが……流行後れだと存じますわ。』

『何故です？　何故です？　誰もかも貴方のやうに完全に本國の言葉を使ひこなせないんですからな。私にしましたところで、ロシヤ語と云ふものが勅令によつて定められた言葉であり、政府の規定にかゝる言葉である事は承認して居ますし、其の純美な所も賞讃して居ます。又其の點ではカラムヂンを讃美しても居ます……ですが、ロシヤ人の所謂日常語と云ふものが本當に存在して居ませうか。例へば de tout a l'heure（たつた今）私の感動詞だけでも、何うして飜譯する事が出來ませう。C'est un mot !（それはほんの言葉なんですよ）それはもうほんの言葉なんですよ……まあね！。』

『お悧巧な言ひ方をなさいますのね。』

カルロミエーチエフは笑つた。

『悧巧な言ひ方ですつて！　ワレンチーナ・ミハーロウナ！　ですが、貴方はお感じになりませんか……何だか斯う學者臭い所のあるのを……風味と云ふものゝ失くなつた……』

『まあ、貴方は私を信じては下さらないのですわね。ですけれど、マリアンナは何をして居るのでせう。』斯う言つて彼女はベルを鳴らした。僕がやつて來た。

『マリアンナ・ウイケンチエーウナに客間へ降りて來るやうにつて言つて遣つてあるんだがね。私の命令けた事を言はなかつたのぢやないかえ。』

僕がそれに答へないうちに、其の背後から濃い色の寛衣を着て、髪を短く斬つた一人の少女が戸口へ現はれた。それがマリアンナ・ウイケンチエーウナと云つて、シブヤーギンの姪に當る少女であつた。

六

『濟みませんでした。』とシブヤーギン夫人の方へ進み寄りながら彼女は言つた。『いろんな事でごた〳〵して居ましたものですから。』

やがて彼女はカルロミエーチエフにお辭儀をし、一寸側へ立つて、鸚鵡の傍の小さなオッ

トマンに自分の席を取つた。鸚鵡は彼女を見付けるや否や、羽をばた〳〵やつて此方へ頸を伸ばして居た。

『何故、そんな遠い所にお居でなの、マリアンナ。』と彼女が席を占めたオットマンへ眼をくれてシブヤーギン夫人は言つた。『貴方の小さいお友達の傍に居たくはありませんの？　まあね、セムヨン・ペトローキチ。』とカルロミエーチエフの方へ向いて、『鸚鵡はマリアンナとそりや最う好い仲ですの。』

『少しも不思議は御座いません！』

『ところが、私とは駄目ですの。』

『成る程、そりや不思議ですな。大方貴方はお苛めになるんでせう。』

『何う致しまして。それどころですか私は氣に入るやうにばかりして居ますの。ですけれど、私のする事は何一つ喜びませんの。いえ……それは同情の場合ですが……反感の……』

マリアンナは瞼の蔭からシブヤーギン夫人を睨んで……そしてシブヤーギン夫人は又彼女を睨んだ。

此の二人の女は互に好き合つては居なかつた。叔母と比べるとマリアンナは、殆ど「世間

並の些々たるもの」と呼ばるべきほどの綺量であつた。彼女は圓い顏、大きな鈎形の鼻、茶色の大きな澄んだ眼、薄い眉毛、薄い唇を有つて居た。濃い鳶色の厚い髮の毛を短く刈つて居て、何所となく人付のよくない所があつた。併し全體の人柄には何處か豪氣大膽な所があり、元氣の好い情熱的な所があつた。手足は極めて小さく、丈夫さうに出來て、而もしなやかな小さい體は十七世紀時代のフロレンス式彫刻を想像させた。擧動は總じて輕くて而もしとやかであつた。

シブヤーギンの家庭に於けるマリアンナの地位は、何方かと云へばむつかしいものであつた。ポーランド人の血を半分受けて居た彼女の父は非常に敏捷な精力家で、將官の地位にまで進んで居たのであるが、政府に關する或る大陰謀の露見によつて突然の難に遭ひ、裁判に廻され……罪を宣せられた結果は、官位も爵位も剝奪されてシベリヤへ送られた。後罪を赦されて歸還したが、最う二度と攀ぢ上る手蔓もなくて、極めて貧しい生活のうちに此の世を去つた。シブヤーギンの姉で一人娘のマリアンナの母に當る彼の妻は、あらゆる榮譽を奪ひ去られた打擊に堪へ得ないで、夫の死後間もなく、其の後を追うた。そこでシブヤーギンは生き殘つた自分の姪に、彼女自身の家を與へて獨立の生活をさせたのであるが彼女は然う云ふ人

に依賴した生活を快く思はないで、片意地な自分の性質のあらゆる力を揮ひ起して自由に向つて努力した。彼女と叔母との間に絶えざる暗鬪の演じられて居るのは其の爲めである。シブヤーギン夫人は彼女を虚無主義者であり、無神論者であると思つて居た。マリアンナは又自分に對する無意識的な抑壓者としてシブヤーギン夫人を憎んだ。彼女はあらゆる人に對すると同じく彼女の叔父からも離れて居た。併し彼女はたゞ彼等から離れて居たゞけである。彼等を怖れたのではない。彼女には臆病な氣質は少しもなかつたのだ。

『反感。』とカルロミエーチエフは同じ言葉を繰返して、『然うです。それは怪しからぬ事です。例へば誰でも私を宗教心の深い人間、充分な意味に於けるオルソドックスだと云ふ事を知つて居ります。然るに或る坊さんが捲毛を鬚のやうにひらつかせて居るのを見ますと、私は最う到底もそれを平氣で見て居る事が出來ないのです。實際嘔吐を催すのです。』

斯う言つてカルロミエーチエフは繰返し握り拳を振つて、其の嘔吐を催すと云ふ事を現はさうと試みた。

『一體に髮の毛と云ふものが貴方にはお煩いものと見えますのね。セムヨン・ペトローヰチ。』とマリアンナが口を出した。『貴方は定めし私のやうに髮を刈つて居ります者は、誰でも

平氣では御覽になれないので御座いませう。』

シブヤーギン夫人は徐に眉毛を上げ、首を傾げた。今時の若い女は斯うもやす〳〵と人と話が出來るものかと驚いたらしく見えた。カルロミエーチエフは恐れ入りましたと云ふやうな作り笑ひをした。

『勿論、』と彼は答へた。『貴方のやうなお美しい捲毛を無慈悲なる鋏の斬り落すに委すと云ふ事は殘念至極に思ふのですよ、マリアンナ・ウイケンチエーウナ。ですが、それには何の反感もありません。兎に角……貴方の例は寧ろ……寧ろ……私を proselytise（改宗）させると云ふものです！』

カルロミエーチエフは適當なロシヤ語が思ひ當らなかつた。と云つて女主人の注意があつたのでフランス語を話したくはなかつたので、仕方なく英語で Proselytise と云ふ言葉を用ゐたのであつた。

『でも、有難いことにはマリアンナさんはまだ眼鏡をおかけでないから宜しいんですわね。』

とシブヤーギン夫人が口を出した。

『それに自然科學を研究したり、それから又婦人問題に興味を有つたりして居ながら、カフス

やカラーをまだお着けでないのは、本當に殘念ですわ……然うぢやなくッて、マリアンナ。』

是れは凡てマリアンナを困らす爲めに言はれたのだが、彼女は少しもへこまなかつた。

『眞實ですわ、叔母樣。』と彼女は答へた。私、其の方の事なら何もかも讀みました。其の問題の眞相を正確に理解しやうと思つて居りますの。』

『何しろ、それは、年が若くなくつては駄目ですよ。』斯う言つてシプヤーギン夫人はカルロミエーチエフの方へ向いた。『貴方や私は最う然う云ふ事には心配はありませんわ――ねえ？』

カルロミエーチエフは同情したらしく微笑した。彼は此の夫人の冗談には何うしても撥を合はさなければならなかつた。

『マリアンナ・ウイケンチエーウナは、』と彼は口を切つて、『理想主義で固まつてお居でゝすね……竟り青春時代のロマンチシズムなんです……何しろ其の時代には……』

『ですけれど、私は自分ながら馬鹿かしく思つて居ますの。』とシプヤーギン夫人は口出しをした。『私だつて矢張り然う云ふ問題には興味を有つて居るのですわ。まだ、然う老い込んだ譯でもないんですものね。』

『私だつて、矢張り然う云ふ風な問題には興味を有つて居ます。』とカルロミエーチエッは慌てゝ叫んだ。『たゞ然う云ふ事に關與する事を禁じやうと思つて居るだけです。』

『貴方は然う云ふ事にお關りになるのを禁じやうと思つてお居でになるんですつて？』とマリアンナは詰るやうに言つた。

『然うですとも。公言して憚らないのです。尤も貴女が然う云ふ事にお關りになるのをお止めすると云ふのではありません……併しそれを口にする事は……いや、』――彼は唇を指で抑へて――『兎に角嚴密に申しますと――私は禁じやうと思ふのです――無條件的に。』

シプヤーギン夫人は笑つた。

『まあ。貴方は其の問題を解決する爲めに何の省かに委員を御指定になると宜しいでせうにねえ。如何です。』

『何故委員を指定しないかと被仰るのですか。それでは一寸先の見えない腹の減つた三文文士にやらすよりも私達の解決の仕方が好くないと御考へになるんですか。あの第一流の天才達よりは。それでは先づ私達はボリス・アンドレーキチを總裁に推す事に致しませう。』

シプヤーギン夫人は前よりも一層烈しく笑つた。

『お氣をおつけにならなくてはいけませんよ。ボリス・アンドレーキチは時にはあの通りのジャコビン（過激な革命家）なんですから……』

『ジャッコー、ジャッコー、ジャッコー』と鸚鵡が呼んだ。

ワレンチーナ・ミハーロウナはその方へハンケチを振つた。

『感じ易い人達の話の邪魔をするもんぢやありません！……マリアンナ、鸚鵡を靜かにさせて頂戴』

マリアンナは籠の方へ向いて、それと見て差し出した鸚鵡の頸を掻き始めた。

『えゝ』とシブヤーギン夫人は言葉をつゞけて『ボリス・アンドレーキチには時々私びつくりする事があるのです。あの人は何か……何か……演壇のやうなものを自分の頭の中に拵へてゐるのですわ』

『C'est parce qu'il est orateur（それはあの方は雄辯家でゐらつしやるからです）』とカルロミエーチエフは熱してフランス語で云つた。『御主人は他人の持つて居ない言葉の天才を持つておいでになります。それに成功と云ふ事には慣れてゐらつしやるのです……ses propres paroles le grisent（あの方は御自分の言葉に醉つてゐらつしやる）……更にその上に人氣と云ふものを好んでゐらつしやる……それで居てさう云つた風

のものからやゝ離れてゐらつしやるやうぢやございませんか。Il boude（御不平なんですか）？』

シブヤーギン夫人はちらつとマリアンナを見やつた。

『私には氣が付きません』と暫く默つて居た後で答へた。

『さうです』とカルロミエーチエフは愁を帶びた調子で追求した。『いくらか大目に見てゐらつしやつたやうです』

シブヤーギン夫人は再び意味ありげな眼付でマリアンナの方を指し示した。

カルロミエーチエフは『解りました』と云ふやうに嫣然して、眉をひそめた。

『マリアンナ・ウイケンチエーウナ！』かう彼は突然無用な大聲を出して呼んだ。『貴女は今年又學校へゐらつしやるおつもりですか』

マリアンナは籠から振り向いた。

『それが又貴方に何か關係がございまして？　セムヨン・ペトローキチ』

『實に非常な關係があるのです』

『それを禁じやうとなさるのではないでせうね？』

『虛無主義者に對しては學校のことを考へる事すら禁じやうと思ふのです。ですが、敎師の

指導の下に、又は教師の監督によつて、私は自分で自分の學校を見出したいのですよ』

『眞實、今ではね。私自身でも今年は何をして居るのか解らないのですわ。何もかも去年は惡い方へばかり變つてしまつたのですもの。それに夏の間は學校もございませんしね』

話して居るうちに、マリアンナの顏色はだん〳〵沈んで來た。云ふ事が一々努力を要するやうでもあり、强ひて話をつゞけて居るやうでもあつた。可成に强い自意識も加つて居た。

『まだ充分に準備がしてないんでせう？』とシプヤーギン夫人は聲に反語的の震へを帶びさせて訊ねた。

『さうかも知れません』

『え？』とカルロミエーチエフは又しても叫んだ。『何ですつて？　驚きましたね　土百姓の女の子どもにABCを教へるのに準備がいるんですつて？』

が、その瞬間コーリャが『かあさま！　かあさま！　とうさまがゐらしてよと』叫びながら客間へ驅け込んで來た。そしてその後から帽子を被り黃色いショールを着た白髮の婦人が、肥つた小さな足を引きずりながら這入つて來て、矢張ボリスが直に見えますよと告げた。此の婦人はシプヤーギンの伯母で、名をアンナ・ザハローウナと云つた。客間に居た人達は皆一

勢に席を立つて控の間へと驅け出した。そしてそこから更に梯子を下りて大玄關へと行つた。刈り込まれた樅の樹の長い並木路が往來から眞直にこの入口へとつけられて居た。四頭の馬に曳かれた馬車が既にその並木路を進んで居た。一番先に立つたワレンチーナ・ミハーロウナはハンケチを振り、コーリャは黃色い聲で叫んだ。馭者は巧に逆上つて居る馬を繰つた。馬丁は慌てゝ箱から飛び下りて、扉も、鍵も、蝶鉸も、何もかも千裂れよとばかりに戸を開けた。と、唇邊に、眼に、顏全體に愛嬌の好い微笑を湛へながらボリス・アンドレーキチが、同じ打ちとけた身振で外套をはねのけつゝそこから飛び下りた。迅速に而もしとやかにワレンチーナ・ミハーロウナは兩腕を彼の頸に投げかけて、三たび彼に接吻をした。コーリャはぢだんだん踏みながら、父の上衣の裾を後へ引いた……が、彼は先づ不愉快な不氣味なスコッチの旅行帽を脫いでから眞先にアンナ・ザハローウナに接吻をし、次に矢張戸口まで出て居たマリアンナとカルロミエーチエフとに挨拶をした。わけてもカルロミエーチエフには、まるで鐘の繩でも引張るやうに腕を上下に働かせて、壯なイギリス風の Shake-hands（握手）を與へた。それが濟んでから彼はやつと自分の息子の方へ向いた。そしてそれを腕の間に抱き上げて、自分の顏をしつかりと押しつけた。

かう云ふ風な事の演じられて居る間に、ネヅダーノフは濟まないやうな樣子でこつそりと馬車から匐ひ出て、帽子を手でおさへ額越に上を仰ぎながら、前の方の車輪の傍に立つて居た……ワレンチーナ・ミハーロウナは夫をエムブレースした時、その肩越に此の新來の人の姿を鋭く眺めやつた。シブヤーギンは豫じめ自分が今度家庭教師を連れて來る旨を報じて置いたのであつた。

一同はなほも歸りたての主人と挨拶や握手を交しながら、階段を上つた。階段の兩側には重立つた男共と女中とがきちんと立ち並んで居た。彼等は「亞細亞主義」で永く禁じられて居た爲めに、主人の手に接吻すると云ふやうな事をせずに、ひたすらうや〳〵して頭を下げた。そしてシブヤーギンは頭と云ふよりは寧ろ鼻と眉の運動で彼等の挨拶に答へた。

ネヅダーノフもその廣い階段をゆる〳〵昇つて行つた。控の間へ這入るや否や、先刻から彼を探して居たシブヤーギンが、彼を妻と、アンナ・ザハローウナとマリアンナとに紹介せた。そしてそれと同時にコーリヤに向つて『この方がお前の先生です。氣をつけて被仰る事に從ふやうにしなくちやならないよ。さあ、握手をさせていたゞきなさい』と云つた。コーリヤはをづ〳〵ネヅダーノフの方へ手を差し出して、さてぢつと彼を見つめて居たが、何等感動すべ

き點もなく引きつけられる點もなかつたので、再び Papa の方にからみ付いた。ネヅダーノフは斯の夜の劇場に於けると同じ心苦しさを感じた。彼は古い、どちらかと云へば醜い大外套を着て居り、顏と手は道路の埃にまみれて居た。ワレンチーナ・ミハーロウナは彼に何か愛想の好さゝうな言葉を云つたが、彼はそれが充分に解らなかつたので、返事をしなかつた。彼はたゞ彼女が特別の晴やかさと懷しさとを以て夫の顏を見つめ、且その傍を離れまいとして居るのに氣を留めて居た。彼は縮れた髪の毛にむやみと香油をつけたコーリヤの頭が氣に入らなかつたし、カルロミエーチエフを一目見て「何てハイカラな小僧つ子だらう」と思つた。が、その他の人達には少しの注意も拂はなかつた。シブヤーギンはわが家を守護する神々や、彼の長く垂れた頰髭とどちらかと云へば圓い小さい頭とを心からの休安裡へ投げ込んだやうな境遇を見廻しでもするやうな威嚴のある樣子で二度まで頭をめぐらした。と、やがて彼は力强い響き渡る聲で僕を呼んだ。その聲には旅の疲れの氣配すらもなかつた。

『イワン！　此の御方を靑の間へ御案內申して、お荷物を持つて行きなさい』

かう命じて置いて更にネヅダーノフに向つてもう休むやうに、それから荷物を解き、仕度をとゝのへてから、かつきり五時に食事をして來るやうに告げた。ネヅダーノフは頭を下げて、

イワンの後から二階にあるその所謂「青の間へ」と行つた。

一同は客間へ通つた。歡迎の言葉が今一度くりかへされた。年老つた半盲の乳母がうやうやしく這入つて來た。年に免じて彼女はシブヤーギンの手に接吻することをゆるされた。やがてカルロミエーチエフに言ひわけしてシブヤーギンは妻に護られながら私室へと退いた。

七

下男がネヴダーノフを案内した廣い居心地の好い部屋は庭に臨んで居た。窓が開けてあつて、そよ風が白い簾を微かにはためかせて居た。簾は船の帆のやうにふくらんだり、上へあがつたり、やがて又もとのやうになつたりした。黄金色の日光は天井張の表を徐々に滑り動き、部屋中は新鮮な、しつとりと水氣を含んだ春の薫に充ちて居た。ネヴダーノフは下男を出してやつてから、行李を解き、手水を使ひ、着物を着代へ始めた。旅は彼を疲れ果てさせた。まる二日と云ふもの、知りもしない男とさま〴〵な的もない話をしつゞけたので、彼はひどく神經を使つた。倦怠と云ふでもなく、憤懣と云ふでもない、何か知ら苦しいものが、彼の心のど

ん底で秘にうごめいて居た。彼は自分の氣の弱さを腹立たしく思つた。が、矢張彼の心は滅入つて行くのであつた。

彼は窓際へ行つて庭を眺めにかゝつた。それはモスクワ邊では見る事のない舊世界式（東半球式）の豐饒な黑土の庭であつた。長いゆるやかな傾斜の丘の麓へ展がつて居て、かつきり、と四つの部分に分たれて居た。家の前の二百歩ばかりの間は花園で、眞直な、狹い、砂利を敷いた徑があつたり、アカシヤやライラックの植込があつたり、圓形の花壇があつたりして居る。左の方の厩のある所を通つて、眞直に打穀場のあるあたりへ下つた所には、すぐにつゞいて果樹園があつて、林檎、梨、梅、スグリ、苺などの樹が植ゑつけてある。それから家と丁度反對の側には、交叉し合つた菩提樹の並木路が幾筋もあつて、それが全體集つて一つの大きな方庭を成して居る。更に右手の眺望は道路に限られて居て、二列の銀楊樹が立ち塞がつて居り、枝垂れ赤楊の植込の後には溫室の屋根が見える。庭全體は今や初春の若芽の淡い緑で蔽はれて居り、飛び交ふ蟲の聲高な夏の唸りはまだ聞えないが、若葉が到る所に呟やき、何處とも知れずヒバが飛ひ、二羽の鳩が絶え間なく鳴き交し、一節毎に所を變へてさびしいカッコーが呼んで居る。更に水車池の遙あなたから數知れぬ車輪の軋る音に似た白嘴鴉の合唱が聞える。そ

してこの新鮮な、俗世界を離れた、平和な生活全體の上を、大きな、懶惰な鳥のやうに胸ふくらませて、眞白な雲が音なく漂うて居る。ネヅダーノフはぢつと眺め入り、ぢつと聽き入り、更に開いた冷たい唇と唇との間からその大氣を吸ひ入れた。

かくて彼の胸はだん〳〵輕くなつた。平和の念が彼をおそうた。

これと同時に、階下の寢室では彼についての話が持ち出されて居た。シブヤーギンは彼と近親になつた事や、G公爵から聞いた話や、旅行中彼等の取り交した議論などについて、妻に物語つて居た。

『好い頭腦を持つて居る！』と彼は繰り返し云た。『それに知識もなか〳〵豐富だ。實を云ふと、彼の男は過激な革命論者だが、併しお前も知つて居る通り私にとつてはそんな事は何でもない。が、兎に角あゝ云ふ手合は野心を持つて居るものだし、それにコーリヤはさう云つた風な馬鹿げた事を彼の男から取り込むには年があまりに少な過ぎるんだからね』

ワレンチーナ・ミハーロウナはどちらかと云へば聞き慣れないが面白い戲談でも聞いて居るやうに、打解けたやうでありながらどこか皮肉な微笑を浮べて夫の話を傾聽した。自分の seigneur et maître（あるじの君）が、しかく堅實な人であり、しかく重要な官位にありながら

も、なほ且二十歳の若者のやうな突飛な性の惡い戲事が出來ると云ふ事は、彼女にとりては積極的に氣持の好い事であつた。やがて眞白な襯衣を着、青い絹のヅボンツリをして姿見鏡の前に立ちながら、シブヤーギンは二つのブラッシュを使つて髮をイギリス風に梳し始めた。

と、ワレンチーナ・ミハーロウナはトルコ風の長椅子の上で體の下に小さな靴を引き上げてかひ込みながら、領地の事や、うまく行かない製紙場の事や、暇を出さうと思つて居る料理人の事や、漆喰の剝げかゝつた寺院の事や、マリアンナの事や、カルロミエーチエフの事……についてのさま〴〵なこま〴〵した出來事を話し出した。

この夫婦の間には純な諧調と信和とがあつた。二人はずつと以前云ひ慣れて居た如くに今もなほ眞に「愛と善意」とを以て生活して居た。かくてシブヤーギンは化粧を濟ますと、ワレンチーナ・ミハーロウナに向つて男らしく「彼女の小さな手」を求め、彼女が兩手を與へて右と左を交る〴〵接吻する夫の樣子を誘らしげに見つめて居ると、今度は二人の顏には同じく美しくて醇な感情が現された。尤もそれは妻の方へ行くとラファエルにもでもふさはしさうな眼のうちに映じ、夫の方では一個の文官の平凡な「覗き穴」に映ずると云ふやうな違ひがあつたけれど。

かつきり五時にネヅダーノフは晩餐の席へ行つた。それは呼鈴をさへ用ひずに、支那風の銅鑼の間伸のした唸りで報じられたのであつた。一同はもう食堂へ集つて居た。シブヤーギンは高い衿飾の上から改めて彼に丁寧な挨拶をして、アンナ・ザハローウナとコーリャとの間に彼の席を指定した。アンナ・ザハローウナはシブヤーギンの亡父の妹に當るお婆さんで、取つて置きの着物のやうにぶん〳〵樟腦の香をさせ、氣苦勞の多いらしい沈み込んだ樣子をして居た。此の家に於ける彼女の地位はコーリャの媒姆か家庭教師と云ふ格であつた。皺のよつた彼女の顏は、ネヅダーノフが彼女と彼女の小さな教兒との間に席を占めた時、不快の色を現はした。コーリャは彼の新しい隣席者を横視で偸み見た。鋭い性の此の子は自分の家庭教師の心苦しさ迷惑さを直にそれと感付いた。彼は眼を上げる事もせず、食べるものも碌に食べなかつたのだ。コーリャはそれを喜んだ。その時まで彼は自分の家庭教師はきつと意地の惡い、嚴格な人にちがひないと怖れて居たのである。ワレンチーナ・ミハーロウナも亦ネヅダーノフを眺めた。

『まるで書生さんのやうな人だ』かう彼女は思つた。『世間をあまり知つて居ないのだ。併しあの顏は面白いし、髮の毛の色は無類だ。まるで昔のイタリーの大家達がきまつて赤毛として畫いた使徒のやうだ。それに手が綺麗だ』

食卓について居た人達は無論者ネヅダーノフを見やつた。而も皆恰も彼を憐れみ、この場を無事に濟ませてやりたいものだと思つて居るらしく見えた。彼はこれを知り旦喜んだ。が、それと同時に何となく腹立たしくもあつた。倉卓の話はカルロミエーチエフとシブヤーギンとで持ち來つて居た。彼等は州會知事、通行稅、贖罪箇條、ペテルブルグとモスクワに於ける彼等の共通の知人目下勢力を得かけて居たカトコフ氏の學派、勞働者を得る事の困難、家畜に原因した科料及び損害要償などのさま〳〵な話題について、更に又ビスマルクや一八六六年の戰爭やカルロミエーチエフが「偉い奴」と呼んで居たナポレオン三世などについて語り合つた。若いカムメル、ユンカーは最も退歩的な說を吐いた。彼は終には――無論戲談ではあつたが――ある誕生の祝宴で自分の友達の或る紳士から與へられた乾杯辭の話を持ち出すまでになつた。『吾輩は吾輩の承認する無比なる主義の爲めに飲む』かう熱した地主が呼んだと云ふのであつた。『更に笞の爲めに又レーデレルの爲めに！』

ワレンチーナ・ミハーロウナは眉をひそめた。そしてその引照の de très mauvais goût（最も惡い趣味）であることを言つた。所がそれと反對に、シブヤーギンは最も進歩した說を述べ立てた

穏かに、且どちらかと云へば無造作に、彼はカルロミエーチエフの説を駁した。彼は幾分相手を嘲笑するやうな口吻さへ洩らした。

『セムヨン・ペトローキチ！　貴方の奴隷開放に關する御考は』かう彼は談話の中で云つた。

『一八六〇年中畏友アレキセイ・イワーニッチ・ツウェリチノフの草案に成つた建白書を思ひ出させます。當時ペテルブルグで到る所の客間で彼の人がそれを讀んだものでしたつけ。何でもその中に、全國到る所必ずや自由を得た百姓が手に手に松火を持つて歩き廻るであらうと云ふ事を描いた特に美しい文句がありました。貴方も御覽でしたらう。あの心の立派な、頬のふつくりした、眼の丸いアレキセイ・イワーニッチが『松火！　松火！　彼は手に松火を持つて歩き廻るだらう！』と云つた時のあの樣子を。いかにも、農奴開放は完成せる事實なのです……『所で松火を持つた百姓が何處に居ます？』

『ツウェリチノフは』とカルロミエーチエフは沈んだ調子で答へた。『松火を持つて歩き廻つて居るのが、百姓共でなくて他の人々であると云ふほどに考へ違ひが甚しかつたのです』

その言葉を聞くに及んで、それまでは殆ど對角線の向うの端に居たマリアンナに氣を留めて居なかつたネヅダーノフは、突然彼女と目を見合した。そしてその陰氣な娘と自分とは共

に同じ信念を持ち、同じ陣地にあるのだと云ふ事を、即座に感付いたのである。シブヤーギンから紹介された折には、彼女は何等の印象も彼に與へなかつた。然るに今の瞬間彼の捉へたその眼が彼女の眼であるとは、一體何としたことか。彼は更にかう云ふ疑問を我と我身に提供した。何等反抗するところなしに斯う云ふ言説を座して聞くと云ふ事、且その沈默によつて自分も彼等と説を同じうして居ると云ふ事を信じさせる理由を與へると云ふ事は、恥づべき事ではないか、不名譽の事ではないか、ネヅダーノフは再びマリアンナを眺めた。そしてその眼のうちに彼の疑問に對する答が讀まれたやうな氣がした。『一寸お待ちあそばせ』かうその眼が云つて居るやうだ『今は時を得てゐません……それだけの値打がありません……いづれそのうちにね。何事にも時期と云ふものがあります……』

彼女が自分を理解してくれたと云ふ事を思ふのは、彼には嬉しい事であつた。彼は再び會話を傾聽した……ワレンチーナ・ミハーロウナが夫に代つて、夫よりは一層自由に、一層合理的に辯じ立てゝ居た。教育のある、而もまだ若い人が、そのやうな舊式な因習主義に合する事が出來ると云ふ事は、彼女には考へ及ばぬ事であつた。『全く考へ及ばぬ』ことであつた。

『でもそれは無論』と彼女は云ひ足した。『逆語のつもりで被仰つたに過ぎますまい！　貴

方の方は、アレキセイ・ドミートリッチ』かう云つて彼女はネヴダーノフの方へしとやかな笑顔を向けた（かう呼ばれて彼は彼女が自分の名や父稱を知つて居るのに内心大に驚かされたのであつた）『勿論セムヨン・ペトローキチの御考と同じではないでせう。ボリスが流行中の御話を話してくれたのでございますよ』

ネヴダーノフは顏を赤くし、皿の上へのしかゝつて、何だか解かぬことをぶつ〳〵云つた。彼はかう云ふ高貴な御方々と話を交へる事に不慣なほどにはにかみやではなかつたのだ。シヴャーギン夫人は相變らず彼の方へ笑顏を向けて居た。夫は彼女を庇ふやうな口調で贊意を表した……併しカルロミエーチエフは思案らしく鼻と眉の間へ圓い眼鏡をつけて、自分と「理解」を共にしない學生を見つめた。が そんな事でネヴダーノフを煙に捲くと云ふのはむつかしい事であつた。寧ろ反對に先方は直と行儀を正してそのハイカラな役人を見据えた。そしてマリアンナに於て自分の味方を感得したと同じやうに思ひがけなく、彼はカルロミエーチエフに於て一個の敵を感知したのであつた。カルロミエーチエフの方でもそれに氣がついて、眼鏡を落し、側を向いて、笑ひ出さうとした……が、だめであつた。たゞ一人人知れず彼を崇拜して居たアンナ・ザハローウナだけが、内心彼に同感した。そしてコーリヤから自分を引

離さうとして居る招かぬに來た隣人に對して、更に一層の侮蔑を感じた。

晩餐はぢきに濟んだ。一同はコーヒーを飲みにと露臺へ出た。シヴャーギンとカルロミエーチエフとはシガーに火をつけた。シヴャーギンはネヴダーノフに純粹のレガリア（一種の卷煙草）をすゝめたが、彼はそれを辭退した。

『あゝ！ さう〳〵！』とシヴャーギンは叫んだ『すつかり忘れて居ました。貴方は御自分の紙卷煙草しかあがらないんですね』

『妙な御好ですね』とカルロミエーチエフは口のうちで云つた。

ネヴダーノフは殆んと怒鳴りつけやうとした。『僕だつてレガリアとシガレットの區別ぐらゐは知つて居るんだ、併し人の恩を被やうとは思はないんだ』殆んどかう口に出さうとした……が、それを抑へてすぐにその第二の無禮を、いつかは敵に仕拂ふべき「負債」のうちへ算入した。

『マリアンナ！』と突然シヴャーギン夫人が大きな聲で呼んだ。『知らない方の前だつて遠慮してゐるには當りませんよ……シガレットを御吸ひなさいな。結構ですわ。それに』かうネヴダーノフの方へ向いて言ひ足して『貴方々の御仲間では若い御婦人だつて煙草を召しあが

るつてことですわね』

『さうですとも』とネヅダーノフは冷淡に答へた。それが彼のシブヤーギン夫人に話した最初の言葉であつた。

『まあ、私いたゞきませんのよ』と彼女は天鵞絨のやうな光澤のある眼に愛嬌をたゝへて話しつゞけた…『時勢おくれですわねえ』

叔母に對する面當であるやうにゆつたりした愼重な態度で、マリアンナは紙卷煙草とマッチの箱を取り出して、ふかし始めた。ネヅダーノフもマリアンナから火を貰つて紙卷煙草をふかした。

非常に氣持の好い晩であつた。コーリヤとアンナ・ザハローウナとは庭へ出て行き、他の人達はそれから一時間ほど露臺に居殘つて、外氣を享樂した。會話は餘程快活になつた…カルロミエーチエフは文學を攻擊した。その點についてはシブヤーギンも亦進歩主義たる本領を發揮して、文學の獨立の爲めに辯じ、その功過を指示し、更にシヤトウブリアンのことやアレキサンデル・パウローキチ皇帝が彼にセント、アンドレイ第一世の稱號を與へた事實にまで言及した。ネヅダーノフはその議論には仲間入しなかつた。シブヤーギン夫人は一つは彼の

思慮深い謹愼に應ずる爲らしく、一つはそれに對して少々驚いて居るらしい表情で彼を眺めた。

一同は茶を飲む爲めに客間へ戻つた。

『甚だよくない習慣ですがね。アレキセイ・ドミートリッチ』かうシブヤーギンはネヅダーノフに云つた。『私達は毎晩骨牌をやるんですよ。それどころか禁制の勝負まで…どうぞそのおつもりで！　だが貴方にも仲間へ入つてくださいとは申しません…ですがマリアンナは善い事にはピアノで何かやつてくれませう。音樂はお好きでせうねえ。』

かう云つて相手の返事も待たないで、もう彼は骨牌の箱を取り上げた。マリアンナはピアノに向つて坐つた。そしてメンデルスゾーンの『言葉なき歌』の二つ三つを可もなく不可もなく彈いた。

『Charmant ! charmant ! quel toucher !（結構々々、何と云ふタッチでせう）』とカルロミエーチエフは遠くから火傷でもしたやうに叫んだ。が、此の感嘆詞は寧ろ禮儀のつもりで叫ばれたものであつた。ところでネヅダーノフはシブヤーギンからの希望の言葉があつたにも拘はらず音樂には少しの熱情も持つて居なかつた。

かう云ふ間にシブヤーギン夫妻とカルロミエーチエフとアンナ・ザハローウナとは骨牌を始めた……コーリヤは「お休みなさい」を云ひに來て兩親からの接吻と、茶の代りに大きなグラスに入た一杯の牛乳を貰つてから、寢床へと去つた。父は後から明日からアレキセイ・ドミートリッチに課業を始めていたゞくのだと云ふ事を大きな聲で云ひ聞かせた。それから間もなく、ネヅダーノフが迷惑さうな樣子で寫眞帳をめくりながら部屋の眞中に的もなくぐづぐづして居るのを見て、シブヤーギンは遠慮しないで行つて休んでくれるやうに、きつと旅行で疲れて居るだらうからと云ふことを告げ、更に自分の家にはこれと云ふ大した掟がないのだからと云ふ事を告げた。

ネヅダーノフは此許しに力を得て、皆に「お休みなさい」を云つて退いた。戸口で彼はマリアンナにぶつかつた。そして再びその眼のうちを見入つて、再び彼女のうちに自分の味方たるものゝある事をたしかめた。尤も彼女は此たびは前のやうに笑顏を見せないで、却つて彼に對して眉をひそめた事はたしかであつたが……

彼は自分の部屋が薫しい清々しさに充ち〳〵て居るのを感じた。終日窓が開たまゝになつて居たのだ。丁度窓と對して居るあたりにナイティンゲールがやさしい、節の好い歌を歌つて居た。圓味を帶びた梢の上の夜の空は、曖昧のあるぼうつとした薄明りがあつた。それは今まさに昇らうとして居る月のあかりであつた。ネヅダーノフは蠟燭をともした。灰色の火取蟲が雨のやうに庭から飛び込んで來て、燈火の方へ行つた。と、風が彼等を吹き戻し、蠟燭の青黃色い光をちら〳〵させた。

『妙だ！』 床の上に横になつた時にネヅダーノフは思つた。『あの人達は善い人達で、進歩した思想を抱いて、實に人道主義の……だが、俺の心はこの通り悲しい。Kummerlerr……kummerlerr……なあに朝になつたら好いだらう……何もさうセンチメンタルに考へるに及ばん』

が、その瞬間庭では夜番が音高く、しつこく拍子木を叩いた。そして長い、うめくやうな叫び聲が聞かれた。

『よく聞いて見ろ！』

『よウし！』と他の悲しげな聲が答へた。

『あああ！ 情ない！ ――まるで牢屋の中に居るやうだ！』

八

ネヅダーノフは朝早く起きた。下僕の來るのを待たず着替をして庭に下りた。庭は極めて廣く美しく見事に片附いてゐた。雇人が鋤でもつて路を削つて居た。深綠の茂みの中に熊手を手にした百姓娘の赤い頭巾が覗いてゐた。ネヅダーノフは路を湖水の方へと採つた。

朝まだきの霧はもう消え失せて居たが蔭の深い岸邊の隅々には尙靄がところどころにからんでゐた。未ださう高く昇らぬ太陽は廣い絹を布いた樣な鉛色の水面に薔薇色の光を投げた。洗濯場の邊りでは數人の大工が忙しげに仕事をしてゐる。其處に浮んでゐる新造のペンキの色鮮やかなボートが周圍の水に微かな渦卷を立て乍ら右左に搖れてゐた。稀に聞えて來る人の聲も愼ましやかである。あらゆるものに朝の感じがあつた。朝の仕事の安らかさと捗捗しい進行の感じがあつた。生活の秩序と正確との感じがあつた。そして見よ、ネヅダーノフは並樹路の曲り角で秩序と正確との權化——シブヤーギンが自分の前に來るのに會つた。

彼は樂衣の樣に作つた豌豆色の外套を着頭には緣を取つた帽子を被つてゐた。彼は英吉利風の竹の杖に身を凭せて居た。そして彼の剃り立ての顏は滿足の色に輝いてゐた。彼は自分の領地を見廻りに出て來たのであつた。シブヤーギンはネヅダーノフに向つて丁寧に挨拶をした。

『やあ！』と彼は叫んだ、『貴方も矢張り若くて早い連中のお一人ですね』（彼は恐らく此のあまり適切でもない言葉で以てネヅダーノフも自分同樣朝寢をしなかつたと云ふ事に贊成の意を表はすつもりであつたらしい）。『私達は皆八時になると食堂に集つてお茶を飲み十二時に中食をするのです。十時にはコーリヤに露西亞語で貴方の第一の敎課を授けてやつて下さい、それから二時には歷史を。明日は五月の九日であれの命名日ですからお休みにして戴きます。併し今日から始めて戴きませう』

ネヅダーノフは腰を屈めた。と、シブヤーギンは佛蘭西流に片手を唇と鼻の處へ二三度續けさまに持つて行き乍ら彼と別れた。そして杖を伊達に打揮り〳〵口笛を鳴らしながら、高位顯官の人らしい處は少しもなく心の善良なロシアの「田舍紳士」と云つた樣な態度で歩いて行つた。

ネヅダーノフは八時になるまで古木の蔭と新鮮な空氣と、小鳥の歌とを樂み乍ら庭に停つてゐた。銅鑼の音が彼を家へ呼んだ。食堂には一家の者が皆集つてゐた。ワレンチーナ・ミハーロウナの彼に對する態度は極めて愛相がよかつた。朝衣を着た彼女の姿が此上なく美しく彼の眼に映つた。マリアンナの顏は例の通り茫然した陰欝な表情をしてゐた。正十時に

最初の課目がワレンチーナ・ミハーロウナの面前で始められた。彼女は先づ自分も側にゐたものだらうか、どうだらうか、とネヴダーノフに訊ねた。そして終り迄慎重な態度を續けて居た。コーリャは聰明な子だといふ事が解つて來た。初めの課業には已むを得ないきまり惡さうなもぢ〳〵した樣子がなくなると、後は課業が滿足に遂行せられた。ワレンチーナ・ミハーロウナはネヴダーノフに對して明らかに滿足の體であつた。そして一度ならず機嫌をとる樣な態度で彼に話しかけた。彼は餘處々々しくした……と云つてもそれほどひどくは無かつた。ワレンチーナ・ミハーロウナは次の歷史の時にも出席した。彼女は此の課目に就てはコーリャ同樣自分も先生の必要があると笑ひ乍ら云つた。そして最初の時の樣に靜肅に且つ眞面目にしてゐた。ネヴダーノフは三時から五時迄自分の室に坐つてペテルブルクへの手紙を認めたが、別に氣持の良い事も惡い事もなかつた。彼は煩雜と壓迫とから遁れた。過勞した神經は次第に鎭まつて行つた。けれども其神經は食事の時、カルロミエーチエフは居なかつたにも拘らず又もや調子が狂つた。女主人の機嫌をとる樣な深切は相變らずであつたが、その深切そのものが寧ろ彼をいら〳〵させたのであつた。そればかりでなくマリアンナは相變らず眞面目でゐるのに彼の隣にゐる老孃のアンナ・ザハローウナは人目にも著くむつつりし

て相容れないと云ふ風があつたし、コーリャは又不遠慮が過ぎて彼を蹴つたりした。シプヤーギンも亦元氣のない樣子であつた。彼は自分の抄紙場の監督として高い給料を拂つて雇つてゐるドイツ人に對し一方ならぬ不平を抱いて居た。シプヤーギンは、自分は安信家ではないが幾分かスラブ族贔負だといふ事を斷言し乍ら無暗とドイツ人を罵倒し始めた。そして隣りの商人の工場を立派に整頓したと噂されて居るソローミン某といふ若いロシア人の名を擧げた。彼は此のソローミンと知己になり度いといふ熱心な希望を持つてゐた。夕暮近く、カルロミエーチエフがやつて來た。彼の領地はシプヤーギンの村のアルザーノーから僅か八哩の處にあつたのだ。其處へ又、一人の仲裁人がやつて來た。レルモントフの詩の有名な次の二行に適切にも叙せられた地主の一人である。

『耳までの襟飾、踵までの上衣、
髯と猫撫聲、そして、ぼんやりした曇つた眼、』

其處へ又、一人齒のない、氣落した顏の隣人が大にめかし込んでやつて來た。それから又學問上の術語を好んでふりまく田舍開業醫でひどく愚鈍なドクトルもやつて來た。彼は例へばクコルニクの作物には「原形質が多いといふ理由でプーシキンよりも寧ろクコルニクを取る」

と云ふやうな事を主張する男であつた。彼等は骨牌戯を始めるので座に着いた。ネヴダーノフは自分の室に引退つて夜半過ぎまで讀んだり書いたりした。

翌くる五月の九日はコーリアの守護神の日であつた。寺院までは四半里足らずの道程であるが、全家族の者は三臺の無蓋馬車に分乘し、背後の足臺には別當を立たせて、繰り出した。凡ての事が仰々しく華やかに執り行はれた。シプヤーギンは勳綬を着け、ワレンチーナ・ミハロウーナは白味の勝つたライラック色の惚々する樣なバリー風のガウンを着けてゐた。そして彼女は寺院に於ける勤行の間、深紅の天鵞絨で裝訂した小さな祈禱書の上に首を曲げて祈禱を唱へた。此の小さな祈禱書は二三の老人連を啞然たらしめた。その一人は堪えかねて隣の者に訊ねた。

『あれは巫女の魔法書かね。まあ、あの方の使つてゐるのは。それとも何だらう、えゝ？』

堂に漲つた花の薫は百姓共の新らしい上衣の硫黄の樣な强い匂やタアルを塗つた長靴や鞣皮の半靴の匂と打ち雜じつた。そしてその種々雜多な匂の上に香の煙の眼もくらむ樣な甘い香りが蒸し騰つた。助祭と齊唱者は、彼等に加つた或る工場の職工の助けを借りて驚かれる程な誠實さを以て歌つた。彼等は音部唱歌に於ける努力をさへしたのであつた！

其處に出席した凡ての者が驚きのやうな感じに撲たれた瞬間があつた。第二低音（それはクリーマといふ職工で急性肺結核の男の受持であつた）がたゝ獨り、隨伴部もつけず平坦な短い調子の半音階の列に破て行つた。是等の音譜はぞつとする程怖しいものであつた。けれども若それが切り離されたなら全合奏はどし〳〵斷片的なものになつて了つたであらう……が、兎に角、それもどうにか斯うにかやつて退けられた。極めて尊敬すべき風采をした盛裝の長老シブリアンは一冊の寫本に依つて大に啓發的な說敎を陳べた。この正直な長老はあるアツシリアの賢王の名を紹介する必要があると考へたが、不幸にもその發音は彼に非常な苦痛を感じさせた。そして彼はそれによつて自己の博識の程度を現はす事には成功したが、その努力の結果彼の體軀はほてつて汗さへ流れた。寺院には長くもゐなかつたのであるがネヴダーノフは隅つこの田舍女の中に姿を隱した。女達は一生懸命十字を切つたり、腰を低くしたり、愼み深く幼兒の鼻を拭いてやつたりしてゐて、彼には餘り目も呉れなかつた。けれども新らしい上衣を着、硝子玉の紐を額に處にぶら下げた百姓娘や、縫箔した肩章と赤い襠の附いた女襯衣を着て帶を結んだ少年などは、ぐるりと顏をふり向け乍ら此の新來の參詣者をしげしげと見詰めるのであつた。……ネヴダーノフも彼等を眺めた、そして色々な思ひが起つた。

長い〳〵時間を費した勤行の後――人も知る通り奇蹟行者聖ニコライの謝恩は正教會の凡ての勤行の中でも殆ど最も冗長な勤めである――シブャーギンに招待された僧侶は皆な邸宅へと赴いた。此の祭に固有な儀式が尙ほ若干――室内に聖水を撒くといふ事迄も執行された後で彼等は贅澤な中食の饗應を受けた。この中食の間は、かゝる時にはいつも定つてる事だが教化的な、併しどちらかと云へば氣骨の折れる樣な談話ばかりが續けられた。主人も主婦もその時間に中食など取る事は決してないのであるが、それでも少しは食べも飲みもした。シブャーギンは此の場名に適切な、しかも興味のある逸話を語りさへした。そして此れが、彼の赤い動綬や彼の威嚴の手前、愉快なものと云はゞ云ひ得る印象を人に與へた。

そして長老シブリアンをして感謝と驚異の念に打たれしめた。その返禮として、且つは自分も亦折にふれては一くさりの話ぐらゐは出來るといふ事を示すが爲めに嘗て僧正が司教管區を巡視して、町の修道院に地方の僧侶を皆招集した時に彼と僧正と交えた問答について物語つた。『彼の方は嚴格でした、私共に對して頗る嚴格でした』と長老シブリアンは稱へた。『最初彼の方は私共の教區や、設備に關して手詰めの訊問をなされ、次に試問をお始めなさいました……彼の方は私の方をお向きになりまして、「お前の寺院の獻堂式は何か」とお訊ね

になる。「わが救世主の變容祭」と斯う私は答へました。「してお前は其日の讃美歌を心得てゐるか」「勿論存じてゐるつもりで御座います！」「歌つてみろ。」そこで私は直ぐに始めました。「君は山の上にて御姿を變え給へりあゝキリスト、わが主……」「止め！變容とは何か、又吾々は何うしてそれを心得ねばならぬか」「つまり」私は申しました、「キリストはその榮光赫奕の中に姿を顯はして弟子達に示さうとされたのです。」「よろしい」と彼の方が被仰いました。「此の小さな肖像は私の記念の爲めに帶びるがいゝ」。私は足下に跪づきました。「有難う御座います、尊師！」……そんな風で彼の方は私をおろそかにはお扱ひにならなかつたのです。』

『私もあの尊師とは個人的に知遇を辱ふして居ます』とシブャーギンは莊重に陳べた。『最も値打のある牧師です！』

『最も値打のある、實際です！』とシブリアン長老は答へた。『管區の監督人等にあまり信賴を置き過ぎなさるといふ缺點があるにはありますが……』

ワレンチーナ・ミハーロウナは未來の女教師としてマリアンナの事を云ふつもりで農民學校を賞揚した。偉大な體格を持ち、梳られたオルロフ馬の尾に彷彿たる長い波を打つた髮の毛を生やした補祭は（その學校の管理は此の人に一任せられてゐた）それに贊同の意を表

さうとした。併し乍ら肺の力を頼まずに云つた彼の沈んだ調子は自分にも恐ろしく感じられたし、又人をも驚かした。やがて坊さんは退出した。

金ボタンの新らしい短いジャケツを着たコーリャがその日の主人公であつた。彼は贈物と祝賀とを受けた。彼の手は表階段と裏階段で職工や家僕や年老いた婦人や若い女やさては百姓等から接吻を受けた——百姓等は丁度昔の農奴時代の樣に、家の前に据えられた卓を取り巻いてバイや火酒の壜をとり上げながらガヤ〳〵云つてゐた。コーリャは見る間に當惑したり、嬉しがつたり、得意になつたり又羞んだりした。彼は兩親に抱きついて、室の外に馳け出して行つた。晩餐の時シプヤーギンはシャンペンを命じた。そして子息の健康を祝し飲む前に一場の演説を試みた。彼は「人の國に盡す事」の意味や、彼が彼のニコライ(彼はかう呼んだ)に對して望んで居る進路…それから當然盡すべき彼の任務に就て述べた。——先づ第一に彼の家庭に、次に彼の階級に、社會に、第三に人民に——然り諸君、人民に、而して第四に政府に！　次第に激して來てシプヤーギンはとう〳〵本當の雄辯の域に達した。彼はロバートビールの樣に片方の手をフロックコートの折目に突込んだ。彼は「科學」といふ言葉に誠意を込め、そしてラテンの感嘆詞 laborenus といふ語を以てその演説を結び、その語を直ぐに

ロシヤ語に飜譯した。コーリャは父に感謝する爲めに又一座の人々に接吻される爲めに盃を手にし乍ら卓の處まで進んで行つた。と又してもネヅダーノフとマリアンナの視線が合した…二人は恐らく同じ事を考へてゐたのであらう…併し乍ら二人とも何にも口を利かなかつた。

見る物凡てがネヅダーノフの心を打つのであつた。煩はしいとか又好ましからぬとかいふ心を起したのではなく、面白いとか、否それ以上興味あるといふ心さへ生ずるのであつた。それと同時に此の家の慇懃なる主婦、ワレンチーナ・ミハーロウナは、自ら一廉の役目を勤めつつあるといふ事を意識し、又同時に自分を了解し得る聰明鋭敏な一人あるを心秘かに喜んでゐる聰明な女としてネヅダーノフの腦裡に映つたのであつた…恐らくネヅダーノフは自分の虚榮心が自分に對する彼女の態度によつて如何に媚びられてゐるかといふ事を疑ひみる事をしなかつたのであらう。

翌くる日、課業は再び始まつた。そして日常の生活があり來りの樣子で進行した。

一週間が取留もなく流れ去つた…ネヅダーノフの經驗と省察とは何う云ふ風であつたかといふ事は彼がシーリンに送つた手紙の拔萃によれば最もよく解る。シーリンは彼と高等學

校時代の同窓で彼の此上ない親友であつた。彼は今ペテルブルグにはゐないで遠い田舍町の有福な親戚の家に厄介になつてゐた。彼は全然その親戚に取り縋つてゐて、其家を辭し去らうなどゝ云ふ事を夢想するさへ彼にとつては不利益であるやうな境遇にあつた。彼は弱くて臆病で、そして控え目な男ではあるが、稀に見る純潔な性情の男であつた。政治學などには興味を有たず、毒にも藥にもならぬ書籍を讀み、時間を消す爲めに横笛を弄んだりした。

そして若い婦人をば恐れてゐた。シーリンのネヴダーノフを愛するの情は熱烈であつた——彼は一體に愛するものに對しては熱烈な性であつた。ネヴダーノフは又ウラジミール・シーリンに對するほど腹藏なく自己を打明ける人は他になかつた。彼がシーリンに手紙を書く時には彼はいつも別個の世界に住んでゐる、ある懷かしい親密な者と、又は彼自身の良心と一致渾融してゐるやうに感じた。ネヴダーノフは再びシーリンと一處に同じ町に住まうなど想像する事さへ出來なかつた……。彼は多分彼に對してちきに冷淡になるに違ひなかつた。二人はそれ程共通な點を有つてゐなかつた。けれども彼は熱心に、又少しも腹藏なく細々と認めた。他の人に對しては——少くとも手紙の上では——彼は云はゞ見えを張つてゐた、矯飾してゐた。が、シーリンに對してのみは——斷じてかゝる事はなかつたのだ！　シーリン、ペ

ンを持つ事の拙ないシーリンは、短い不器用な文句で極く少しゝか應へをしなかつたが、ネヴダーノフの方でも長たらしい返事など望みもしなかつた。彼はそんな返事がなくとも、恰も道の埃が雨の滴りを吸ひ込む樣に、この友は自分の秘密は神聖なものとして、決して他に洩らす事はしないといふ事を知つてゐた。そして又彼は金輪際浮出すべくも思へぬ怖ろしい寂寞裡に葬られながら唯一すぢにその友人の生命の中に生きてゐるといふ事を知つてゐた。世界の中の何人に對してもネヴダーノフは彼との關係を明かさなかつた。それは彼に取つては頗る貴重なものであつたのだ。

『さて親愛なる友——我が純潔なるウラジミールよ』かう彼は書いた——彼は常に友の事を純潔なると呼ぶのであつた。そしてそれには當然の理由があつた——、『祝つてくれ給へ。僕は居心地のよい碇泊處に這入り込んだ、そして今は休息も採る事が出來る、精力を盛返す事も出來る。僕は金持の尊大家シブヤーギンの家に家庭教師として生活してゐるのだ。僕は其小さい小供に教えてゐる。食物も贅澤で（かゝの如き贅澤な食物は僕にとつては空前だ！）夜はぐつすりと眠る事が出來又ゆかしい田舍道を心ゆく迄散歩する事も出來る。そしてわけても重大な事は、ペテルブルグにある友人の心配から、しばしなりとも逃れ出でた事である。そし

て僕は最初最も猛烈な倦怠に襲はれたのであるが今はそれも幾らか薄らいで來た。早速僕は君の知るあの仕事に着手しなければならぬ（諺に曰く、自ら畫と稱せんには自ら笊の中に這入らざるべからず）そして彼等が僕を此處に送つた理由は正しくそれなのだ。けれども彼れは是れする間に僕は快よい動物的生活を送れる樣になり、身軀も肥えて來た。

且つ感興湧かば恐らく詩も書けるだらう。僕の目に映ずるまゝの田舍の印象は次便にて書き送る事にする。領地はよく整理されてゐるやうだ。農民はどうかといふと、或るものは寧ろ與し難く、そして雇はれた下男共は凡て頗る體裁のよい樣子をしてゐる。

が然しその凡てに就ては追て意見を述べる事にする。家族の人々は敎育があり且つ進步的である。シブヤーギンは常に非常な謙遜家である。然り——非常な謙遜家である。さうかと思ふと彼は忽然として能辯家と化し去るのだ——最も修養の高い人物！　夫人は玉の樣な美人である——狡猾な猫だと思はれる處もある。彼女は人を監督するに公平だ。そして、あゝ、その柔らかさは！——五體に一本の骨も無さゝうな！　僕は彼女を恐れてゐる。僕が婦人に對して如何なる態度に出づるかは君の知つてゐる處だ！　こゝに數人の隣人——嫌惡すべき人間——とそして僕を惱ます一人の老婦人がある…けれども僕は一人の少女に最も心を引かれてゐる——その少女が緣者であるか或は友達であるかは、誰れ知る人もない。僕は彼女に對して辛うじて二語より話さない、それにも拘らず僕は、彼女も僕自身と同じ粘土で出來た人間だといふ事を感ずるのだ…』

次にマリアンナの容貌と彼女の凡ての態度に關する叙述があつて、更に彼は續けた。

『彼女が不幸な人間で而も高慢で、自意識が强くて、打解け難い人間である事、そして就中不幸な人間である事、これらに就て僕は何等の疑も容れない。何故に彼女は不幸であるか、それは僕の知る限りでない。たゞ彼女の親切な人である事は僕に明らかである。彼女が果してお人好であるかは猶ほ疑問だ。實際、愚鈍にあらざるお人好の女といふものが世にゐるであらうか、且又あるべき必要があるだらうか。が、併し僕は一般の女に就て知る處は極めて少いのである。夫人は彼女を好いてゐない…そして彼女も夫人を嫌つてゐる。けれども、その何れが正しいかは僕の知る處でない。察するに、宜しくないのは寧ろ夫人の方であらう…夫人は彼女に對して極めて慇懃なるに反し、彼女が夫人に對して物を云ふ時には神經質に眉をぴく〳〵動かす處を見れば。さうだ、彼女は極めて神經質な人間である。その點に於ても亦彼女は僕と似てゐる。そして又彼女は、恐らくそつくり同じだといふのでは無からうが、僕

の樣に亂雜な人間である。

これ等凡てに就ては今少し明らかになつてから君に知らす事にする…

『只今も云つた樣に、彼女は滅多に僕と口を利く事がない。併し乍ら彼女が僕に話しかける（いつも突然に思ひ掛けもなく）數語の中には一種投げやりな卒直さがある…僕はそれを好むのだ。

『序手ながら、君の親戚は矢張り貧乏たらしい食物で君を養つてゐるのか。彼は終局の事を考へ初めてゐるのではないか。

『「歐羅巴の使」に書かれた、オーレンブルグ州に於ける最後の僭望者に關する論說を君は讀んだか。それは千八百三十四年の出來事だ、我が愛する少年よ！　僕はその新聞を氣にしない、それに論者は保守黨員である。が併し、それは興味ある事で、考へさせられる問題だ……。』

九

五月も既に半ばを過ぎた。夏の初めの暑い日がやつて來た。

一日、ネヅダーノフは歷史の課業を一へて庭園へ出た。そして一面をその庭園に接する樺の森の中へと入つて行つた。此の森の一部分は今から十五年前、材木商の手に伐り倒されたのであるが今はその跡も隈なくこんもりした樺の若木に蔽はれてゐる。樹々の幹は鼠色の菌輪で縞を描かれて、丁度柔かい鈍い銀色の圓柱の樣に隙間もなく立ち並んでゐる。一樣に輝いた綠色の細かい葉は、まるで水で洗はれた上へニスを被せられたやうだ。黝んで平つたく積み重なつた去年の落葉の下から草の芽がその小さい鋭い舌で突き上げて居る。細く狹い路が森の中を遍く縱橫に走つてゐる。

黃ろい嘴をした數羽の鶫がものに驚かされたやうに不意に一聲鳴いて路を橫切つて翔り行き、低く低く、地にすれ〳〵になり、果てはもの狂はしげに茂りの中へ飛び込んだ。半時間ばかり逍遙してから、ネヅダーノフはとう〳〵切株に腰を下した。その周圍には灰色をした古い削片が斧でもつて切り剝がされて落ちたまゝ小さい山をなしてゐる。幾度か冬になると雪はそれを蔽ひ被せ又春には解け去り、かくて誰あつてそれに手を附けたものはなかつた。

ネヅダーノフは若い茂つた樺の生垣に背中を當てながら影の濃い柔らかな木の下に坐つてゐた。彼は何事も思はなかつた。春の特殊な心持の中にすつかり沒入してゐた。その春の感じ

の中には常に若きも老いたるもひとしく感ずる苦痛の要素があつた……若いものには期待の定めない苦痛……老いたるものには後悔の定まつた苦痛……。

ふとネヅダーノフは足音の近づいて來るのを聞いた。

それは一人ではなかつた。半靴や長靴を穿いた百姓でもなく、又素足の百姓女でもない。

二人の人が足をそろへて徐々と歩いて來る樣子……女の衣裳の輕い衣擦れの音がした……。

と、忽ち洞ろな聲が響いて來た——男の聲だ。

『それであなたの最後の言葉は？　どうしても？』

『どうしても』と他の聲が繰り返した——女の聲だ——それはネヅダーノフには聞き覺えのあるやうに思はれた、そしてこの時遲く樺の若木を界した路の曲り角の處にマリアンナが現はれた。彼女はネヅダーノフが是迄一度も見た事もない陰氣な、黑目勝ちな男に引添はれて居た。

二人ともネヅダーノフを見て射竦められたやうに立ち止つた。と此方は又驚きのあまり腰かけて居る切株から起き上る事も出來なかつた……。マリアンナは髮の毛の根元まで赧くな

つた、が、すぐに蔑むやうに微笑した。誰に對しての微笑か——顏を赧くした爲めに自ら微笑したのか又はネヅダーノフに對してか……。連れの男はもぢや〳〵した眉毛を顰めた。不安な眼が黃ばんだ白眼がきらりと光つた。それから彼はマリアンナを眺めた。そして二人はネヅダーノフに背中を向け、先刻と同じやうな徐やかな足どりで無言のまゝ歩み去つた。ネヅダーノフは驚きの眼を見張りながら彼等を見送つた。

半時間ばかりしてから彼は家に歸つて自分の部室へと入つた。が、その時銅鑼が鳴つたので彼は客室へ行つた。彼は先刻茂りの中で出遇つたと同じ暗い顏の見知らぬ男が其處に居るのを見た。シプヤーギンはその男の處へネヅダーノフを導いて彼をワレンチーナ・ミハーロウナの beau-frere (兄弟) セルゲイ・ミハーローウィッチ・マルケーロフだと紹介した。

『仲の善い友人になつて下さい、兩君！』とシプヤーギンは嚴かに愛想よく、しかも彼れ特有のうつけた微笑を含みながら大きな聲で云つた。

マルケーロフは默つて頭を下げた。ネヅダーノフも同じやうに此れに應じた……とシプヤーギンは小さな頭を輕くふり上げ、肩をすくめてそして『自分は君等の爲めに自分の責任を果した……そして君等が實際友人にならうとなるまいと自分には一向重要な事件ではないの

だ！』と云はんばかりに歩み去つた。

その時ワレンチーナ・ミハーロウナはぢつとして立てゐる二人に歩み寄つて又もや彼等二人を紹介はした。そして彼女はその巧妙な眼に思ふさま漲らす事の出來るらしい彼女獨特のなつかしげな輝きを漲らせて自分の兄弟に話しかけた。

『どうしたの、cher Serge（れえ、セルゲイ）貴方はすつかり私達を忘れてしまひましたね。コーリヤの命名日にだつてゐらつしやらないんですもの。それとも、そんなに大した仕事でもあつて？この人は自分の百姓に對する新協定を持ち出さうとしてゐるのですよ』斯う云つて彼女はネヅダーノフに向つて『餘程獨創的なものなのです、全部の四分の三を彼等へやり四分の一丈けを自分に取るといふのです。それでもまだ取り方が多すぎると自分では思つてますの。』

『妹は冗談が好きで』とマルケーロフは彼女に代つてネヅダーノフに話しかけた。『が併し少くとも百人に屬するものゝ四分の一を一人の人間が取るのはそれは確かに多過ぎる、これには私は妹と同意するつもりです』

『それで、アレキセイ・ドミトリエキチ、貴方は私が冗談が好きだといふ事に氣がおつきになつて？』

とシブヤーギン夫人は眼にも聲にも矢張り懷かしげな柔かさを示しながら訊いた。

ネヅダーノフは答へに窮した。が、その瞬間カルロミエーチエフの來た事が知らされたので夫人は彼を迎へに行つた。やがて食事方が出て來て單調な聲で食卓の準備が出來た事を知らせた。食事の時ネヅダーノフはマリアンナとマルケーロフとに目を附けないわけには行かなかつた。二人は相並んで坐つて居て、二人とも眼を下に向け唇をひき結び、きつい陰氣な殆ど怒つたやうな顏容をしてゐた。ネヅダーノフは又一體マルケーロフがどうしてシブヤーギン夫人の兄弟なのかと頻りに訝つてゐた。それほど二人の間に似通つた點を見出す事が出來なかつた。たゞ一つ恐らく――二人とも顏の色の淺黑いところが一致して居たらしい。併しワレンチーナ・ミハーロウナにはその顏や腕や、それから兩肩の一樣な色が彼女の魅惑の一つを成してゐた……然るに兄の方は雅びやかな人々からは「青銅色をした」と形容せられ、又ロシア人の眼からはどうしても柔皮のゲートルに似たと思はれるほどの黝ずんだ顏色をしてゐた。マルケーロフは縮れた髪の毛と、どちらかと云へば鉤なりになつた鼻と厚い唇と凹んだ頰と狹い胸とそして筋ばつた手とを持つてゐた。彼は一體が筋ばつて、ひからびてゐた。そして話をする時にしやがれた、きれ〳〵な金屬性の聲を出した。その眼はとろんとして居

り、顔は氣六ケ敷げでいかにも胃病に罹つて居る人と云ふ風だつた。彼はあまり食べもせずパンをちぎつては小さい彈丸を造るに忙がしく、たゞ時折町から歸つて來たばかりのカルロミエーチエフの顔をちら〳〵見るばかりであつた。カルロミエーチエフは町でどちらかと云ふと不快なある要事で總督に會つたので此の事に關しては故意と何事も語らなかつた。が併し他の事では遠慮なく長廣舌を揮つた。

彼が餘りに饒舌に過ぎると、シブヤーギンは例の通り彼を窘めるのであつた。シブヤーギンは「qu'il est un affreux réactionaire（彼は恐るべき反逆黨である）とは思つたけれども彼の珍談、奇談を聞いて非常に笑つた。カルロミエーチエフは百姓等が――然り、然り！純朴な農夫！――法律家に與へる Loiars ! loiars ! と云ふ稱呼を聞いて腹のどん底から愉快になつたといふ事を皆の前で揚言した。Ce peuple russe est delicieux（ロシア人は愉快な人間だ）と彼は夢中になつて繰り返した。

それから彼は彼が嘗て農學校を參觀して生徒に「鴨嘴とは何か」といふ問題を提出した時の話をした。そして生徒は勿論教師さへもそれに答へる事が出來なかつたので、彼カルロミエーチエフは別にヘムニチエフの「他の獸類を傚ねる愚なウエンダル」といふ詩句を引用して「ウエンダルとは何か」といふ問題を出して見た。が併しこの問題に對しても誰れあつて答へる

ものが無かつた。貴方の農民學校と云ふのは是れ位のものだ！

『併し待つて下さい』とワレンチーナ・ミハーロウナが口を入れた、『私だつてそんな動物なんか知りませんわ』

『奥さん！』カルロミエーチエフが叫んだ。

『貴女がそれを知つておいでになる必要はちつともありませんよ』

『それではどうして百姓は知つてゐなくちやなりませんの』

『だつて、彼等がブルードホンとか――或はアダム・スミスでもさうですがそんな名前を知つてゐるよりかも鴨嘴とかウエンダルとかを知つてゐる方がまだましですからね』

併し此の點でも亦シブヤーギンは彼を窘めた。『アダム・スミスは人間思想の導燈の一つである。萬人が彼の主義を……（彼は自分で Chateau d'Yquem を一杯注いだ……）彼等の生母の（彼は杯を鼻の處へ持つていつて酒の香を嗅いだ）乳と一處に吸收するやうだと善いのだが……』彼は杯を乾した。カルロミエーチエフも亦飲んだ、そしてその酒を讃めた。

マルケーロフは此のペテルブルグの侍從官の熱心には何等特別な注意も拂はなかつたが二度ばかり穿鑿する樣にネヅダーノフを打見やつた。そして手早くパンの彈丸を調製し、それ

をその口まめな客の鼻をめがけて眞直に投げつけんばかりにした……。

シプヤーギンは義兄を打遣つて置いた。ワレンチーナ・ミハーロウナも亦彼には話もし向けなかつた。此の夫婦はマルケーロフをば譯の分らぬ構はないで置いた方が好い人間として遇する風があつた。

食事の後、マルケーロフは煙草を喫ひに玉突場へ去り、ネヅダーノフは自分の室へと退いた彼は廊下の處でマリアンナに出遭つた。

彼は殆ど彼女を通り越さうとした……が彼女は無造作な身振りをして彼を呼びとめた。

『ネヅダーノフさん』と彼女はよく落付かない聲で呼んだ。『あなたが私を何うお思ひにならうと私は一向平氣な筈ですが、それにしても私は……私は……（彼女は言葉に窮した……）私は今日植込みの處でマルケーロフと二人の處を貴方に見付かつた時の事をお話して置くのが至當だと念ひますが……仰有つて下さい屹度貴方は何故私共があの時あんなに狼狽いたのかいかにも約束でもしてあつた樣に、何で私共が彼處に集つたのかと怪しんでゐらつしやるでせうね？』

『そりや慥かに、少しは奇怪なことだと云ふ感に打たれましたね』とネヅダーノフは言つ

た。

『マルケーロフさんが』マリアンナは口を入れた、『私に一つ申込みなすつた事があります、そして私はそれを拒みました。私の申上げ度いのは只それ丈け。では――お寢みなさい。私の事をどうお思ひにならうと御勝手ですわ』

彼女は早速踵を返して廊下を足早に歩いて行つた。

ネヅダーノフは自分の部屋に這入り、窓際に坐つて考へ込んだ。『何と云ふ妙な娘だ！そしてあの亂暴な氣紛ぐれは？　あの突然な勇氣は？　何ういふ積りか――新らしがらうとしたのか、それとも唯だ氣取つて見たのか、自重からなのか。恐らく自重からならだらう。彼女はちつぽけな嫌疑さへ忍ぶ事が出來ないのだ……彼女は人は自分を誤解するものだといふ考へに耐える事が出來ないのだ、不思議な娘だ』

かうネヅダーノフは思ひ耽つた。が、下のテレースでは又彼の事で話が交されてゐた。彼はそれを殘らず明晰と聞いた。

『私は直覺で分りましたよ』とカルロミエーチエフが斷言してゐる。『あれは過激共和論者なのです。私がモスクワ總督の下にラヂスラスと共に特別任務を勤めてゐた間に私はそんな連

中――過激論者とか――又は非國敎徒とかを嗅ぎ分ける力が鋭くなりましたよ。私は時折奇體に鋭敏な鼻を有つ事がありますよ』これに就いて、カルロミエーチエフは彼が嘗てモスクワの近傍で一人の年寄つた非國敎徒を縛した時の有樣を物語つた。彼は警官と一處に偶然その男にぶつかつたのである、そしてその男は將に百姓家の窓から飛び出やうとする處であつたのだ……『そして彼はその瞬間まで其處に一生懸命靜かにして坐つてゐたのです、あの横着者！』

カルロミエーチエフはその老人が獄に投ぜられてからは一切の食物を拒絶し、そして自ら餓死したといふ事を言ひ足すのを忘れた。

『そこで此方の新らしい家庭敎師は』とこの熱心な侍從官は續けた。『過激論者です、それには一點の疑もありませんよ！　貴方はまだ彼が自分の方から頭を下げる事は斷じて無いといふ事にお氣がつきませんか』

『だつて、どうして彼の人が先きに頭を下げなくちやなりませんの？』とシブヤーギン夫人が言つた。『あべこべに――私は彼の人のさういふ處が好きなんです。』

『私は彼が雇はれてゐる家のお客樣です』カルロミエーチエフが呼はつた――『さうだ、さ

うだ、月給取の樣に金で雇はれた……だからして私は彼の上手なんです、そして彼の方から先さにお辭儀すべき筈です。』

『君は非常にいつこくだよ、カルロミエーチエフ』とシブヤーギンが云つた。彼はその名のみの處に特別に力を入れたのである。『それは全然、失禮ながら寧ろ時勢遲れといふものです。私は彼の勤務、彼の仕事を買收した、併し彼は依然として自由の人だ』

『彼の男は檢束を感じて居ない』カルロミエーチエフは續けた。『檢束、抑制！　一體過激論者といふものは皆さうなのだ。私は彼等に對しては奇妙に敏感な鼻を持つてゐるんですよ！ラヂスラスは恐らく此の點に於ては私と匹敵されるのです。若しも彼れが即ちあの家庭敎師が私の手に這入つたら少しは彼を矯め直してやらう！　矯められないで如何する！　彼は大に調子を變へるのだ、そして私に對しても帽子に手をかける樣になるのだ……つまり彼に遭ふのが愉快になるのです！』

『愚にもつかん事を云ふない、小癪な阿呆者め！』ネヅダーノフは上から殆ど斯う叫ぶ處であつた……併し乍らその瞬間ネヅダーノフの驚いた事には突然部屋の戸が開かれてマルケーロフが這入つて來たのであつた。

十

ネヅダーノフは彼を迎ふべく座を立つた。と、マルケーロフはつか〳〵と彼の側に歩み寄つた。そしてお辭儀もせず莞爾ともせず、彼に訊ねた。『君があのペテルブルグの大學生、アレクセイ・ドミトリエブ・ネヅダーノフ、でしたか』

『さうです……まさしく』とネヅダーノフは答へた。

マルケーロフは封を開いた一通の手紙を横腹のポケットから引き出した。『それからこれを讀んでみてくれ給へ。ワシリー・ニコラエヰッチからです』と彼は意味ありげに聲を落して附け加へた。

ネヅダーノフは手紙を擴げて讀んだ。それは何處となく官臭を帶びた廻章のやうなものであつた。それには持參者セルゲイ・マルケーロフを十分信頼するに足る『吾徒』の一人として推擧してあつた。そしてそれにつゞいて共謀行動の緊急な必要、及びある二三の原理の布敎法に關する勸告がしてあつた。廻章は特にネヅダーノフに宛てたものだ、同時に彼を信頼するに足る人間としてゝあつた。

ネヅダーノフはマルケーロフに手を差し出した。そして椅子を勸めて自分も座についた。

マルケーロフは一言も言はずに先づシガーに火をつけ初めた。ネヅダーノフもそれに倣つた。

『君はもう此處の農民共と知己になる機會があつたかね』とマルケーロフは遂々訊ねた。

『いや、僕には未だそんな間がなかつたのです』

『それでは、君が此處へ來てから久しくも立たないね』

『もうやがて來てから一週間になります』

『大變忙しいかね』

『大した事もありません』

マルケーロフは顏を顰めて咳き込んだ。

『フム！　まあ此處の農民どもはどちらかと云へば慘めな方だね』と彼は再び云ひ出した。

『愚昧な方だ。彼等には敎育が缺けて居る。そして非常に貧乏だ。併しその貧乏の由つて來る原因を說明してやる人間が一人もゐない』

『貴方の義弟さんの農奴となつて居る連中は僕の判斷し得る限りでは貧乏ではないやうです

ね』とネヅダーノフが言つた。

『僕の義弟は山師だ。彼は民衆の目を眩ます法を心得てゐる。この邊の農民は役にたゝない それは慥かだ。併し彼は工場を有つてゐる。努力しなくちやならぬ處だ。一寸其處に鋤を突込みさへすればいゝのだ。さうすると蟻の塊は直ぐに動搖するのだ。君は何か本を持つて來てゐるかね。』

『えゝ……併し澤山はありません』

『少し貸して上げやう。併しどうして持たないのかね?』

ネヅダーノフは答へなかつた。マルケーロフも亦默つてゐた。そして唯鼻の穴から煙草の烟を吹き出すばかりであつた。

『だが、何て畜生だ、あのカルロミエーチエフといふ奴は!』

彼は突然言ひ出した。『僕は食事の時起ち上つて、あの偉がりの處へ詰め寄つて、他の奴等の見せしめの爲めに彼奴のシャツ面を粉微塵になるまで打敲いてやらうと思つたんだ。併し否奴等のやうな公達を片づけるよりは目下のところもつと重大な事があるんだ。今は馬鹿者が痴けた事をいふたからつて堪忍袋の緒を切る時ぢやない、奴等の痴けた事をするのを防ぐべ

き時なのだ』

ネヅダーノフはいかにもと云つた樣に點頭いた。とマルケーロフは又もや卷煙草の烟を吹いた。

『こゝに、あらゆる下僕の中に一人譯の分つた人間がゐる』彼は再び始めた。『君の從僕のイワンではない……彼は鈍馬な魚だ、他の者だ……その名前はキーリルといふのだ、側棚の用をしてゐる』――(此のキーリルには酒を飲めば悲しくなる癖があつた)――『彼を注目して み給へ。酒喰ひの獸慾漢だ……が併し吾々は奴に對してむかつ腹にはなれない。それはさうと僕の妹に就ての君の意見はどうだね』

と彼は首を擡げて黃ばんだ眼でネヅダーノフを打目戍り乍ら唐突に言ひ出した。『彼女だつて僕の弟に劣らぬ山師なんだ。彼女の事を君は何う思ふかね』

『彼の方は頗る愉快な愛嬌のある夫人だと思ひます……それに非常に美しい!』

『フム! 何といふデリケートな適切さを以て君等ペテルブルグの紳士達は自分の所存を逃べるんだらう……僕はそれには感嘆する外はない! 時に……あの事だが……』と彼は言ひ出したが急に眉を顰めて顏を曇らせた。それでその文句を皆まで言ひ終らなかつた。

『さうだ、僕等は充分に熟議を凝らさなくてはならない。』彼は尙續けた。『それを此處でする事は出來ない。どんな惡い奴が居るか知れない。彼等は屹度戸の處で立聽してゐるに違ひない。僕のほのめかさうといふ事が君には解つてゐるかね。今日は土曜日だ。明日は多分僕の甥に何も敎へる事は要らないだらうね？』

『明日は三時から一週間分の下稽古をしなくちやならないのです』

『下稽古！　君は舞臺にでも登るやうだね！さういふやり口を發明するのは僕の妹に違ひない。なに、同じ事だ。これから直ぐに僕の宅に來ちや如何だ。此處からたつた八哩の處だ。善い馬を有つてゐる。風の樣に飛ぶのだ――今夜泊つて、朝中居給へ――すると明日三時迄には僕が送つて來てあげやう。いゝだらう？』

『是非』ネヅダーノフは言つた。マルケーロフが這入つて來てからは彼はずつと興奮と當惑の狀態で過した。突然親しくされたので彼は面喰つたのである。それと同時に、その方へ引寄せられる樣に感じたのである。彼は自分の前にいかにも氣の重さうな而も紛れもなく正直で强い一人のあるのを感じ且つ認めた。それから植込の處に於ける不思議な邂逅、マリアンナの思ひもかけぬ辯解をも感じ且つ認めた。

『うむ、さうなくちやならん！』とマルケーロフが叫んだ。『君は今の間に仕度し給へ。僕は行つて馬車を命じて置くから。君は何も此家の主人に訊ねる必要はないだらうね？』

『僕は宅の人に斷つて置きませう。獨りで外出してはならなかつた筈ですから』

『僕が云つてやるよ。心配し給ふな。彼等は今骨牌戯で顏を顰めてる最中だらう。君の不在などに氣付はしないよ。義弟は政界の人物だらうと心掛けてはゐるが、併し上手に骨牌戯を弄ぶといふ事が彼が自分に裏書きせねばならぬ凡てなんだ。が要するに人はさういふ風にして自分の運命を作るのだ！……ぢや君は仕度し給へ。僕は直ぐに準備しやう。』

マルケーロフは去つた。一時間の後にはネヅダーノフは駄々つ廣い、ゆつくりした、頗る古いけれども、而も極めて乘心地のよい馬車の中に大きな柔皮のクッションの上に、彼と並んで坐つてゐた。づんぐりした小柄な馭者は箱臺に腰かけて驚くべく美しい鳥の音色でひつきりなしに口笛を吹いて居た。編んだ黑い鬚と尾とを持つた三頭の斑馬は平坦な路の上を矢のやうに驅けた。いつの間にか夜の最初の帷に包まれた（彼等が出立する時丁度十時を報じた）樹や籔や田圃や平野や峽谷やが進みつ退きつして滑かに辷つて行つた。

マルケーロフの僅かばかりの所有地は（その面積は凡そ四百五十エーカーで七百ルーブル

の所得しかなかつた――土地の名はボルヅョンコヲーと云ふのであつた。)主市から二哩の處で、シブヤーギンの所有地はそれから六哩あつた。ボルヅョンコヲーに達するには町を通り抜ねばならなかつた。彼等二人がまだ五十位の言葉しか交はさぬ間にもう郊外に於ける慘めな小つぽけな職人等の小舍がちらり〳〵と眼に入つた。家根は崩れかゝり、歪んだ窓からはぼんやりした光が點々と見えてゐる。と、やがて彼等は轍に咬まれる町の鋪石の音を聞いた馬車は右に左に搖れた。そしてがたつく毎にぐらり〳〵となり乍ら彼等はファセードのある二階建の不景氣な石造の商家や、圓柱の立並んだ寺院や、居酒屋などを見て過ぎた。……それは土曜日の夜であつた。街には人一人通らないが居酒屋にはまだ客の群があつた。嗄れた聲や醉つぱらひの歌や手風琴の泣くやうな調子が其處から洩れて來た。

ふと開いた入口からむつとするやうな生溫かい毒々しいアルコールの臭と燈火の赤い閃光とが流れた。殆ど凡ての居酒屋の前には農夫の小さい荷馬車が置いてあつた。毛のむしやくしやした太皷腹の小馬が、それにつけられた儘、蓬々した頭をおとなしく低頭れ乍ら眠つてゐもゐる樣に立つてゐた。大きな冬帽を被り、襤褸を着た、帶なしの百姓が居酒屋から出て來て、胸を梶棒に押しあて、ぢつと立ち留つて、やがて物を求めるやうに兩手を力なげに盲索し

に動かしてゐる。かと思ふとぺちやんこになつた帽子を被り木綿の襯衣の胸をはだけた、痩せ衰へた職工がよろ〳〵と素足で――長靴は居酒屋にとり殘して――二足三足歩いて來て、ハタト立ち止り、背中を引つ掻きむしつて唐突に一聲呻いて亦もや內へ這入り込むのであつた。

『ロシア人は酒の奴隷だ！』マルケーロフは悲しさうに言つた。

『さう迄貶しちや可哀想でございまさあ、セルゲイ・ミハローキッチ！』と馭者は振り向きもせずに言つた。居酒屋の前を通る毎に彼は口笛を吹くのを止めては深い思ひに沈むやうであつた。

『遣れ！　遣れ！』とマルケーロフは彼の上衣の襟を亂暴に引張りながら應じた。馬車は蔓蓙やキャベツの惡臭を放つてゐる廣い市場を横ぎり、色章をつけた哨舍を門に控へた總督の家や小塔のある私邸や此頃植ゑられた樹がいつの間にかもう枯れかゝつてゐる遊歩場や、さては犬の鳴聲や鎖のがちやん〳〵いふ音の入り亂れた市などを通り過て次第に町端へと近づき、涼しい夜の間にと出發した荷車の長い〳〵行列に追ひつき、やがて又廣漠たる田園の新鮮な空氣の唯中に馳り出た。そして柳を植ゑた街道を愈々滑らかに愈々速かに驅り出した。

マルケーロフは――少しばかり此の人に就て云つて置く必要がある――彼の妹シブヤーギン夫人より六つ年上であつた。彼は砲兵學校に學んだ。そして旗手となつて其處を出た。併し乍ら中尉に昇進すると直ぐ彼は司令官――獨逸人――との行違ひから退職せねばならなかつた。その時以來彼は獨逸人を憎んだ。特にロシアの獨逸人を憎んだ。彼は退職した爲めに彼の親父との仲が拗めた。彼は親父の臨終迄殆ど會つた事もなかつた。彼は少し許の遺産を受繼ぎそして其處に住居を構へたのであるが、ペテルブルグでは彼は種々な知識ある進歩した人達と屢々往來した。彼は實際さういふ人達を崇拜して居たのである。そして彼等はすつかり彼の考へを拵らへ上げて呉れた。マルケーロフは餘り讀書をしなかつた。就中彼の讀んだのは主義に關する重要な書物丈けであつた。わけてもヘルツェンの物はよく讀んだ。彼は軍隊の習慣を保ちスパルタ人や修道士の樣な生活をしてゐた。數年前彼はある若い女と熱烈な戀に陷つた事がある。けれどもその娘は無禮極まる仕打で彼に寢返りを打つた。そしてある傳令使と結婚してしまつた――それも獨逸人であつた。マルケーロフは更に傳令使といふものを憎む樣になつた。彼は常にロシヤの砲兵の缺陷に就いて論文を書き度いと思つてゐた。が併し彼には文筆の才が少しもなかつた。文章といふものは唯だの一篇も作つた事がな

かつた。それでも彼は蚯蚓の這ひ廻つた樣な不明瞭な幼ない手で以て灰色の紙の非常な頁を埋めやうと續けてゐた。彼は絶望に對しては不屈不撓な人間で自己の不幸及びあらゆる壓迫された者の不幸をば永久に怨み、是を容赦する事も等閑に附する事も出來なかつた。そしていかなる事にもぶつかつて行く覺悟をしてゐた。彼の限りある知識は唯だ一點に集注した。彼の了解しないものは彼に取つては存在せぬものであつた。而も彼は欺瞞と虚僞とを蔑視し且つ憎んだ。上流社會の人民、彼の所謂「rogos」に對する彼の態度は無愛想で且つ粗暴でさへあつた。彼は貧民に對しては率直で農民に對しては兄弟のやうに親切であつた。彼はその所有地を立派に管理してゐた。彼の頭には社會主義的方案が渦いて居た。然しそれも矢張り砲兵の缺點に關する論文と同樣、完成するに至らなかつた。大概彼は――いかなる時にも又いかなる事にも――成功しなかつた。聯隊では「不成功」といふ綽名を貰つてゐた。誠實で公明で熱烈な不幸な性質を有する彼はいつ何時でも惡魔と呼んでもいゝやうな無情殘忍な態度になる事が出來た。そして狐疑する事なく又反省する事なくして彼は自分自らを犧牲にする事が出來た。

馬車は町から第二の哩石の處で突如として白楊の木下闇の中に駈け入つた。夜目には見え

ぬが木の葉がさら〳〵と鳴つてゐた。新鮮な鋭い森の香が漂つてゐた。上にはぼんやりした光の斑點があり下にはいり亂れた影が落ちてゐた。赤銅の楯のやうな赤い大きな月は既に地平線上に昇つた。矢の如く樹蔭を出た馬車は小さな邸宅を前にしてゐた。三個の明るい窓は月の平圓面を隱して居る傾斜の低い家の前面に輝く角硝子のやうに浮き出て見えた。門は背て閉された事もないやうに一杯に開け廣がつてゐた。薄暗い庭の中に二頭の白い備馬をつけた背の高い一臺の運搬車が見られた。二疋のこれも眞白な狗兒が何處からか走り出て突き透る樣な、併しさう猛からぬ聲で吠え出した。人々は家の邊りに動いて居た。馬車は階段へ引きつけられた。多少の困難を感じ乍ら馬車を出て村の鍛冶屋が例によつて不便極まる位置に据えつけた鐵の馬車臺に片足を觸れ乍らマルケーロフはネヴダーノフに言つて『いよ〳〵家に着いた。君は此家で、ようく知つてはゐるが併し思ひ掛けもない客に會ふだらう。さあどうぞ這入りたまへ。』

十一

その客といふのは彼のオストロデユーモフとマシューリナだといふ事が解つた。彼等は二

人ともマルケーロフの家の頗る見窄らしい客間でビールを飲んだり石腦油燈の火から煙草を喫んだりしてゐた。彼等はネヴダーノフのやつて來たのに驚きもしなかつた。彼等はマルケーロフが彼を連れて來る積りで居た事を豫め知つて居たからである。併しネヴダーノフは彼等を見て大に驚いた。彼が這入るとオストロデユーモフは『何うだね兄弟？』と言つた。が唯それ丈けであつた。マシューリナは最初はすつかり赧くなつてしまつたがやがて手を差出した。マルケーロフはオストロデユーモフとマシューリナとは近々實際的の形を取る筈になつてゐるかの「主義の爲め」に遣はされたのだといふ事をネヴダーノフに說明した。それから彼等は一週間前ペテルブルグから來たといふ事、オストロデユーモフはマシューリナが或る人に會見する爲めにK・・・へ行つてゐる間、遊說の目的でS・・・州に滯在して居たといふ事も說明した。

マルケーロフは誰も言逆ひもしないのに、突然に熱し出した。彼は口髯を咬んだ。眼に火花を散らしながら、嗄れた、いきり立つた併し乍ら明瞭した聲で、既に行はれた恐ろしい不正な行爲と、即刻の行動を要する事とについて辯じ出した。現に一切の事が準備されてゐて臆病者でなければ猶豫する事が出來ないといふ事、膿腫を破るのは如何に容易な事であらうと

それに對してはランセッタの必要があると同樣多少の暴擧は肝心であるといふ事を主張した彼は此のランセッタの比喩を數回繰返した。それは明かに彼を喜ばしたのだ。それは彼が發明したのではなくてある本から得たのである。マリアンナと感情の交換をするといふ望は凡て失くしたので彼は今は何等失ふべきものも有たぬと感じたらしかつた。そして唯如何にせば「主義の爲め」の仕事に最も早く着手すべきかと云ふ事ばかりを考へたらしかつた。彼の言葉は鋭く、率直に、そして執念深く徹頭徹尾眞向から斧のやうに落ちて來た。單調で重苦しい彼の言葉は一語は一語とその靑褪めた唇から落ちた。それは獰猛な老番犬の鋭く峭しい吠聲を思はせた。彼は附近の農民や工場の職工などをよく知つてゐると言つた、又その中にはいつ何時如何なる事にも馳せ參ずべき有爲な人間——例へばゴローフリョオクのエレメーの如きがゐると言つた。ゴローフリョオク村のエレメーの名は絕えず彼の口に上つた。十言目毎に彼は右の手で、手掌でゞはなく手の端で卓を敲いた。その間彼の左手は母指丈けを他の指と離し乍ら空を衝いてゐた。そしてその毛むくじやらな、筋ばつた兩手と其指と、物憂げな聲と、そして燃えるが如き兩眼とは力强い印象を與へた。途中ではマルケーロフはネヴダーノフと餘り話さなかつた。彼の忿怒がだん〳〵と募りつゝあつたのだ……が今はそれが破裂

したのだ……マシューリナとオストロデューモフとは時々微笑したり、ちらり〳〵と眺めやつてみたり、時には簡單な感動詞を挿んだりして彼を喝采するのであつた。が併しネヴダーノフの胸には何となく奇異な念が起つてゐた。最初彼は應答しやうと試みた。彼は急いだり早まつたり、考が足りなかつたりした行爲によつて生ずる損害に言及んだ。就中彼は何等の疑も挿まれず、地位の都合を吟味する必要も悟られず、又民衆が正しく要求する處のものを發見する事さへ試みられずに凡てが決斷されてしまつて居る事を見て驚いたのである……併し次第に彼の神經は昂ぶり出し、まるで竪琴のやうに震へ出した。と彼は一種の自暴自棄の狀態となつて眼には殆ど忿怒の涙さへ湛へながら喚くやうな聲でマルケーロフと同じ精神を以て語り出した。話はあらぬところへまでも突走つた。どんな衝動が彼の心內に作用してゐたのかわからぬ。或は近頃の自分の生溫かつた事に對する悔恨であつたか。或は自分自らに對し、又他人に對して業を煮やしたのか。或は胸に咬み入る何かの蟲を壓しつぶさうと苦心してゐたのか。それとも實のところ再會した仲間の前で氣取らうとしたのか。……さては又マルケーロフの言葉が實際に彼を動かし——彼の血を湧かさせたのか。兎に角明け方になるまで話は盡きなかつたのである。オストロデューモフとマシューリナとは自分の座から動か

なかつた。マルケーロフとネヅダーノフとは腰を落ちつけなかつた。マルケーロフはどう見ても哨兵か何ぞの樣に同じ場所に突立つてゐた。又ネヅダーノフは或は緩く或は急に、不同な足どりで部屋の中を彼方此方と歩きつゞけて居た。彼等は講ずべき手段と方法とについて又各自の引受くべき役目に就て語り合つた。彼等は種々な小冊子や散らしを檢べたり、束ねたりして居た。非國敎主義者で大に信賴するに足る人物ではあるが無敎育な商人ゴリューシキンのことや、頗る有爲な併し性急で而も自分の才能を買被つてゐると云はれる若い傳導者キスリヤーコフのことなどが語られた。それから亦ソロームンの名も彼等の口に上つた……

『製綿所を支配してる男かね』とネヅダーノフはシブヤーギン家の食卓で語られた彼の話を思ひ出して訊ねた。

『さうだ、その男なのだ』とマルケーロフが答へた。『君は彼の男を知るやうにしなくちやならない。吾々は未だ彼を十分に試してはゐない、が併し彼は有爲な、大に有爲な男だ。』

ゴローブリヨオクのエレメーが再び話題に上つた。それに附け加へてシブヤーギン家の人人、キーリル、メンデレー某及サルカーと綽名された男などが話しに出た。たゞそのサルカーを信賴することはむづかしかつた——彼は正氣の時には獅子のやうに剛膽であるが醉へば

臆病者になつてしまふのであつた。而も彼は殆どいつも醉つて居るのであつた。

『では君の家の者の中には』とネヅダーノフはマルケーロフに訊ねた。『君が信賴してもいゝやうなのが誰かゐるかね。』

マルケーロフは若干はゐると答へた。併し彼はその名前をば一つも擧げなかつた。その代り、體力が非常に强健である處から一層役に立つべき、そして一旦拳を揮つて鬪ふといふ場合には一ぱしの事を働くべき町の職工や僧侶學校の徒弟に關して論じ初めた。ネヅダーノフは貴族黨について問ひたゞした。マルケーロフは五六人の若い貴族がゐると答へた。

その一人は慥かに獨逸人で、就中一番の過激派であつた。が併しもとより獨逸人を信賴する事は出來なかつた……彼は何時なんどき拗ねて、裏切るかも知れない。けれども其處で彼等はキスリヤーコフが彼等に送るべき報告を聞いて見なければならなかつた。ネヅダーノフは又軍隊についても質問した。マルケーロフもこれには躊躇した。長い頰髯を引張つて見たそしてとう〳〵是れ迄確かなものは何もないと云ふ事を說明した……恐らくキスリヤーコフは何物か曝露しやうとする處があつたのだらう。

『だが其のキスリヤーコフといふのは一體何者だね』とネヅダーノフはもどかしげに訊ねた。

マルケーロフは意味ありげに微笑した。そして彼は或る一人の男で……斯様な男であると云つた。

『だが僕は彼の男の事はあまり知らないのだ。』

と彼は附け加へた。『僕は前後たつた二度しか會つた事がないから――が併しその男の手紙は！――斯ういふ手紙だ!! それを君に見せやう……君は驚くだらう。この通りの熱火だ！それに其の男の活動力と來たら！ 彼の男は五度も六度もロシアを疾けぬけ疾け戻りしたそして至る處から十頁――十二頁の手紙だ！』

ネヅダーノフは穿鑿するやうにオストロデューモフを眺めた。けれども彼は眉毛一本びくつかせないで彫像のやうに坐つてゐた。その間マシューリナの唇は苦々しい微笑を押し潰してゐたが、彼女も亦魚の樣に沈默してゐた。ネヅダーノフはマルケーロフが自分の領地に對して社會主義的管理を採らうといふその改革案について訊ねやうとした……が併し此に就てはオストロデューモフがさへぎつた。

『今それを論じて何になるのか』と彼は言つた。『どうでもいゝ事だ、萬事の改變は後の事だ。』

話題は再び政治の事に戻つた。ネヅダーノフはまだ心内に咬み入つてゐる人知れぬ虫に貪

り食はれてゐた。併し内心の苦痛が烈しければ烈しい程彼は益々聲高くはき〳〵と談ずるのであつた。彼はビールをたつた一杯しか飲まなかつたのだが、時々彼は自分の醉拂つてしまつた事に驚いた。彼の頭の中は渦を卷いてゐた。彼の心臟は苦しく動悸を打つてゐた。朝の四時といふにとう〳〵議論は止んだ。

そして控室に眠つてゐる若い給仕を踏み越えながら彼等は各自の室に退いた。ネヅダーノフは横になる前に永い間身動ぎもせずに眼は、自分の前の床の上を見つめ乍ら突立つて居た彼はマルケーロフの口走つた言葉の凡てに漲つた綿々として腸を斷つやうな凄慘な調子をぢつと考へた。此の男の誇は傷けられざるを得なかつた。彼は無理にも苦悶するやうに强られてゐたのだ。彼の個人的幸福の望みは粉碎されてゐたのだ。而も猶、彼は自分を忘れてゐる――彼が眞理の爲めに把握した處のものに全然自己を抛つてゐるのだ！『窮屈な性質だ』とネヅダーノフは思つた……『併しながら斯樣な窮屈な性質は此樣な……例へば自分が持つてゐるやうな此樣な性質よりは百倍もましぢやないか？』

けれども直ぐに彼はその自卑の心に對して苦悶し初めた。

『どうしてさうなのか。俺も矢張自己を犧牲にする事が出來ないのか？ 待て我が友……。

そして君は、バクリーンは譬へ僕が美を愛するにしても詩を作るにしても……いつかは得心する事があらう』

彼は腹立たしげに髪の毛を後へ押しやつた。齒を咬み合せた。そして大急ぎに着物を脱ぎ捨てじと〳〵した冷たい寢臺の中へ身を投げ入れた。

『おやすみなさい！』マシューリナの聲が戸を隔てゝ聞えた『私は貴方のお隣よ』

『おやすみなさい』とネヅダーノフは答へた。

それから彼はマシューリナが先刻絶えず自分から眼を放さなかつた事を思ひ出した。

『何を彼女は求めるのだらう』と彼は呟いたと同時に何だか自分乍ら恥かしい氣がした。

『あゝ出來る丈け早く眠らう！』

けれども彼の昂奮した神經を靜める事は難かしかつた……そして彼がやつと重苦しい不安な眠りに落ちた時には既に太陽は空高く昇つてゐた。

翌朝彼が遲く目を覺すと頭痛がしてゐた。彼は着物を着て屋根裏の自分の部屋の窓際へ行つた。そしてマルケーロフが實際農作地と云ふものを少しも持つて居ないのを見た。彼の小さな番小屋が林から餘り隔たらぬ峽間に立つてゐた。その一方には小さな穀倉や厩や穴藏や

草葺家根の半ばずりこけてゐる小さな小舍などがあり、又他の一方には小さな池と猫の額ほどの菜園と大麻畑と前のと同じ樣な屋根の小舍が一つあつた。遠くには離れ家と納屋とそして空つぽの打穀場とがあつた――此れ丈けが見渡される財產の全部であつた。それは凡て慘めに頽廢して見えた。それも等閑にされたとか、打捨らかしになつてゐたとかいふ風ではなく、未だ曾て榮えたこともなさゝうな、根の定まらぬ樹木みたいなものであつた。ネヅダーノフは階段を降りた。マシューリナは客間の茶甕の背後に坐つてゐた。彼を待つてゐたのは明らかだ。彼はオストロデューモフは仕事の爲め出かけて行つたので、二週間は戻つて來ないだらうといふ事、それからマルケーロフは彼の勞働者を監督しに出かけたといふ事を彼女から聞いた。五月も既に末近くなつてゐて、差迫つてなすべき仕事もなかつたので、マルケーロフは他の助けを待たずに白樺の矮林を伐り倒さうといふ計畫をしてゐた。そして今朝早くから其處へ出かけたのであつた。

ネヅダーノフは一種妙な心のものうさを覺えた　昨夜は終夜永く躊躇する事が出來ないといふ事が散々語られた。採るべき唯一の途は「行動する」事であるといふ事が屢々繰返された。『併し乍ら如何に行動するか。如何なる方向に、又いかなれば躊躇なく行動されるか？』

マシューリナに向つてそれ等の事を訊ねるのは無益であつた。彼女は何等の躊躇も知らなかつた。彼女は自ら爲さねばならぬ事に關しては何等の疑も挿む女でなかつた。たゞKに行く事があるのみだ。それ以上彼女は顧みなかつた。ネヅダーノフは彼女にどう云つて宜いか分らなかつた。彼は茶を少し許飲んでから帽子を被つて白樺の森の方へと出かけて行つた。途中で彼は以前マルケーロフの農奴であつた數人の百姓が肥料を運んでゐるのに出會つた。彼は彼等に話しかけた……けれども得る處は餘りなかつた。彼等も亦物憂さうであつたけれどもそれは彼が今經驗してゐるやうな感じとは似もつかぬ當り前な肉體の物憂さであつた。彼等の前の主人は、彼等の言葉に由れば人の善い素樸な紳士であつたが何處か偏屈な人であつた。彼等は彼の沒落を豫言した。何となれば『彼は物事を始末する方法を辨へない又以前彼の先祖が行つたとは違つて彼は自分丈けの行り方で事を爲さうとしたからだ。それに餘り悧巧すぎる——貴方は彼を了解する事が出來ないのだ。どうとも勝手に考へなさい、だが併し彼は世にも稀な心の善い紳士だ。』彼等はこんな意味の事を云つた。ネヅダーノフは歩き續けた。と、マルケーロフその人に出會つた。

彼は勞働者の群にとり圍まれながら歩いてゐた。彼が何事かを話したり說明したりしてゐ

るのが遠くからわかつた。と、やがて彼は片手を投げ出すやうな格好で絕望的に振つた！

彼の傍には彼の執事が控へてゐた。態度に何等權威の面影のない、眼のどんよりとした若い男であつた。此の執事は斷えず『その通りで御座います』と云ふ事を繰返し言つてゐた主人はそれを非常に煩さがつた。今少し獨立的なことを彼に對して欲した。ネヅダーノフはマルケーロフの處へ行つた。そして彼はマルケーロフの顏にも自分と同じ精神的な倦怠の色の動いてゐるのを認めた。二人は挨拶を交はした。マルケーロフは直ぐに、併し乍ら簡單に昨夜議論した問題に就いて、差迫つてゐる革命に就て語り初めた。それでも倦怠の影は彼の面から消えなかつた。彼は全身埃と汗とに塗れてゐた。材木の鉋屑や青い苔のちぎれたのなどが彼の着物に引かゝつてゐた。彼の聲は嗄れてゐた……彼を取卷いて立つた人々は默つてゐた。彼等は半ばは怖れ半ばは面白がつて居たのだ……ネヅダーノフはマルケーロフを眺めた。と、オストロデューモフの言葉が又もや彼の頭の中で反響した。何の爲めになるか。如何でも宜い事だ。

『萬事の改正は後の事だ！』何か過失を仕出來した一人の勞働者がその過失に對する罰金を免してくれと懇願し初めた……マルケーロフは最初かつとなつて猛烈に彼を罵つたけれども

後で彼は其の男を赦してやつた……『どうでも宜い事だ……萬事の改正は後の事だ……』ネヅダーノフは家へ戻る爲めの馬と馬車とを彼に求めた。マルケーロフはその望みに驚いたやうであつた。が萬事直ぐに仕度させやうと答へた。

彼はネヅダーノフと一緒に家の方へと戻つた……彼は疲勞の餘り歩く度によろ〳〵して居た。

『どうしたのです?』とネヅダーノフが訊ねた。

『僕は疲れ切つて居る!』マルケーロフは荒々しく言つた。『如何に此の人間共に話してやつても奴等は何一つ了解出來ないのだ。そして奴等は命令などは少しも遂行しないのだ……奴等は絶對的にロシア語が解らない。『分』といふ事は奴等はよく知つてゐる……が併し『分を共にする』と云ふ事……さうだ、分を共にすると云ふ事は如何いふ事か奴等には解らないのだ。けれどそれだつて矢張り露西亞語なんだ。馬鹿々々しい! 奴等は僕が自分の地面を分けてゞもやるのだと思つてる!』

マルケーロフは協同と云ふ事の原理を百姓に說明しそれを自分の領地に實施しやうといふ考を抱いて居たが、彼等はそれに反對した。

彼等の一人は此れに關して斯ういふ事迄云ふに至つた。『以前でさへあけられる丈けの深い穴があいて居た。併し今ではその底が見えない』……すると、他の百姓共は一齊に深い嘆息を洩らした。マルケーロフはすつかりそれに壓倒されてしまつた。

家に着いてから彼は從者に暇をやつた。そして馬車や馬やそれから中食などに注意し出した。彼の一家は若い小間使と料理番と馭者とそれから彼の祖父の側使であつた非常に年寄つた毛むくぢやらな耳をして、裾の長い木綿の上衣を着た男が一人と、唯それ丈けの人數で成立つてゐた。此の老人は何日も烈しい失望の眼で主人を見つめてゐた。それで居て彼は何一つ用をしなかつた。恐らく何事をなすにも殆ど適當しなかつた。併し彼はいつでも其處に、その闘際に蹲まつて居た。

硬い煮卵と鯷とそれから冷い截肉の中食——給仕は古いボマール葡萄酒の甕に入つた芥子とケルン水の瓶に入つた醋を渡した——ネヅダーノフは昨夜來る時乘つたその同じ馬車の中に坐つた。併し今日は三頭ではなく二頭だけしか馬が附けられなかつた。三頭の中の一頭が蹄鐵を打たれて跛を引いてゐたからだ。中食の間マルケーロフは餘り物も言はず、食べもせず、苦しさうな息づかひをして居た……彼は所有地の事に就いて、二言三言苦い言葉を口走つ

た。そして『どうでもいゝ事だ。萬事の改正は後の事だ』と云ふやうに又しても片手を振つたマシューリナは買物がしたいから町迄自分を連れて行つてくれとネヅダーノフに頼んだ。『歩いて歸れます。でなければ百姓の荷車に乘せて貰ひますよ』かう彼女は云つた。

マルケーロフは階段まで送り出した。そして近々又ネヅダーノフの處へ行くといふ事を曖昧に言つた。『それから……それから……（彼は體をゆすつて再び氣を引立てた）――』『彼等は斷乎たる處置に出なければならぬ。ソローミンも來る筈になつて居る。』かう彼は云つた。彼は更に自分がワシリー・ニコラエーキチの通信を只管待つて居ると云ふ事、それから殘るは唯てきぱきと『行動する』事だけである――百姓（分を共にすると云ふ事の分らぬその同じ百姓）は最早猶豫する事を肯んじないだらうから！といふ事を語つた。

『あ、君はその――何とか云つたつけ――キスリヤーコフが、その男の手紙を見せる筈だつたね』とネヅダーノフが言つた。

『後で……』とマルケーロフは慌てゝ答へた……『いづれ萬事をやつつける事にしやう――何もかも』

馬車は出て行つた。

『準備して置き給へ！』といふマルケーロフの聲が最後に聞かれた。彼は階段の上に立つて居た。そして彼の傍には、相も變らず氣落した顏容をして、曲つた腰を眞直にし、兩手を背後で握り合せ、ライ麥の麵麭やファスチアン織の匂ひを撒き散らし乍ら、何事も耳に入れないで、かの模範的從僕たる老いぼれの小使が立つてゐた。

町へ行く途中マシューリナは絶えず默つて居た。絶えずシガーを吹かすばかりであつた。町端へ近づいた時彼女は突然溜息を洩らした。

『セルゲー・ミハローウキチはお氣の毒ですね』

と彼女は言つて顏を曇らした。

『彼の人は苦勞ですつかり疲れ切つてゐる』とネヅダーノフは言つた『彼の人の土地は慘めな有樣になつてゐるらしい』

『私が氣の毒だと云ひましたのはそれぢやありませんわ』

『ぢや、何です！』

『あの人は不幸な人です、不運な人です！　何處にあれより善い人がゐませう？　ですけれど誰れも――誰れも彼の人を相談相手にしないのです』ネヅダーノフは連れの女を眺めた。

『それでは、あなたは彼の人に就て何か御存じの事がおありですか』

『何も存じません・・・ですけれど獨りでにそれが解ります左樣なら、アレキセー・ドミートリッチ』

マシューリナは馬車を出た。一時間の後にはネヴダーノフはシブヤーギン家の廣庭の中に馬車を驅り入れてゐた。彼は大して氣持よくも感じなかつた・・・彼は一夜を眠らずに過ごしたのだ・・・それからあの通りの議論・・・談話・・・

美しい顏が窓から覗いた。そして彼を見てしとやかに微笑した・・・シブヤーギン夫人が彼の歸つたのを迎へてゐたのだ。

『何といふ眼だらう！』と彼は思つた。

十二

晩餐には非常に澤山の人が集つた。晩餐の後でネヴダーノフは皆がが〳〵騷いでゐるのを幸ひ、こつそり自分の部屋へ逃れて來た。

彼は彼の旅行で得た印象を唯一人で回顧して見度かつたのである。席上ではワレンチーナ

ミハーロウナが何度も〳〵注意深く彼を眺めたが、遂に話しかける機會を得なかつたらしい。マリアンナはあの唐突な直言で彼を驚かしてからは自らを恥ぢて彼を避けて居るらしかつたネヴダーノフはペンを取り上げた。彼は友達のシーリンと紙の上で語を交へ度くなつたのだけれども、彼はその友達にさへ何と云つて宜いか分らなかつた。或は恐らく、彼の頭の中にはあまり多くの矛盾した思想や感情が縺れ合つて居たのであらう。そしてその爲めに彼はそれを解きほぐす氣にもならずに、一切他日に延ばしたのであらう。

晩餐の席にはカルロミエーチエフ氏も居た。彼は嘗てこれ以上の傲慢な態度と紳士然たる横柄さとを表はした事はなかつた。けれども彼の自由なそして滑らかな言葉はネヴダーノフに何等の影響も被らす事はなかつた。彼はそんな言葉に注意もしなかつた。彼は一種雲のやうなものに閉ぢ込められてゐるらしかつた。そのものは彼と外界との間に薄暗い帳のやうに垂れてゐた――そして奇怪な事には、此の帳を透して彼はたゞ三つの顏を見分ける事が出來たゞけであつた。三つとも女の顏だ。そして三つともその眼は執拗く彼を見つめてゐるのだ。それはシブヤーギン夫人とマシューリナとマリアンナであつた。これは一體何を意味するか。而もそれがかつきり三つだとは如何した譯か。彼等は相通じた何物を持つて居るのか。

彼等は何物を彼に要求するのか。

彼は早くから寢床に這入つた。併し眠る事が出來なかつた。彼は陰氣な、而も慥かに苦しいと云ふのでない觀念……避け難い最後について、死についての考によつて心を惱まされた。それはもう珍らしくもない考であつた。永い事彼はそれらの考を兎や角と思ひ變してゐた。ある時は滅絶の豫想に打ち慄き、ある時はそれを歡び迎へるやうな、殆どそれに歡喜して居るやうな思に打たれた。彼はとう〳〵よく知つて居る或る特殊な亢奮を感じた……彼は起き上つた。机に向つて坐つた。そして一寸考へてから殆ど書き流しに、次の詩句を彼の秘密の帳面に書きつけた。

『いとしきものよ、我が臨終の時……
如是我が意なり——
我が書ける凡てを積み重ねて焚け、
同じ時刻に滅び去らんが爲めに！
さて花もて我を飾り極めよ。
我が室に日光を輝かしめよ。

樂師等を我が戸口の邊りに立たしめよ、
而も悲しき挽歌は歌はしむる勿れ！
酒宴の時のごとく
華やかなる胡弓の音をもて鋭く、
躍り狂はす如きウォルツの曲を奏せしめよ！
さて我が滅びゆく耳に
そのなほざりなる音樂の消え去らば
我も亦死すべし。眠るが如く死すべし。
さらば益なき悲歎もて壞らざれ、
やがて死と共に來るべき平和を。
我は他界へと過ぎ行くなり、
此の世の輕き歡びの
輕き曲調にゆられて眠りながら！』

『わがいとしき者よ』と書いたとき、彼はシーリンを思つてゐた。彼はその詩を低い調子で

獨吟した。そして自分のペンの先から生れ出たこれらの文字に驚いた。此の懷疑、此の無頓着、此の輕浮な信仰の缺乏、是等は凡て何うして彼の主義と一致したか、マルケーロフの家で云つた何ういふ事と一致したか。彼は机の抽斗の中へ本を投げ入れて、寢床へ戻つた。けれども彼は夜明になつて蒼ざめゆく空に早起きの雲雀の囀り出す頃になつて、漸く眠りに落ちた。

翌日彼は課業を了へたすぐ後で、玉突室に居た。そこへシブヤーギン夫人が這入つて來て周圍を見廻し、にこ〳〵し乍ら彼のところへ歩み寄り自分の部屋へと彼を誘つた。彼女は極めて淡白した、いかにも惚々する樣な輕い薄紗の着物を着てゐた。兩方の袖口が臂の處で襞をとつて緣飾のやうになつてゐた。廣いリボンが腰に纏ひ着いてゐた。髮は濃く波を打つて首のところに垂れてゐた。彼女の身に備はつた凡てに——半ば閉じた眼の和らげられた輝き柔しい氣落のしたやうな聲、身振、それから歩き樣に至るまで——親切と思遣のある柔和さ差探へられた放膽な柔和さが溢れてゐた。シブヤーギン夫人はネヅダーノフを自分の居間に招じ入れた。輝かしい、魅するばかりのその部屋は花の薫りや香料の匂ひや、婦人着の清い鮮やかさや、女の不斷のゐづまひやに滿ちてゐた。彼女は彼を安樂椅子に坐らせ、自分もその傍

に坐を占めた。そして彼の旅行の事や、マルケーロフの行爲やに就て、いかにも巧妙に、いかにも優しく、いかにも氣持よく訊ねるのであつた！　彼女は自分の兄に對して眞面目な興味をもつて居る事を示した。その時迄彼女は一度も兄の事をネヅダーノフの耳に入れたことは無かつた。彼女の言葉で、マリアンナが彼に吹込んだ感情が彼女を通れなかつたといふ事が知られた。彼女の言葉の調子は心もち愁を帶びてゐた……それは彼の情がマリアンナから報ひられなかつた爲めか、それとも彼女の兄の選擇の眼鏡か、彼の何も知らぬ一人の娘に定つた爲めか、そのいづれかは遂に定かでなかつた。けれども何よりも先づ明らかな事は、彼女がネヅダーノフを手に入れやうとして居る事であつた。彼女に對する彼の勇氣を喚起させやうとしてゐる事であつた。ワレンチーナ・ミハーロウナは彼が彼女に就いて誤つた觀念を抱いてゐるといふ事に對して幾分批難する迄になつた。

ネヅダーノフは彼女の云ふ事を傾聽し彼女の腕や肩をながめた。又時々彼女の薔薇色の唇、微かに浪うつて居る彼女の髮を眺めた。初めの中は彼の答は頗る簡單なものであつた。彼は咽喉と胸とが何となく引き緊るやうに感じた……けれどもその感情は次第に他の感情と入れ代つた。それも亦ひどく胸たゝならぬものではあつたが、併しそれにはある甘い味が缺

けてゐなかつた。かういふ身分の高い美しい貴婦人が、かういふ貴族が彼の樣な一介の書生に興味を持ち得るとは彼の思ひも寄らぬ事であつた。而も彼女は唯彼に對して興味を感じて居るばかりでなく、彼に對して幾分媚びるやうな氣味さへあつた。ネヅダーノフは何故かういふ事を彼女がするのかとわが身に問ふてみた。が、彼は何の答へも得なかつた。實の處彼はそれ程その答を得やうと望んでもゐなかつたのだ。シブヤーギン夫人はコーリヤの事を語つた。彼女は自分が一層彼と親しくなり度いと思ふのは自分の息子の事で眞面目に話をし、ロシア一般の子弟敎育に關する彼の意見が知り度いからばかりだといふ事迄辯解しかけた。それにしてもこんな事の望がこれ程唐突に起つて來たと云ふ事については誰しも奇怪に思はないものはなからう。けれども事實の根底はワレンチーナ・ミハーロウナが今云つた樣な事に在るのではなくて、肉慾の波の樣なあるものによつて彼女が襲はれて居たといふ事實に在つたのだ。此の一徹者を降伏せめしやう、自分の足下に齎らさうといふ彼女の一念が自ら明言してゐる……

併し乍ら此の點では吾々は少しく以前の事に遡らなければならない。ワレンチーナ・ミハーロウナは五十年間勤續の印たる唯一つの星章と一個の控金とを有つた頗る愚鈍な、根氣

のよくない將官の娘であつた。そして同國の女の多くと同じく、異常に淳樸な寧ろ愚かなともいふべき外貌を有つて居る極めて內氣なそして陰謀好きな小露西亞人の一人であつた。彼女は又その外貌から此上ない利益を抽出す法を知つてゐた。ワレンチーナ・ミハーロウナの兩親は有福な人達ではなかつた。それにも拘らず彼女はスモーニー僧院へ入れられた。そして其處で彼女は共和黨員として認められては居たが、彼女が一生懸命に勉强した爲め、そして起居振舞がしとやかであつた爲めに上位にゐた、スモーニー僧院を去つてから彼女はその母親と二人で（彼女の兄は田舍へ退き、星章と、控金を有つた將軍の父親は故人となつて居た）清潔ではあつたが極めて寒い割住長屋に住んで居た。人々がその部屋の中で話をすると彼等の口から出る息が蒸氣となつて見えた。ワレンチーナ・ミハーロウナはいつも「お寺の中にゐるやうだ」と言つては笑つて居た。彼女は慘めな窮窟な暮しに伴ふ凡ての不愉快に堪へる勇氣があつた。彼女は驚くべく善良な氣質を有つてゐた。母親のお蔭で彼女は知人や手蔓をこしらへ、首尾よくそれらとの間柄を持續けて行く事が出來た。あらゆる人が——最上流の社會の人ですら、彼女の事を頗る愛嬌のある、立派に修養された、此上なく育ちの好い娘だと言つてゐた。ワレンチーナ・ミハーロウナには數人の求婚者があつた。彼女は皆の中か

らシブヤーギンを選んで頗る簡單に、とり急いでてきぱきと二人の戀を成立させてしまつたそれであり乍ら實のところ、彼の方では直ぐに自分にとつて彼女より以上の良妻を見出す事は出來ないといふ事を悟つたのであつた。彼女は怜悧で惡氣がなかつた……寧ろどちらかと云へば人の善い、底から冷靜な無頓着な人であつた……而も彼女は誰にせよ自分に對して無頓着でゐる者があると思ふと我慢が出來なかつた。ワレンチーナ・ミハーロウナは吸引力のある利己主義の人に特有な一種特別な愛嬌に溢れてゐた。その愛嬌の中には詩もなければ眞の感受性といふものもなかつた。その代り柔和があつた。思ひ遣りがあつた。又優しみさへあつたのだ。たゞさういふ愛嬌のある利己主義の人は人から逆はれてはならない。彼等は權力を好むのである。隨て他人に獨立を恕す事を欲しない。シブヤーギン夫人の樣な婦人は無經驗な情熱的な人に對しては刺激を與へ感化を及ぼさうとするが、彼等自身の爲めには彼等は物の規律と平和な生活とを好むのである。實効は易く彼等に到るのだ。彼等の心内は動搖してはゐないけれども他を動かし度い、引きつけ度い、そして喜ばし度いといふ不斷の慾望が彼等を驅つて動き易いもの光彩あるものに向はせるのである。彼等の意志は强固で、彼等の蠱惑そのものが屢々此の意志の力を頼みにする。玄妙な柔かさの閃光が此の樣な輝かし

い、純潔な人間の上を識らず知らずのやうに通りゆく一瞬時、男子は自分の位置を維持する事は困難である。彼は時期の來るのを豫期しながら待つてゐる。そしてやがてその氷は溶ける。處がその清澄な氷はたゞその光の戯れを反映するばかりで溶けはしない。そして彼は斷じてその迷亂した光をば見ないのだ！

嬌態を演ずる事はシブヤーギン夫人にとつては大した事ではなかつた。彼女は自分にとつて何の危險もないといふこと、又決して危險はあり得ないといふことをよく知つてゐた。そして其間に、他人の眼を曇らしたり、それから又輝かせたり、慾望と恐怖との爲めに他人の頰に紅を潮せしめたり、他人の聲を顫へさせ、しどろもどろとならせたり、他人の魂を苦しめたりするのは――まあ、どんなに彼女の心にとつて快よいものであつたらう！　夜も更けて、彼女が自分の清い、すが〳〵しい巣の中で安らかなまどろみに落ちやうと身を横たへる時それらのそは〳〵した言葉や目付や溜息やを思出すのはどんなに嬉しい事であつたらう！

どんな幸福な微笑を浮べて彼女は自分自らの中へ退いたらう、人に近づかれないといふ意識、人に攻取られない德を有つてゐるといふ意識の中へ退いたらう。そしてどんなに優雅な卑下の心を以て彼女はその育ちの好い配偶者の法に適つた抱擁に從つたらう！　かういふ回想は

彼女にとつて非常に慰藉的なものであつた。その爲めに彼女は屢々慈善の行爲を爲さう、同胞を救濟しやうといふ斷乎とした決心を起すやうな事さへある程であつた。……嘗て彼女と狂熱的な戀に陷つた公使館の秘書官が咽喉を切らうと企てた後で彼女は一つの小さな養育院を創立した位だ！　彼女の宗教的情操が弱年の頃から微弱なものであつたにも拘らず、彼女はその時は相手の男の爲めに心からの祈りを捧げまでした。

で、矢張さういふ風に彼女は今ネヴダーノフに話しかけた。そしてあらゆる方法を盡して彼を自分の足下に引き寄せやうと試みた。彼女は彼に對して胸襟を開いた。彼女は言はゞ自らを彼の前にさらげ出したのだ。そして彼女は快い好奇心と半ば慈母のやうな柔和を以て此の極めて樣子のいゝ面白い而も嚴格な若い過激黨を眺めやつた。そろ〳〵と、而も無遠慮に彼女に對して應答しだした彼を眺めやつた。一日、一時間、一分間のうちに――此の凡てが痕跡もなく見えなくなるのであらう。けれども、それと同時に彼女はそれを愉快なもの、寧ろ面白いもの、寧ろ哀傷的なもの、否寧ろ感激的なものとしていつくしんだ。彼の素性も忘れて彼女はいかにしてかゝる興味が淋しい人々に他人の中で味はれるかを知り乍ら、ワレンチーナ・ミハーロウナはネヴダーノフにその幼少の頃や、その家族やに就て訊ね初めた……けれど

も直ぐそのあとから彼の當惑したらしい簡單な返答で、ワレンチーナ・ミハーロウナは自分が失敗したといふ事を察してその間違を取繕はうとした。彼に對してもつと巧みに胸襟を開かうとさへした……倦怠い眞晝の熱さの中で滿開の薔薇が、やがて又夜の爽やかな冷氣の爲めに摺んでしまふ芳ばしい花を開くやうに……とは云へ彼女は綺麗にその間違を拭ひ去る事が出來なかつた。痛い處に觸られたネヴダ！ノフは早や以前の樣に心置きなく對する事が出來なくなつた、常に彼に伴つてゐた苦々しい感情が再び動き出した。彼の平民的な疑念と自省の心とが目醒めて來た。『自分が此處へ來たのはこんな事の爲めではなかつたのだ！』と彼は思つた。バークリンの皮肉な忠言が思ひ出された……そして彼は互の言葉が絶えると直ぐそれを機會に起ち上つた。素氣ないお辭儀を一つして「馬鹿氣た態だ」と自分乍ら呟かずには居られない樣子で出て行つた。

彼の當惑はワレンチーナ・ミハーロウナの心から離れなかつた……けれども出て行く彼の後姿を見まもる時の彼女の微笑から判ずるに彼女は此の當惑を自分に媚びる態度だと解したらしい。

玉突室でネヴダーノフはマリアンナに行き逢つた。彼女は夫人の私室から餘り隔たりて居

露光量違いの為重複撮影

ない窓に背中をつけ、両手をしつかり握り合せ乍ら立つてゐた。彼女の顔は不意に黒いと思はれる程の影に包まれた。けれども彼女の物怖ぢしない眼は、ひどく穿鑿するやうにまんじりともせずネヅダーノフを見詰めてゐる。彼が當惑してハタと歩みを止めた位輕蔑と嘲弄的な憐れみとが彼女のきりつと結んだ唇の上に見られた……

『僕に何か御用がおありですか』と彼は思はず言つた。

マリアンナは直ぐには返答しなかつた。『いゝえ……でもまあさうなんです。ありますの。けれども今ぢやありません』

『ぢやいつ？』

『さうですね。多分……明日。多分……いえ、決して。私にはよく分りませんの……本當に貴方はどんなお方だか。』

『矢張り』とネヅダーノフが言つた、『時々僕も思つたのです……僕等がその——』

『そして貴方はちつとも私がお分りにならない、』とマリアンナが遮つた。『だけとあのさうですね。明日。多分。私は今……奥樣の處へ行かなくちやなりませんから。さよなら、いづれ明日』。

ロシヤの田舍の並木路を歩めるツルゲーネフ

露光量違いの為重複撮影

ない窓に背中をつけ、兩手をしつかり握り合せ乍ら立つてゐた。彼女の顔は不意に黒いと思はれる程の影に包まれた。けれども彼女の物怖ぢしない眼は、ひどく穿鑿するやうにまんじりともせずネヅダーノフを見詰めてゐる。彼が當惑してハタと歩みを止めた位輕蔑と嘲弄的な憐れみとが彼女のきりつと結んだ唇の上に見られた…

『僕に何か御用がおありですか』と彼は思はず言つた。

マリアンナは直ぐには返答しなかつた。『いゝえ…でもまあさうなんです。ありますの。けれども今ぢやありません』

『ぢやいつ？』

『さうですね。多分…明日。多分…いえ、決して。私にはよく分りませんの…本當に貴方はどんなお方だか。』

『矢張り』とネヅダーノフが言つた、『時々僕も思つたのです…僕等がその——』

『そして貴方はちつとも私がお分りにならない、』とマリアンナが遮つた。『だけとあのさうですね。明日。多分。私は今…奥樣の處へ行かなくちやなりませんから。さよなら、いづれ明日』。

ロシヤの田舍の並木路を歩めるツルゲーネフ

ネヴダーノフは二足前へ進んだが、急にふり返つて、『あ、一寸マリアンナ・ウイケンチェーウナ……僕は前から貴嬢にお願ひしやうと思つてゐた事があるのです。貴女と御一緒に僕を學校へ連れて行つてくれませんか――何んな事を貴女方が其處でしてゐらつしやるかを見に――退ける前にね』

『承知いたしました……ですけれど私が貴方にお話したいといふのは學校の事ぢやありません。』

『ぢや何ですか？』

『明日、』とマリアンナが繰返した。

けれども彼女はその話を翌くる日迄延ばしはしなかつた。二人の會話はテレースからあまり遠くないとある菩提樹の並木路で取り交はされたのであつた。

十三

彼女の方から先づ男の方へ歩み寄つた。

『ネヴダーノフ』と彼女はせか〳〵した聲で口を切つた。『貴方は、ワレンチーナ・ミハーロ

ウナにすつかり迷はされてゐらつしやるのね？』

彼女は男の返事も待たず踵を返し、並木路に沿ふて歩いた。彼は女と並んで歩いた。

『どうして貴女はさうお思ひなさるんです？』

と彼は一寸間を置いてから訊ねた。

『さうぢやなくつて？でなければ、彼女の今日の骨牌の遣方は下手でしたのよ。私は彼女が何んなに心を込めて仕事に掛つてゐたか、何ういふ風に彼女がその小さな網を廣げたか私は想像が出來ますわ』

ネヴダーノフは一言も云はなかつた。彼は唯横の方からこの奇妙な連れを見張つたいけであつた。

『お聽きなさい、』と彼女は續けた。『私は好加減な事を云はうとしてるのではありません。私はワレンチーナ・ミハーロウナを好きではありません の――貴方はようくそれを御存じなのです。私は貴方の爲さり方を善くない事として攻擊してもよろしいでせう・・・だけど貴方は何よりも先づお考へにならなければなりません・・・・』

マリアンナは泣聲になつた。彼女は顏を眞赤にして歩き出した。・・・・彼女には情緒は殆

ど常に忿怒に似た形を採つて現はれるのであつた。『貴方は大方御自分に訊ねてゐらつしやる、』と彼女は再び始めた。『何故此の若い婦人はかういふ事ばかり自分に話してるだらう？と。

屹度貴方は私が何事かを・・・・マルケーロフの事を貴方にお話しゝた時も同じ事をお思ひになつたに違ひありません。』

彼女は急に軀を屈め小さな蕈を摘み採つた。

そしてそれを半分に引き裂いて投げ棄てた。

『違ひます、マリアンナ・ウイケンチエーウナ』とネヴダーノフが言つた。『却つて僕は貴女に勇氣を吹込んであげたと思つてるのです――その考へは大變愉快なものでした』

ネヴダーノフは全くの眞實を言つて居るのではなかつた。それはたつた今彼の頭に生じた考へなのだ。

マリアンナはそれをきつかけに彼を眺めやつた。それ迄彼女はわざとしつこく他方を見て居た。

『貴方が勇氣を吹込んで下すつたのはそれは大した事ではありません』と彼女は鸚鵡返しの

樣に言つた。『貴方と私とは全くの他人ですわねえ。だけど貴方の境遇と――私のと――大變よく似てゐます。私共は同じく不仕合です。それが二人の中の網で御座いますわねえ』

『貴女が不仕合？』とネヅダーノフは訊ねた。

『そして貴方もさうでありませんの？』とマリアンナが應へた。

彼は何にも言はなかつた。

『貴方は私の身上話を御存じ？』と彼女は早速始めた。『私の父の話を？父の追放の事を？――御存じない？、ではお話し致しませう。父は拘引され、審問され、有罪と宣告され、位階を奪はれました……そして何もかも奪はれてしまひました――そしてシベリアへ送られたのです。それから父は亡くなりました……私の母も亡くなりました。私の叔父のシブャーギンは母の兄弟ですが、あの人が私の面倒を見てくれました。私はあの人の世話になつて生活してゐます。あの人は私の恩人です。ですからワレンチーナ・ミハーロウナは私の恩人の奥樣です――それだのに私は此上なく人の惡い、恩知らずの仕打で報ひてゐます。それと云ふのも多分私と云ふ人間が無情な心を有つてるからでせう――それに施しのパンと云ふものは苦う御座いますからね――その上私は屈辱的な服從に我慢する事が上手ではありません――結局私は人

の保護に甘んずる事が出來ないのです――それに又私は物事を隱すことが上手ではありません。そして自分が永久に小さな針で刺され傷けられてゐるとしましても、私は唯泣き叫ぶのを抑へるぐらゐが關の山なのです。私は餘り高慢ですから。』

マリアンナはこれらの切れ切れな文句を口走るにつれて益々足早に歩くのであつた。と思ひがけなく彼女は立ち止まつた。

『貴方は御存じなの？私の叔母が――私を手離し度いばつかりで――私と……あの忌らしいカルロミエーチエフと結婚させようとしてるのを。勿論彼女は私の考を知つて居るのです――だつて、彼女の眼には私は虛無主義者に見えるのですもの！――ですけれど彼の人は……私はあの人の氣に入つてはゐません、勿論――この通り私は美人ではないのですから。でも私は賣られるかも知れません。それも慈善の行爲の一つでせうからねえ。』

『ぢや何故貴女は爲さらなかつた……』とネヅダーノフは云ひかけて、躊躇した。

マリアンナは一寸彼に目をくれた。『何故私がマルケーロフさんの申込を受けなかつたか、と仰有るんですか？ちがひまして？さうね、ですけど私にどんな事が出來ませう？彼の人は善い人です。けれどあの事を承知しなかつたのは私の過ちではありません。私はあの人を愛

して居ないのですもの』

マリアンナは此の思も寄らぬ自白に對して何とか答へなくてはならぬ義務を連れの男に負はすまいとするらしく、再び先きに立つて歩き出した。

彼等は二人とも並木路の盡頭迄行つた。マリアンナは密に植ゑられた樅の木立の中を走る小徑へ急に進み入つた。そしてそれを辿つた。ネヅダーノフはマリアンナの後を追つた。彼は二重の當惑を意識した。此の偏屈な娘が急に彼に對してそのやうな隔てのない態度に出る事が出來たのは彼には驚くべきことであつた。そして更に驚くべきは彼女のその打ちまけた態度が彼には不思議なことゝは思へずに却てそれが自然なことのやうに感じられたことである。

マリアンナは突然振り返つて、路の眞中に立ち止つた。彼女の顏とネヅダーノフの顏と一ヤードばかり隔つて向き合つた。そして彼女の眼が眞直に彼の眼に注がれた。

『アレクセー・ドミートリッチ』と彼女は言つた。『私の叔母を惡い人だと思はないで下さい：：いゝえ！彼女は詐りの塊です。彼女はいつでも人に難題をもちかけます。あらゆる人に美人として崇められ、聖者として敬はれたいのです！彼女は思遣のある文

句を作ります。それをある一人の人に言ふのです。それからその同じ文句を第二の人にも、第三の人にも繰返します。そしていつでも丁度その場合に、つまり彼女があの不思議さうな眼付を用ふ丁度その場合に、それを思ひついたとでもいつた風にそれを云ふのです！彼女は自分で自分をよう〳〵了解してゐます。自分がマドンナの樣だといふことを知つてるのです。そして誰れの事も氣にかけては居ません。！彼女はいつもコーリヤの爲めに苦勞してる樣な風をします。たゞ彼女のする事はたゞもう知識ある人々と彼の子の事を語ることだけなのです。彼女は誰を害しやうとも思つて居ません：：彼女は慈悲の塊です！ですけれど彼女の眼の前で他の人が貴方の體軀の骨を一本一本折つてしまつてもいゝのです：：そんなことは彼女にとつては何でもないのです：彼女は貴方を助ける爲めに指一本たりと動かすことはしないでしやう。ですけれど若しも自分にとつて必要で爲めになることでしたら：：その時は：：あゝ、その時は！』

マリアンナは口を噤んだ。彼女の憤怒が息を詰らしたのだ。彼女はそれを吐出してしまはうと定めた――彼女は我慢する事が出來なかつたのだ。併し言葉が思はず知らず彼女に背いたのだ。マリアンナは不幸な人間の一種特別な階級に屬してゐた（ロシアには此種の人が

可なり多くある）……正義は彼等を滿足させはするが喜ばせはしない。又不正は―それを看出す事にかけては彼等は恐ろしく鋭敏で―彼等の命のどん底までも彼等に對して反抗の聲をあげるのだ。彼女が話してる間ネヅダーノフは一生懸命彼女をながめてゐた。少しほつれた短い髪の毛とぴく〳〵と顫いてゐる薄い唇とを有つた彼女の上氣した顔が威嚇的な、意味深い、而も美しいものとして彼に印象された。厚く重なつた小枝の網の目のやうな隙間を洩れて片々になつた日光が、いびつな黄金色の斑點となつて彼女の額の上に落ちた。そしてこの焔の舌が彼女の興奮した顔全體の印象と、廣く開いて物を見据えたそのきら〳〵する眼と、鋭いその聲の響と調和して見えた。

『言つて下さい、』ネヅダーノフはとう〳〵訊ねた。『何うして僕を不幸だと被仰るんですか？貴女は僕の過去の事をお知りになることが出來ますか？』

マリアンナは點頭いた。

『出來ます。』

『つまり……何うしてそれが解つたのです？誰が私の事を貴女に話したのです？』

『私は存じてゐますことよ……貴方の御素性を。』

『知つてらつしやる……誰れが言つたのです？』

『まあ、貴方をあんなに迷はしてゐるあのワレンチーナ・ミハローウナですのよ！彼女は例の慣用手段で、輕く見逃がして居る樣な風をし乍ら、いかにも明らさまに――同情からではなくて、凡ての偏見と云ふものを超越した自由主義者のやうな顔をして――今度の家庭教師の來歷には必然面白い事實があるのだと私の目の前で言つたのです！喫驚なさいますな、どうぞ。ワレンチーナ・ミハローウナは同じやうな不意打のやうな遣方で、而も憐憫を加へて私の姪の來歷には一つの……面白い事實があるのですと殆どあらゆる客に告げるのです。彼女の父親は私消罪でシベリアへ送られました！と云ふやうな事迄云ふのです。彼女は自分では貴族だと思つてるんでせう―ですけれど彼女は蔭口家のいやがらせ家に過ぎません、貴方のシスチン・マドンナはね！』

『待つて下さい』とネヅダーノフは言つた。

『何故彼の女は「僕」のです？』

マリアンナは顔を背けた。そして再び小徑に沿ふて歩き出した。

『貴方は彼方とあんなに長く話をしてゐらしした、』と彼女は曖昧に言つた。

『僕はやつと一と言しか口が利けなかつたんですよ』とネヅダーノフは答へた。『彼女が始終一人で喋つてゐらしたのです。』

マリアンナは默つて歩き續けた。併し路は此處で外れた。松林が側へ退いた。そして小さい芝生が彼等の前に擴がつた。その眞中に幹の洞になつた、枝の垂れた樺の木が一本あつたそしてその老樹の幹を圍んで丸い腰掛がある。マリアンナは此の腰掛に腰を掛けた。ネヅダーノフは彼女の側に腰を据えた。小さい綠葉に覆はれて長く垂れ下つた枝々が彼等二人の頭の上に搖いだ。二人の周圍の綺麗な草の中から鈴蘭の白い花が覗いてゐた。そして廣場全體から、重くるしい松樹脂の臭を嗅いだ後の氣分を洗ひ清めてくれるやうな快よい若い牧草のすが〳〵しい香が立ち昇つた。

『そこの學校を見においでになり度いと被仰いましてね、』とマリアンナが口を開いた。『よう御座います、では參りませう……唯だ……私存じませんことよ。貴方には大して面白い事でもありませんでせうよ。お聞きでせうが――私共の敎頭は補祭です。氣立の良い人です。併しあの人が何んな事を生徒に話すか貴方には想像も出來ませんわ！生徒の中に一人の子供が居ります……ガラセイと云ふ名の子です。親無し子で年は十です、そして御覽なさい、その

子が誰より覺えが早いのですよ』

急に話題を變えたマリアンナは、人が違つた樣に見えた。彼女はどちらかと云へば蒼白くなり、氣が穩やかになつた……そして顏には當惑の色が現はれ、今まで言つてゐたことを凡て恥かしく思ひ出したやうに見えた。二人が今迄と同樣な調子で話し續けることが出來ないと云ふなら、彼女はせめて或る種の問題――學校なり農民なり何なり――に就いてネヅダーノフと話しをしたいやうに見えた。が併し此時の彼は問題などに何等の興味も感じてゐなかつたのである。

『マリアンナ・ウイケンチエーウナ』と彼は初めた。『僕は腹藏なくお話しませう。僕は今しがた二人の間に起つたやうな事は……ちつとも豫想してはゐなかつたのですよ』（起つたと云ふ言葉で彼女は一寸顏をそむけた。）『僕達は思ひがけなく非常に……非常に親密になつたのです。さうならなくてはならなかつたのです。僕達は永い間かゝつてだん〳〵と接近して來たのです。が併し二人共それを言葉に出さなかつたのです。それで僕は亦腹藏なく貴女に云ひますよ。貴女は此家ではいかにも慘めです。如何にも不仕合です。併し貴女の叔父さんはさばけない人ではあるが、矢張り、僕の判斷し得る限りでは、人情のある方です。さうぢやあ

りませんか？あの方は貴女の境遇を了解して、貴女の肩をもつてゐられるのではないでせうか』

『私の叔父が？何よりあの人こそ人ではありません。あれは役人です――上院議員だか大臣だか……私にはよく解りませんけれど。それに又……私だつて無暗と不平を鳴らしたり人を譏つたりし度くはありません。私は此家ではちつとも慘めぢや御座いませんの。つまり私は何んな風にも壓制されては居りません。叔母の小さな針の尖端位私には何でもありません……私は絶對に自由なのです。』

ネヅダーノフはもぢ〳〵し乍らマリアンナを眺めた。

『それぢや……貴女がたつた今私に被仰つた事はみんな……』

『御遠慮なしお笑ひ下さい』と彼女は口早に言つた。『ですけれど、よし私が不幸だとしても――それは私自身の不幸の爲めでは御座いません。時折私は自分はロシアの凡ての壓制された人や貧しい人達や慘めな人達の爲めに苦しむのではないかと思ふ事があります……否、私は苦しむのではありません。憤るのです――私は彼等の爲めに反抗してゐます……私は彼等の爲めに……生命を犧牲にするやうに覺悟してゐる位なのです。私は若い女だから不幸なの

です。私は何にも出來ないから厄介者なのです――私に適つた事が何にもないのですもの！父がシベリアに居ました頃は、私は母とモスクワに居殘つてゐました。その間――あゝ！どんなに私は父の處に行き度く思つたでせう！それも父に對して非常な愛とか尊敬とかを有つてゐたからと云ふのではありません――何んなに罪人達や囚人達が生活して居るかと私自身に知り度い、私自身の眼で見度いとさう自分に強く思つたからです……そして私は私自身に對し又凡てあの呑氣な、富み榮えた、贅澤な人達に對して何んなに嫌惡の念を催ふしましたらう！……其後父はめちや〳〵に蹂み潰されたやうになつて戻つて來ました。そして自分の身を卑しくして、世間に乘り出さうと急つたり、藻掻いたりし出しました……。あゝ……併しそれは難かしいことでした！父はうまく死んでしまひました……そして母も！併しこの通り私は後に殘されました……何の爲めにでせう？自分が惡い性質の人間だといふ事、恩知らずの人間だといふ事、何一つ私には正しいものがないといふ事、そして何一つ出來る事がないと云ふこと、――何物に對しても何人に對しても無用な人間だといふ事を感ずる爲めでした！』

マリアンナは顏を背けた。彼女の手が庭椅子の上へ辷り落ちた。ネヅダーノフはひどく氣の毒になつて來た。彼は彼女の手に自分の手を觸れた……けれどもマリアンナは直ぐにそれ

を引離した。それはネヅダーノフの行爲を不當なことゝ思つたからではなくて、自分が彼の同情を求めてゐると彼に思はれてはならなかつたからであつた。

松の樹の枝の透間から女の着物がちらつと見えた。

マリアンナは體を起した。『御覽なさい、貴方のマドンナが間諜を出しました。あの女中は私を見張つて居て私が何處に誰とゐたかと云ふ事を主人の處へ報告するのですよ。叔母は私が貴方と一緒に居るといふ事を十分察してゐて、それを不都合だと思つて居るのに違ひありません。貴方とのあのセンチメンタルな場面の後ですから。それはさうと本當にもう戻らなければならない時刻ですね。參りませうよ。』

マリアンナは起ち上つた。ネヅダーノフも席を起つた。彼女は自分の肩越しに彼をちらつと見た。と忽ち彼女の顏には殆ど小供のやうな可愛らしいそして心持きまり惡さうな表情が浮んだ。

『私を怒つてゐらつしやるんぢやないでせう？ 私も矢張り貴方に對して見えをして居るとなんかお思ひにならないでせう？ 否、貴方はそんな事なんかお思ひになりはしませんわね』ネヅダーノフが兎角の返答もなし得ないうちに彼女は言葉をついだ。『ねえ、貴方も私の樣に不

仕合でゐらつしやるのですわ。そして貴方の性質も矢つ張り……私のと同樣にあまり善くはありませんのね　明日は御一緒に學校へ參りませう。もうこれで二人はお友達になつたのですものねえ。』

マリアンナとネヅダーノフとは家の方へ近づいた。ワレンチーナ・ミハーロウナは露臺から遠目鏡で二人を見守つてゐた。そしていつものゆかしい微笑を漏らし乍ら靜かに頭を振つた。やがてシブヤーギンが先に座について、お茶の仲間入に來合せた一人の齒の拔けた隣人と話して居る客間へと、ガラス戸を開け放つた入口から這入り乍ら、彼女は高い物憂い調子で一語々々をはつきりと發音させて言つた。『夜の空氣は何て濕つぽいことでせう！ 危險ですわ！』

マリアンナはネヅダーノフを見た。と一方では折よく相手から話の切れ間を獲えたシブヤーギンが横目と上目を使つたほんのお役目的な一瞥を夫人の上に與へた。さうして置いて今度はその同じ冷やかな睡たさうな、併し透徹つた視線を、暗い庭から這入つてくる若い二人の上へ向け變へた。

十四

二週間以上が過ぎ去つた。萬事がいつもの調子に運ばれた。シブヤーギンは大臣のやうではなくとも少くとも局長のやうな態度で其日の任務を處置した。そしてそれと同じ高尚な深切な而も幾分氣むづかしい態度を保つてゐた。コーリヤは自分の課業を勉強した。アンナ・ザハローウナは斷えず忿怒を抑へつけていら〳〵してゐた。訪問客がやつて來た。話をした。骨牌で小競會をやつた。そして見たところ少しも退屈してはゐなかつた。ワレンチーナ・ミハーロウナは愉快さうな中に何處となくさう性の惡くない皮肉の樣な或る物の影が混つては居たが、それでも相變らずネヅダノーフを慰みにしてゐた。マリアンナとネヅダーノフとは案の通り親密になつた。そして彼の驚いたのは彼女の氣分が全く平靜を保つてゐて、烈しい反抗にも陷らず何事に就いても彼と相語る事を得しめた事である。彼女と連立つて二度までも彼は學校を參觀した。併し最初の參觀で、彼は自分などに其處では何事も成し得ないといふ事を確信した。かの補祭先生がシブヤーギンの協贊を得て實際自分の望み通り其學校を全然自分の有に歸してゐた。この長老先生は舊い遣方ではあつたけれど兎に角讀み方と書き方

とを上手に敎へて居た。併し試驗の時になると彼は思ひ切つて馬鹿らしい問題を提出するのであつた。例へば或日彼はガラセイに尋ねた。『大空の水といふ句を說明せよ』此れに對してガラセイはその同じ長老先生の敎へに從つて答へるのであつた。『それは說明の出來ない事であります。』

そればかりでなく學校は例によつて其後直ぐに――暑中の爲め――秋まで休みとなつた。

バークリンや其他の連中の勸告を思つてネヅダーノフも亦農民と友達にならうとした。けれども直ぐに彼は彼の觀察力の及ぶ限り彼等を研究する事は出來るが、傳導の事業は少しも出來ないと云ふ事を悟つた。彼は全半生を殆ど町で暮した。隨て彼と田舍人との間には越える事の出來ない大きな溝が橫つてゐた。

ネヅダーノフは醉つぱらひのキーリルや又はメンデレイとさへ言葉を交へるまで漕ぎつけた。けれども、奇妙な事には、彼は恰も彼等を怖れてゐるやうであつた。そして或る甚だ一般的な簡單な惡弊の外彼は彼女から何物をも得るところがなかつた。フイチュエフといふ他の一人の百姓は又徹頭徹尾彼を惱ました。

此の百姓は殆ど山賊の首魁でゝもあるかのやうに並外れた精力ある顏をしてゐた……。